

岩手県立農業試験場研究報告  
第23号113-185(1982)

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究 第3報 有効磷酸目標設定方式による土壤改良法

\* \*  
千葉 明・白旗秀雄・石川格司・新毛晴夫  
\*\*\* \*\*\*  
千葉行雄・宮下慶一郎

Fundamental Researches for Deciding the Standards  
of Upland Soil Amendment  
(III) Methods of Phosphate Application to  
Control the Available Phosphate Content  
in the Soil

by

Akira CHIBA, Hideo SHIRAHATA, Haruo SHINKE  
Yukio CHIBA and Keiichiro MIYASHITA

### 目 次

I 緒 言	イ. 各種磷酸質土壤改良資材の施用に伴う 土壤pHの変動
II 磷酸欠乏土壤改良対策	ウ. 硅酸質肥料の施用に伴う土壤pH及 び磷酸吸収係数の変動
1. 主要火山灰土壤の分布と特徴	エ. 有効磷酸目標設定方式による土壤改良 試験
2. 磷酸欠乏土壤の改良法	III 磷酸欠乏土壤改良対策総合考察
(1) 土壤中に有効磷酸を含まぬ場合の改良法	IV 要 約
ア. 主要野菜に対する土壤改良効果	V 引用 文 献
イ. 土壤改良の持続効果解析に関する試験	VI 英文 摘 要
(2) 有効磷酸目標設定方式による土壤改良法	
ア. 磷酸質土壤改良資材による土壤型別 有効磷酸の富化量調査	

\* 現岩手県立農業短期大学校

\*\* 現岩手県立農業試験場、県南分場

\*\*\* 現岩手県立農業試験場、県北分場

## I 緒 言

岩手県は火山灰土壌の分布が広く、畑土壌の低位生産性の原因はこの火山灰土壌の劣悪性、とくに化学的性質の劣悪性に起因する所が少なくなく、その改良対策について多くの検討も行なわれて来た。とくに磷酸欠乏土壌の改良対策については、開拓地土壌調査事業実施時期である昭和20年代から多くの試験が行われて来た<sup>1)</sup>。しかし、土壌の化学性に、より密着した土壌改良法の研究が本格的に行なわれたのは昭和37年以降の東北農試山本毅らの研究であり<sup>2) 3)</sup> 岩手県でもこの方法を現地において確認し、いわゆる「土壌改造技術」としてこれを県下に普及した。

本技術は、土壌中に有効磷酸を殆ど含まない場合に、土壌の磷酸吸収係数から磷酸所要量を決定する方法が基本であるが、筆者らは、これを土壌の有効磷酸の富化目標を設定する改良法に進め、さらに普通畑作物主体の試験から野菜を重点に検討を進めた。その結果、省資源の観点からもより合理的と考えられる知見を得たのでこれを取りまとめた。

本研究は昭和47年から52年にわたる試験研究成果を主体にとりまとめたものであるが、それ以前に岩手農試において実施された一部の関連試験成績についても統計処理等を行なう等解析を加えた。

本研究の推進に当たっては、農林省農産園芸局、農林水産技術会議から多くのご援助を得ており、感謝の意を表したい。

また本研究の実施に当たっては、元黒沢順平場長のご助言をいただき、県農産普及課長補佐高橋健太朗氏、施肥改善科長遠藤征彦氏の研究に示唆さ

れたところが多く、ここに感謝の意を表したい。

また本研究の取りまとめに当たっては斎藤博之専門研究員、小野剛志技師の協力を得た。記して感謝の意を表する。

## II 磷酸欠乏土壌改良対策

### 1. 主要火山灰土壌の分布と特徴

岩手県内には、県北部一帯および奥羽山麓とこれに連なる台地を中心に火山灰が広く分布し、しかもこの火山灰は、噴出源の違いによって性質の異なることは、すでに黒沢らにより明らかにされている。これら火山灰の理化学性の違いは、主に、土性、土壌反応、塩基含量、微量元素含量によって分けられるが、磷酸吸収係数が高く有効磷酸の少ないことはほぼ共通な性質である。

黒沢<sup>4)</sup>は、これら火山灰を噴出源の違いから8タイプに分類しているが、畑土壌として最も特徴的であり、しかも分布面積の広い火山灰土壌として、次の三者をあげることができる。

#### (1) 岩手山系火山灰土壌

岩手山の噴出にかかる火山灰土壌で、噴出年代によって、理化学性は著しく異なり、石塚は噴出年代の違いからこれをA・B・Cの3統に分類している。(その後井上らは<sup>6) 7)</sup>、岩手火山灰のC統は駒ヶ岳火山灰である可能性が強いことを明らかにしている。) 岩手火山灰は、盛岡市と岩手郡下を中心に広く分布するが、滝沢村周辺の代表的土壌(B統)の性格を示したのが表-1である。

岩手火山灰は、母岩が塩基性岩であり<sup>8)</sup>、また噴出年代が比較的新しいために<sup>9)</sup>、置換性塩基、とくに石灰と苦土が豊富で、反応は中性に近い。しかし加里が欠乏し、また土層中にスコリア

表-1 岩手山系火山灰土壌

岩手郡滝沢村砂込(畑)

層位	p H		腐植 (%)	全窒素 N (%)	全炭素 C (%)	C / N	塩基置換容量 (me)	置換性塩基 (mg%)			有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg-%)
	H <sub>2</sub> O	KCl						CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	
I	6.1	5.4	11.55	0.53	6.70	12.6	28.3	334	39	7	2,340 2.4
II	6.6	5.8	12.11	0.52	7.02	13.5	32.0	431	54	4	2,580 2.4
III	6.6	5.8	7.56	0.26	4.38	16.8	23.8	291	39	4	2,600 1.2
IV	6.7	6.0	7.11	0.32	4.12	12.9	23.1	362	24	4	2,560 0.4
V	6.8	6.0	3.78	0.17	2.19	12.9	21.6	270	23	4	2,560 0.4

を含み、時にはスコリア層が出現する地域もあり、(A統)、このような所では、旱魃による生育阻害が著しい。そのほか、磷酸吸収係数が高く、有効磷酸が少ないと見られる。

さらに微量要素では、マンガンと硼素の欠乏症の発生が認められる<sup>10)</sup>。

## (2) 烧石岳系火山灰土壤

表-2 烧石岳系火山灰土壤

胆沢郡胆沢町五本松(畑)

層位	pH		腐植 (%)	全窒素 N (%)	全窒素 C (%)	C/N	塩基置換容量 (me)	置換性塩基 (mg%)			磷酸吸収係数	有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	1:10 HCl 可溶銅 Cu (ppm)	0.1 N HCl 可溶銅 Cu (ppm)
	H <sub>2</sub> O	KCl						CaO	MgO	K <sub>2</sub> O				
I	5.6	4.7	13.0	0.40	7.54	18.9	24.5	223	Tr.	39	1,740	Tr.	4.4	0.1
II	4.8	4.5	10.3	0.26	5.97	23.0	22.5	38	11	27	2,040	"	-	-
III	4.9	4.2	4.4	0.16	2.55	15.9	18.5	34	10	15	2,040	"	-	-
IV	4.9	4.4	1.6	0.07	0.93	13.3	16.6	41	20	8	1,640	"	-	-
V	5.0	4.5	1.8	0.07	1.04	14.9	8.0	27	23	11	1,440	"	-	-

## (3) 十和田、八甲田系火山灰土壤<sup>15)</sup>

県北部に広く分布する火山灰で、その範囲は二戸郡の北部から、九戸郡および久慈市にわたっている。噴出源は十和田、八甲田山系と見られ、下層に浮石層が出現する。岩手火山灰あるいは焼石火山灰に比べ磷酸吸収係数はやや低い。また置

換性塩基が比較的少ないにもかかわらず、酸性は概して弱い傾向が見られる。

微量元素では、銅欠乏<sup>16)</sup>と硼素欠乏が見られ、<sup>17)</sup>とくに銅欠乏は、焼石岳系火山灰と、本土土壤系統とが二大発生地域の土壤として注目されている。

表-3 十和田、八甲田系火山灰土壤

九戸郡蛭米町高清水(畑)

層位	pH		腐植 (%)	全窒素 N (%)	全窒素 C (%)	C/N	塩基置換容量 (me)	置換性塩基 (mg%)			磷酸吸収係数	有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	1:10 HCl 可溶銅 Cu (ppm)	0.1 N HCl 可溶銅 Cu (ppm)
	H <sub>2</sub> O	KCl						CaO	MgO	K <sub>2</sub> O				
I	6.7	5.3	8.3	0.44	4.81	10.9	16.9	222	8	14	1,340	5.2	6.3	0.1
II	6.4	5.3	6.2	0.39	3.60	9.2	16.7	164	9	9	1,560	0.8	-	-
III	6.1	5.5	6.2	0.36	3.60	10.0	16.9	127	10	11	2,080	0.7	-	-

以上の3種類の代表的火山灰土壤は、磷酸吸収係数が全般に高めで有効磷酸が欠乏していることは共通な性質であるが、置換性塩基や微量元素含量には特徴的な差があり、これも作物の生育を規制している大きな要因になっている。

畑土壤の改良に当っては、土壤酸性、置換性塩基含量とそのバランス、微量元素含量、それに有

効磷酸含量などを適切に保つようにしなければならないが、本報告においては磷酸問題を重点に検討した結果を報告する。

## 2. 磷酸欠乏土壤改良法

本県の畠面積 64,000ha のうち、火山灰土壤は 36,000ha に及び、このことはかつて、開拓地土壤調査事業においても重点的な検討項目となつた。

しかし当時の肥料情勢からいっても、磷酸肥料を土壤改良資材と考えて多量投入するという考え方ではなく、むしろ如何に効率良く使うかということに研究の重点がおかれた。このことは供試した作物が、麦、大豆等の普通作物が多く、野菜に比べて一般に磷酸に対する感応性が低く、かつ経済的にも有利性が認められなかつたということにも原因があったと考えられる。

その後、山本らは<sup>2)3)</sup>、普通畠作物においても磷酸多投による土壤改良効果が著しいことを明らかにしたが、筆者らは、さらに農業経営上明らかに有利と思われる野菜類を作付対象に取り入れて、磷酸欠乏土壤の改良法と、さらに一步進めた土壤中の有効磷酸の計画的な富化方法を樹立しようとした。

表-4 試験地土壤の化学性

層位	層厚 (cm)	土性	腐植	pH		置換 酸度 Y <sub>1</sub>	塩基 置換 容量 (me)	置換性塩素(mg%)			石灰 飽和度 (%)	磷酸 吸収 係数	有効 磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	仮比重
				H <sub>2</sub> O	HCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O				
I	0~15	L	11.6	6.1	5.4	0.4	28.3	334	39	7	42	2,400	Tr.	0.696
II	15~26	L	12.1	6.6	5.8	0.2	32.0	431	54	3	48	2,720	"	-
III	26~44	L	7.6	6.6	5.8	0.5	23.8	291	39	4	44	2,760	"	-

磷酸質土壤改良資材（以下磷酸質資材と略記）  
投入量の算定：

磷酸質資材の投入量は、作土 10cm 相当の土量と、磷酸吸収係数から算定した。すなわち、作土 10cm 相当の投入量は、磷酸吸収係数の 1% 施用の場合、  
 $2,400 \times 0.01 \times 0.696 = 16.70 \text{ kg P}_2\text{O}_5/10a$  とし、  
 (燃吸) (1%) (仮比重)

本試験では磷酸吸収係数の 1.5~12% の P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> を投入した。施用磷酸は pH が低くないので過石・

熔燃比を 1:2 とし、通常の 1:4 よりも過石比を高めた。

共通施肥量、N = 5.5 + 7.0 K<sub>2</sub>O = 3.0  
 $(kg/10a)$  堆肥 2 t

試験成績  
収量成績を表-5 に示した。

表-5 収量成績

(kg/10a)

区名	全重	総雌穂重	有効雌穂重	全重比	有効雌穂重比	磷酸質資材施用量( $P_2O_5$ )
1. 未改良	1,971	695	535	100	100	12.5
2. 磷吸1.5%改良	3,372	981	857	171	160	25.1
3. " 3.0 "	4,075	1,141	1,014	207	190	50.1
4. " 6.0 "	3,993	1,112	953	203	178	100.2
5. " 12.0 "	4,098	1,160	1,047	208	196	200.4
6. " 6.0 + 堆肥	4,132	1,194	1,060	210	199	100.2

## 考 察

磷酸質資材の投入増はスィートコーンの生育を旺盛にし、磷吸6%改良区の乱れはあるが、増施区程有効雌穂重は増加し、磷酸吸収係数の12%投入区では、未改良区のほぼ2倍量の収量になっている。また堆肥2t併用の効果も認められている。

(イ) 短根にんじんに対する土壤改良の効果(昭43)

試験場所；岩手郡滝沢村、農試圃場

供試作物；短根にんじん

(チャンテネーインプルーブド)

土壤条件；腐植質火山灰土壤

表-6. 試験地土壤の化学性

層位	層厚(cm)	土性	腐植(%)	pH		塩基置換容量(me)	置換性塩基(mg%)			石灰飽和度(%)	磷酸吸収係數	有効磷酸 $P_2O_5$ (mg%)	仮比重
				H <sub>2</sub> O	KCl		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O				
I	0~15	L	11.6	6.2	5.4	28.3	238	20	15	35	2,220	Tr.	0.70
II	15~26	L	12.2	6.6	5.8	32.0	431	54	3	58	2,720	"	-
III	26~44	L	7.6	6.6	5.8	23.8	291	39	4	55	2,760	"	-

磷酸質資材投入量と施肥量：

作土10cm相当の磷酸吸収係數の2.5~10%の $P_2O_5$ を、仮比重を勘案して施肥。磷酸吸収係數の1%相当 $P_2O_5$ は15.4kg/10aである。なお $P_2O_5$ は、過石・熔磷比を1:4として施肥した。

共通施肥量、N = 10+5+3(尿素+硫酸)  
(kg/10a) 基肥 追肥

$P_2O_5$  = 12(過石)

$K_2O$  = 15(塩加)

## 試験成績

収量成績、養分吸収状況、及び跡地土壤分析値を表-7~10に示した。

## 千葉明ほか

表-7. 収量成績

(kg/10a)

区名	正常根	同比	正常根規格別収量					不良根(本)		磷酸質材施用量 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>
			200g以上	150g～200g	100g～150g	50g～100g	50g以下	奇形	腐敗	
1. 未改良	1,452	100	0	0	488	704	260	3,334	0	0
2. 磷吸2.5%改良	1,836	126	50	250	856	550	130	2,792	1,667	38.5
3. " 5.0 "	2,124	146	213	363	881	550	117	2,790	1,042	77.0
4. " 7.5 "	2,200	152	171	354	579	846	250	2,709	625	115.5
5. " 10.0 "	2,113	146	87	416	1,058	452	100	1,667	1,668	154.0

表-8. 養分含有量

(%)

区名	葉			根		
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
1. 未改良	3.10	1.02	6.20	2.40	0.98	5.90
2. 磷吸2.5%改良	3.46	1.38	6.30	2.29	1.16	5.80
3. " 5.0 "	3.54	1.32	6.70	2.27	1.18	5.30
4. " 7.5 "	3.71	1.20	7.75	2.52	1.50	5.75
5. " 10.0 "	3.37	1.24	7.75	2.31	1.42	5.30

表-9. 養分吸収量

(kg/10a)

区名	葉			根			計		
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
1. 未改良	2.28	0.71	6.54	4.77	1.50	8.24	7.05	2.21	14.79
2. 磷吸2.5%改良	2.13	0.75	5.47	4.32	2.16	9.09	6.45	2.91	14.53
3. " 5.0 "	2.44	0.85	6.31	5.37	3.16	12.33	7.81	4.01	18.64
4. " 7.5 "	1.99	0.57	4.84	6.14	3.03	12.61	8.13	3.60	17.45
5. " 10.0 "	1.82	0.74	5.14	5.24	2.67	11.81	7.06	3.41	16.95

表-10. 跡地土壤の化学性

区名	pH		塩基置換容量 (me)	置換性塩基 (mg%)			塩基飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)
	H <sub>2</sub> O	KCl		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
1. 未改良	5.5	4.9	28.5	204	41	18	34	2,140	2.2
2. 磷吸2.5%改良	5.7	5.1	28.8	226	65	24	41	2,100	2.5
3. " 5.0 "	5.9	5.2	30.5	283	89	26	49	2,100	4.9
4. " 7.5 "	6.0	5.3	31.5	317	81	24	50	2,040	6.4
5. " 10.0 "	6.1	5.5	31.8	339	106	29	56	1,950	8.0

## 考 察

短根にんじんに対する磷酸質資材の効果は、磷酸吸収係数の7.5%改良で最高になっているが、これは10%改良において、8月に発生した黒葉枯病の罹病が最も激しかったためであり、初期生育は磷酸多用区程勝った。

収穫期葉中の窒素、加里含有率はほぼ磷酸吸収係数7.5%施用まで、つまり収量に並行して高まる傾向であるが、磷酸には明らかな傾向は見られない。一方、根部においては、磷酸は磷酸吸収係数7.5%施用まで収量に並行して高まっているが、窒素、加里では明らかな傾向は見られない。このような事から三要素吸収量は、収量水準の高い磷酸吸収係数の5%改良、あるいは7.5%改良で多くなっているが、磷酸の吸収量は、施用磷酸が多い割には大幅な増え方はしていない。しかし、磷酸質資材の多用によってpHの上昇、置換性石灰及び苦土の増加、磷酸吸収係数の低下、有効磷酸

の富化が認められる。この事は、後にも検討するように種子内に貯蔵養分の少ない野菜での初期生育の良化に大きく影響し、また、後作への好影響もあるものと想定される。

## (ウ) てん菜に対する土壤改良の効果

(昭39)

試験場所：岩手郡滝沢村、南部開拓地圃場

供試作物：てん菜（導入2号）

土壤条件：腐植質火山灰土壤

## 磷酸質資材投入量と施肥量（表-12）

作土10cm相当の磷酸吸収係数の3.8～7.7%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を、仮比重を勘案して施用した。磷酸吸収係数の1%相当P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>は13kgである。4区は作土30cmに対し7.7%改良を行ったので作土10cmに対し23.1%改良に相当する。

P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>は過石、熔磷比を1:4とし、磷酸質資材は作土全層に投入混合した。

表-11 土壤の化学性

層位	層厚(cm)	土性	腐植(%)	pH		置換酸度Y <sub>1</sub>	塩基置換容量(me)	置換性塩基(mg%)				塩基飽和度(%)	磷酸吸収係数	有効磷酸P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	仮比重
				H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O				
I	0～15	L	9.2	6.2	5.2	1.9	18.8	278	18	15	3	60	1,860	1.2	0.70
II	15～25	L	12.1	6.4	5.6	4.6	21.2	368	52	9	4	75	2,100	0.8	-
III	25～	L	4.7	6.5	5.6	3.1	16.2	274	44	9	4	84	2,220	0	-

表-12. 土壤改良資材投入量と施肥量

(kg/10a)

区分	土壤改良資材			基肥		
	カル	堆肥	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
1. 未改良	300	1,800	0	10	12	8
2. 磷吸3.8%改良	100	1,800	50	10	12	8
3. " 7.7%改良	0	4,000	100	10	12	8
4. " 23.1%改良深耕	0	4,000	300	10	12	8
5. " 7.7%深耕無堆肥	0	0	100	10	12	8

注) 炭カルはpH(H<sub>2</sub>O)6.5矯正目標、基肥はビート化成

## 試験成績

収量成績及び跡地土壤の分析値を表-13~15に示した。

表-13 収量成績

(kg/10a)

区分	葉穎重	根重	同比	T/R	備考
1. 未改良	1,516	2,737	100	0.55	深耕は30cm
2. 磷吸3.8%改良	1,899	3,323	121	0.57	
3. " 7.7%改良	2,207	4,447	162	0.50	
4. " 23.1%改良・深耕	1,857	4,113	150	0.59	
5. " 7.7%改良・無堆肥	1,465	3,430	125	0.43	

注) 1~4区2連、5区1連平均値

表-14 分散分析(根重)

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全 体	7	3,638,136		
処理	3	3,580,868	1,193,623	83.37 **
誤 差	4	57,267.5	14,317	

$$F_4^3(0.01) = 16.7 \quad sd = 120 \quad lsd \quad 5\% = 332 \text{ kg/10a}$$

$$lsd \quad 1\% = 551 \text{ kg/10a}$$

注) 1~4区2連成績より処理

表-15 跡地土壤の化学性

区分	pH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 (me)	置換性塩基(mg%)				石灰 飽和度 (%)	磷酸吸收 係 数
	H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O		
1. 未改良	6.7	5.8	6.1	19.6	270	19	28	5	57	1,640
2. 磷吸7.7%改良	6.6	5.5	5.0	18.5	651	29	46	5	137	1,180
3. " 23.1%改良深耕	7.2	6.3	5.3	26.1	497	39	37	6	79	800

## 考 察

(エ) 県内各地における土壤改良試験の要約

てん菜に対する磷酸質資材及び堆肥の効果はいずれも明らかである。しかし、磷酸投入量3倍、30cm深耕区では、標準量(磷酸吸收係数の7.7%改良、10cm相当投入)に比らべてむしろやや低収である。この理由は明らかでないが、土壤改良の方法としては、磷酸質資材の極多量、深耕という手段は必ずしも必要でないかも知れず、さらに検討が必要である。

試験結果を表-16に示した。

ここには、磷酸吸收係数の10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を投入したうえ堆肥を増施した試験も含まれているが、土壤改良効果は高く、とくに短根にんじん、レタスなどの野菜類で効果が高い。

なお、土壤改良の効果を収量指数で分散分析を行なった結果では、未改良区と土壤改良区、未改良区と土壤改良+堆肥区、さらに以上両者を合した区間についていずれも1%水準で有意の差が見られた。(表-17~19)

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-16 現地圃場における土壤改良効果

(改良初年目)

作物	収量 (kg/10a)	未改良 対比	過石:熔燐	堆肥施用量 (t/10a)	試験場所	試験年次
1. 芸 菜	5,159	111	1:4	+ 2.5	滝沢村	昭40
2. "	4,644	130	"	"	遠野市	"
3. "	4,766	126	"	"	岩手町	"
4. "	4,400	121	"	"	一戸町	"
5. "	3,566	122	"	"	大野村	"
6. "	5,081	136	"	"	普代村	"
7. "	4,933	129	"	+ 2	安代町	41
8. "	3,735	132	"	0	零石町	"
9. 短根にんじん	2,595	145	1:4	+ 2	松尾村	49
10. "	2,257	183	"	0	滝沢村	43
11. "	848	163	"	0	金ヶ崎町	"
12. 青刈とうもろこし	13,822	130	1:4	+ 2	大野村	49
13. "	11,735	120	ようりん単用	+ 1	一戸町	"
14. "	8,388	115	1:4	0	滝沢村	43
15. "	7,897	202	"	0	金ヶ崎町	"
16. レタス	2,547	204	ようりん単用	+ 2	一戸町	49
17. "	3,073	175	1:4	0	岩手町	48
18. ばれいしょ	3,122	131	1:4	0	滝沢村	42
19. "	1,704	167	"	0	金ヶ崎町	"
20. 陸稲	352	91	1:4	0	滝沢村	43
21. "	319	120	"	0	金ヶ崎町	"

注) 改良区は磷酸吸収係数の10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を施用

表-17 未改良区と土壤改良区の分散分析

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全 体	19	22,595		
処理	1	11,472	11,472	18.57 **
誤 差	18	11,123	618	

$$sd = 11,117, lsd 5\% = 23.4\%, F_{18}^1 (0.01) = 8.29$$

表-18 未改良区と(土壤改良+堆肥)区の分散分析

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全 体	21	12,542		
処 理	1	6,358	6,358	20.56**
誤 差	20	6,184	309	

$$sd = 7.498 \quad lsd 5\% = 15.64\% \quad F_{20}^1 (0.01) = 8.10$$

表-19 未改良区と土壤改良区+(土壤改良+堆肥)区の分散分析

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全 体	41	35,643		
処 理	1	17,324	17,324	37.83**
誤 差	40	18,319	458	

$$sd = 6.604 \quad lsd 5\% = 13.35\% \quad F_{40}^1 (0.01) = 7.31$$

注) 表-17~19は各作物の収量指標より分散分析を行なった。

#### イ. 土壤改良の持続効果解析に関する試験

磷酸多肥を主体にした土壤改良は、投入する資材量が多量になるため、経済性からも効果が長期にわたることが望まれる。この点についての検討を行なった。

##### (ア) 野菜を中心とした長期持続効果

(昭40~51)

試験場所：岩手郡滝沢村、農試圃場

供試作物：スィートコーンー小麦ー白菜ー短根にんじんーレタスー白菜ーきゅうりートマトーばれいしょー白菜ー大根ー大豆ーレタス

土壤条件：腐植質火山灰土壤(表-20)

#### 土壤改良資材投入量

作土10cm相当の土量について、仮比重を勘案し、次のように施用した。

未改良区は磷酸吸収係数の0.75%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>施用したが、これはほぼ普通施肥量であり、改良区は磷酸吸収係数の1.5~12%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を施用した。

なお磷酸吸収係数の1%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>は、10a当たり16.7kgである。また過石・熔磷比は1:2とし、磷酸資材は試験初年目のみ施用、以後残効を調査し、6区の堆肥は毎作10a当たり1tを施用した。

また、第2作以降の磷酸は普通施肥量として毎作に施用している。

表-20 試験地土壤の化学性

層位	層厚 (cm)	土性	腐植 (%)	pH		置換 酸度 Y <sub>1</sub>	塩基 置換 容量 (me)	置換性塩基(mg%)			石灰 飽和度 (%)	磷酸 吸収 係数 (%)	仮比重
				H <sub>2</sub> O	KCl			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
I	0~15	L	11.6	6.1	5.4	0.4	28.3	334	39	7	42	2,400	Tr.
II	15~26	L	12.1	6.6	5.8	0.2	32.0	431	54	3	48	2,720	"
III	26~44	L	7.6	6.6	5.8	0.5	23.8	291	39	4	44	2,760	"

(試験開始前)

## 試験成績

収量の経年変化を表-21に示した。

表-21 収量の経年変化

(kg/10a)

区 名	スイートコーン (40年)		小 麦 (40年)		白 菜 (41年)		短根にんじん (42年)		レタス (43年)	
	雌穗重	比	子実重	比	結球重	比	根重	比	結球重	比
1. 磷吸 0.75 %	658	100	286	100	1,235	100	991	100	1,857	100
2. " 1.5 %	842	128	413	144	2,240	179	1,229	124	2,238	121
3. " 3.0 %	954	145	391	137	4,636	370	1,437	145	2,344	126
4. " 6.0 %	974	148	520	182	5,141	410	1,962	198	3,197	172
5. " 12.0 %	1,105	168	578	202	5,148	411	2,221	224	3,336	180
6. " 6.0 % 堆肥 1t	1,066	162	533	186	4,644	371	1,992	201	4,803	259
共通施肥量 (kg/10a)	N P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> K <sub>2</sub> O	5.5 + 7 0 3	12 12	5 + 4 20 20	15 + 8 15炭カル 150 8	10 + 8 15炭カル 100 12 + 4 + 4	12 + 5 + 3 15 12 + 4 + 4			
品種	ゴールデンクロス バンダム	ナンブコムギ	早生 60 日・白菜	ニューキング チャンテネー	グレートレーク 366					

表-21 (続)

(kg/10a)

区 名	白 菜 (44年)		きゅうり (45年)		トマト (46年)		ばれいしょ (47年) *	
	結球重	比	果重	比	果重	比	上いも重	比
1. 磷吸 0.75 %	2,803	100	3,844	100	-	100	2,156	100
2. " 1.5 %	2,999	107	3,844	100	-	129	2,491	116
3. " 3.0 %	3,448	123	4,728	123	-	125	2,572	119
4. " 6.0 %	4,008	143	4,920	128	-	127	2,713	126
5. " 12.0 %	4,261	152	5,266	137	-	152	2,647	123
6. " 6.0 % 堆肥 1t	4,344	155	6,612	172	-	128	2,693	137
共通施肥量 (kg/10a)	N P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> K <sub>2</sub> O	15 + 8 ※ 20 15 + 6	13 + 3.5 + 3.5 10 + 0.3 + 0.3 20 + 3 + 3 (6区 堆肥 3t)	1 - -			6 + 4 15 15	
品種	松島交配 仲秋	ときわ北星号		-			男しゃく	

表-21(続)

(kg/10a)

区名	白菜 (48年)		大根 (49年)		大豆 (50年)		レタス (51年)	
	結球重	比	根重	比	子実重	比	子実重	比
1. 燐吸 0.75%	3,765	100	6,233	100	209	100	3,072	100
2. " 1.5%	3,902	104	5,944	95	253	121	2,763	90
3. " 3.0%	3,960	105	6,082	98	253	121	3,032	99
4. " 6.0%	5,400	143	6,177	99	245	117	3,993	130
5. " 12.0%	6,725	179	6,257	100	273	131	3,691	120
6. " 6.0% 堆肥1t	7,367	196	5,944	95	320	155	4,192	136
N 共通施肥量 (kg/10a)	15 + 8 20 K <sub>2</sub> O 15 + 6	10 + 10 12 10 + 10		3 12 10		15 + 5 12 12 + 4		
品種	松島交配仲秋	大蔵	白目長葉	グレートレイク366				

(50年に炭カル及び硫酸苦土を補給)

表-22 土壤改良の持続効果分散分析(収量比)

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全體	7 7	358,409		
処理	5	70,035	14,007	3.50**
誤差	7 2	288,375	4,005	

$$sd = 24.82 \quad lsd 5\% = 49.65\% \\ lsd 1\% = 65.78\% \\ F_{72}^5 (0.01) = 3.34$$

表-23 燐吸6%相当施用時における堆肥併用の効果

作物	1作 スイート コーン	2作 小麥	3作 白菜	4作 にんじん	5作 レタス	6作 白菜	7作 きゅうり	8作 トマト	9作 ばれい しょ	10作 白菜
堆肥加用	109	102	99	102	151	108	134	101	109	137

表-23(続)

(堆肥無施用区に対する収量比%堆肥施用量1t/10a)

## 分散分析

作物	11作 大根	12作 大豆	13作 レタス	項目	自由度	平方和	分散	分散比
	全體	處理	誤差		25	5,111		
堆肥加用	96	132	105	全體	1	1,316	1,316	8.33**

$$sd = 4.93 \\ lsd 5\% = 10.18 \quad lsd 1\% = 13.79 \\ F_{24}^1 (0.01) = 7.28$$

表 24 跡地土壤分析成績

区 名		pH		置換性塩基 (mg%)			Ca/Mg (当量)	磷酸吸收 係 数	有 効 磷 $P_2O_5$ (mg%)
		H <sub>2</sub> O	KCl	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
昭和年	1. 磷吸 0.75 %	4.85	4.15	90	3	22	21.4	—	10.4
	2. " 1.5 %	4.65	4.12	74	2	23	26.4	—	14.4
	3. " 3.0 %	5.00	4.28	130	3	26	30.9	—	17.6
	4. " 6.0 %	5.10	4.30	146	3	28	34.7	—	20.8
	5. " 12.0 %	5.05	4.28	146	3	25	34.7	—	22.4
	6. " 6.0 % 堆肥 1t	5.00	4.25	152	5	27	21.7	—	22.4
昭和年	1. 磷吸 0.75 %	4.60	4.20	72	3	35	17.1	1,640	5.1
	2. " 1.5 %	4.75	4.20	94	4	56	16.8	1,640	6.4
	3. " 3.0 %	4.80	4.20	94	3	13	22.3	1,680	7.4
	4. " 6.0 %	4.90	4.25	131	4	35	23.4	1,660	7.8
	5. " 12.0 %	4.80	4.20	144	3	34	34.3	1,640	10.2
	6. " 6.0 % 堆肥 1t	4.65	4.20	134	5	29	19.1	1,540	9.4
昭和年	1. 磷吸 0.75 %	6.60	5.63	482	6	54	57.3	1,800	6.0
	2. " 1.5 %	6.05	5.25	332	5	58	47.4	1,820	6.0
	3. " 3.0 %	6.51	5.52	359	5	66	51.2	1,780	7.0
	4. " 6.0 %	6.20	5.32	407	6	52	48.4	1,700	8.2
	5. " 12.0 %	6.31	5.38	332	5	42	47.4	1,710	9.4
	6. " 6.0 % 堆肥 1t	6.89	5.79	507	9	66	40.2	1,570	9.5

## 考 察

昭和 40 年から同一圃場において土壤改良の持続効果を検討した結果によれば、昭和 48 年第 10 作の白菜作まで、土壤改良資材の施用量が増すにつれ収量が増加し、しかも增收率もかなり高い傾向である。しかし 49 年 11 作大根では、区間差は殆どなく、跡地土壤分析の結果では、置換性石灰および苦土含量が著しく少ないと認められたので、12 作の大根に炭カルと硫酸苦土を補給している。その結果、一部乱はあるが、再びほぼ磷

酸質資材の施用量の多いほど增收の傾向になっている。

また、堆肥併用の効果も顕著であり、土壤も置換性石灰、加里含量が高く、磷酸吸收係数の低下と有効磷酸の増加が認められる。

以上のように、土壤中に有効磷酸を殆ど含まない火山灰畑土壤において、作土 10 cm 相当の土量について磷酸吸收係数の 10 % 前後の  $P_2O_5$  を過石、熔燒比を 1 : 2 ~ 4 で施用すると、その効果は長年にわたり持続する。

農試本場の試験成績から見ると、10作程度でもなお明らかな残効が認められる。そして、その肥効が小さくなるのは、磷酸の影響よりはむしろ石灰、苦土等の塩基類が少なくなるためで、これを補給すれば、磷酸の肥効はさらに持続する傾向である。また堆肥1tの併用効果も大きく、収量的にも、土壤の化学性に及ぼす影響も明らかである。なお硫酸苦土による苦土の補給は<sup>22)</sup>、单年度の効果は認められるものの、跡地土壤を見ると、意外に置換性苦土の富化量は少なくて熔脱が大きく、この点では熔磷のような、溶性苦土の補給の重要性を考えられる。また、農試圃場の場合は、未改良区においても普通施肥としての磷酸は分施されているので、試験開始年の原土に比べれば、有効磷酸量はかなり富化され区間差も小さくなっていることが認められ、また、白菜、レタスに見られるように磷酸施肥による収量差は年次の経過と共に小さくなる傾向である。

なお、1～6処理区の12年間13作の収量比を13反復と見なして分散分析を行なった結果では、各処理間には水準1%の有意差が認められている。

#### (イ) 逐年土壤改良法に関する試験

(昭43～45)

磷酸質資材の施用に当たって、磷酸吸収係数の10%相当量の資材投入を一度に行なった場合、野菜

表-25 収量成績

(kg/10a)

区 名	初年目(43年) 短根にんじん		2年目(44年) 実取とうもろこし		3年目(45年) 小豆		3作 平均 比
	正常根重	比	子実重	比	精子実重	比	
1. 未改良	1,452	100	561	100	97	100	100
2. 改良磷酸3%全面3カ年	1,633	112	610	109	99	103	108
3. " 3%溝3カ年	1,966	135	640	114	88	91	113
4. " 10%全面単年	2,113	146	732	131	98	102	126
共通施肥量 (kg/10a)	N P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> K <sub>2</sub> O	10 + 5 + 3 12 15	10 + 3 12 12	2 12 10			
品種	チャンテネー・ インブルード	交7号		大納言			

注) 2連平均値

類のような収益性の高い作物を導入すれば、短期間に資材費を償還できるし、また普通作物であっても、土壤改良の効果は既に指摘したように長期にわたり持続するから問題は少ないが、農民心として、改良資材量を何年かに分割施用しても良いかどうかがしばしば問題になる。

そこで最も一般的に行なわれる改良目標値である磷酸吸収係数の10%相当の資材量を单年度施用した場合と、 $\frac{1}{3}$ 量ずつを3カ年で分割施用した場合の改良効果を比較検討した。

試験場所；岩手郡滝沢村、農試圃場

供試作物；にんじん-実取とうもろこし-  
小豆

土壤条件；腐植質火山灰土壤

土壤の化学分析値（前試験参照）

土壤改良資材投入量；

作土10cm相当について仮比重を勘案して施用。磷酸吸収係数の1%相当のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>は15.4 kg/10a、過石、熔磷比を1:4で施用。

土壤改良資材投入方法

全量全面散布及び3年分割全面散布、3年分割溝施用の3処理。

試験成績；収量成績及び跡地土壤分析の結果は表-25および、表-27のとおりである。

表-26 収量の分散分析（収量指數）

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全体	11	3,112.9		
処理	3	1,101.6	367.2	1.4606
誤差	8	2,011.3	251.4	

 $sd = 12,946 \quad lsd 5\% = 29.85\%$  $F_{3,8}^3 (0.05) = 4.07$ 

注) 各作物の収量指數を3反復として処理

表-27 跡地土壤分析成績

区名		pH		塩基換算量 (me)	置換性塩基 (mg%)			塩基飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)
		H <sub>2</sub> O	KCl		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
初年目跡地	1. 未改良	5.45	4.89	28.8	204	29	18	32	2,140	8.0
	2. 改良磷酸 3%全面 3年	5.50	5.00	28.9	237	41	23	38	2,030	15.2
	3. " 3%溝、3年	5.85	5.15	31.4	317	41	23	44	1,850	16.0
	4. " 10%全面単年	6.07	5.50	29.2	339	106	29	62	1,950	16.0
2年目跡地	1. 未改良	5.60	4.85	24.2	177	16	15	39	2,300	4.0
	2. 改良磷酸 3%全面 3年	6.02	5.10	27.8	275	18	15	54	2,340	4.0
	3. " 3%溝、3年	6.25	5.32	29.9	319	36	19	60	2,220	5.2
	4. " 10%全面単年	6.38	5.51	29.5	379	78	22	61	2,120	11.6
3年目跡地	1. 未改良	5.60	5.00	18.9	184	23	21	43	2,240	1.6
	2. 改良磷酸 3%全面 3年	5.55	5.30	22.3	294	115	27	53	2,170	7.2
	3. " 3%溝、3年	5.80	5.28	21.8	328	82	27	75	2,260	14.0
	4. " 10%全面単年	6.40	5.51	23.2	351	126	30	84	2,170	4.8

## 考 察

磷酸吸収係数の10%相当の土壤改良を行なう場合、全量单年度施用と、1/3ずつの3年分割施用の収量を比較すると、全量单年度施用が高い。また3年分割施用では、全面施用に比べ、溝施用の収量が高い傾向である。しかし全量单年度施用区の収量水準は、3年目の小豆では他の区との差が少なくなり、結局3作平均収量の分散分析でも有

意な差は見られない。これは他の試験にも見られるように、小豆に対する磷酸多投の効果が全般に小さいことに起因すると考えられる。しかし跡地土壤の分析結果でも、pH、置換性塩基含量、有効磷酸含量など、全量单年度施用区の有利性が認められる。

以上の試験結果から、磷酸質資材の投入方法は、目標投入量全量の单年度施用を原則とし、資材費

の早期回収を図るために、収益性の高い野菜等の導入を図るようにする。なお止むを得ず分割投入を行なう場合には、作物の作付様式によるが、溝施用が有利であると見られる。土壤に施用した磷酸の長期にわたる有効態磷酸含量の追跡についてはBarrow<sup>23)</sup>のとりまとめがあり、磷酸の施肥法についてはSanchezとUehara<sup>24)</sup>のまとめがある。資材の投入方法については、例えば野菜の苗床土における多用とか本畑における局所施肥とか、なお、検討を要すると思われる。

#### (ウ) 作物別土壤改良の効果

磷酸資材による土壤改良は、野菜類、特にレタスなどで効果が高いが、単年度の効果のみをねらうものではなく、当然輪作により各種の作物が組

込まれてくるので、作物別の効果を明らかにする必要がある。そこで、県内各試験地における作物別土壤改良効果をとりまとめた。

表-28は土壤改良初年目と、改良後年数を経たもの、すなわち土壤改良の効果持続を見た成績も一括して含まれている。厳密には、改良初年目の改良効果と、それ以後の残効とを各作物ごとに継続して調査し、肥効を明らかにすべきであるが、これは連作障害等の関係があつて解析が困難であり、また、実際の農家においても適宜輪作体系をとっているので、土壤改良年次に限りなく全部の試験成績を一括して作物別に取りまとめた。収量指標を表-28及び図-1に示した。

表-28 土壤改良の効果 (1)

作物	収量 (kg/10a)	未改良 対比 (%)	改良 年次	試験場所	土壤型	試験 年次	備考 (改良区処理)
短根にんじん	-	198	昭40	滝沢村	腐殖山質灰	昭42	磷酸 6% 改良
"	-	224	"	"	"	"	" 12% "
"	2,113	146	43	"	"	43	" 10% "
"	2,804	143	"	"	"	"	" 10% "
"	1,180	100	"	金ヶ崎町	"	"	" 10% "
"	1,301	240	"	一戸町	"	"	" 10% "
"	2,113	146	"	滝沢村	"	"	" 10% "
"	1,713	269	"	"	"	"	磷酸 10% 改良 加里 + 5kg、炭カルなし
"	584	270	"	金ヶ崎町	"	"	"
"	741	201	"	"	"	44	磷酸 10% 改良
"	1,448	184	"	滝沢村	"	"	" 10% "
"	824	122	44	"	"	"	" 10% "
"	2,763	152	43	金ヶ崎町	"	45	" 10% "
"	3,345	118	"	滝沢村	"	"	" 10% "
"	1,740	190	46	"	"	46	" 10% "
"	2,090	155	"	"	"	"	" 10% "

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-28 土壤改良の効果 (2)

作物	収量 (kg/10a)	未改良 対 % 比	改 良 年 次	試験場所	土 壌 型	試 験 年 次	備 考
短根にんじん	1,738	108	昭 48	岩手町	腐 火 植 山 質 灰	昭 49	磷吸 10 % 改良
"	2,430	136	49	松尾村	"	"	" 5 % "
"	2,466	103	"	"	"	50	" 5 % "
"	1,699	93	50	一戸町	"	51	" 5 % "
ばれいしょ	3,122	131	43	滝沢村	腐 火 植 山 質 灰	43	磷吸 10 % 改良 加里 + 5 kg、炭カルなし
"	1,707	167	"	金ヶ崎町	"	"	"
"	4,721	119	"	"	"	44	磷吸 10 % 改良
"	4,265	120	"	滝沢村	"	"	" 10 % "
"	3,465	119	46	"	"	48	" 10 % "
"	1,495	90	"	"	鉱質火山灰	"	" 10 % "
"	2,713	126	40	"	腐 火 植 山 質 灰	47	" 6 % "
"	2,647	123	"	"	"	"	" 12 % "
てん菜	4,753	117	40	滝沢村	腐 火 植 山 質 灰	40	磷吸 10 % 改良 4000 株/10a
"	5,159	111	"	"	"	"	" 10 % " 6000 株/10a
"	4,860	105	"	"	"	"	" 10 % " 8000 株/10a
"	4,644	130	"	遠野市	"	"	" 10 % " + 堆肥 2.5 t
"	4,766	126	"	岩手町	"	"	" 10 % " +
"	4,400	121	"	一戸町	"	"	" 10 % " +
"	5,081	136	"	普代村	"	"	" 10 % " +
"	3,566	122	"	大野村	"	"	" 10 % "
"	5,333	158	41	滝沢村	"	41	" 10 % " + 堆肥 1.5 t
"	5,159	111	40	"	"	40	" 10 % " + 堆肥
だいこん	6,177	99	40	滝沢村	腐 火 植 山 質 灰	49	" 6 % 改良
"	6,257	100	"	"	"	"	" 12 % "
小麦	520	182	40	滝沢村	腐 火 植 山 質 灰	41	" 6 % 改良
"	578	202	"	"	"	"	" 12 % "
"	480	129	"	"	"	43	" 10 % " + 堆肥 2.5 t
陸稲	546	101	42	滝沢村	腐 火 植 山 質 灰	42	" 6 % 改良

## 千葉明ほか

表-28 土壤改良の効果 (3)

作物	収量 (kg/10a)	未改良 対比 (%)	改良 年次	試験場所	土壤型	試験 年次	備考
陸 稲	331	75	昭 43	滝沢村	腐植質火山灰	昭 43	磷吸 10% 改良
	376	120	"	金ヶ崎町	"	"	" 10% "
	376	120	"	"	"	"	" 10% "
	352	91	"	滝沢村	"	"	磷吸 10% 改良 加里+ 5kg、炭カルなし
	319	120	"	金ヶ崎町	"	"	" 10% " "
	410	115	"	"	"	44	" 10% 改良
	317	119	"	"	"	"	" 10% "
	488	104	"	滝沢村	"	"	" 10% "
	348	113	"	"	"	"	" 10% "
	351	103	46	"	"	48	" 10% "
とうもろこし	355	107	"	"	鉱質火山灰	"	" 10% "
	1,047	196	40	滝沢村	腐植質火山灰	40	" 6% 改良
	1,014	190	"	"	"	"	" 3% "
青とうもろこし 刈	732	131	43	"	"	44	" 10% "
	7,900	119	40	滝沢村	腐植質火山灰	42	" 10% 改良
	8,388	115	43	"	"	43	磷吸 10% 改良 加里+ 5kg、炭カルなし
	7,894	202	"	金ヶ崎町	"	"	" 10% " "
	6,220	116	"	"	"	44	" 10% 改良
	8,736	131	"	滝沢村	"	"	" 10% "
	10,733	101	49	大野村	"	49	" 5% "
	7,149	140	"	"	"	50	" 5% "
	12,499	91	50	一戸町	鉱質火山灰	"	" 5% "
	6,666	97	"	"	"	51	" 5% "
ソルガム	10,358	150	40	滝沢村	腐植質火山灰	44	" 10% 改良+堆肥
	5,813	166	43	金ヶ崎町	"	45	" 10% 改良
	7,805	106	"	滝沢村	"	"	" 10% "
	7,650	130	46	"	鉱質火山灰	46	" 10% "

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-28 土壤改良の効果(4)

作物	収量 (kg/10a)	未改良 対比 (%)	改良 年次	試験場所	土壤型	試験 年次	備考
ソルガム	9,209	118	昭46	滝沢村	腐植質火山灰	昭46	磷吸10%改良
大豆	375	122	40	滝沢村	腐植質火山灰	41	" 10%改良+堆肥
"	245	117	"	"	"	50	" 6%改良
"	273	131	"	"	"	"	" 12% "
小豆	170	183	40	滝沢村	腐植質火山灰	41	" 10%改良+堆肥
"	101	100	43	"	"	45	" 10%改良
"	149	92	44	"	"	"	" 10% "
"	143	121	43	"	"	"	" 10% "
"	100	138	"	金ヶ崎町	"	"	" 10% "
"	143	121	"	滝沢村	"	"	" 10% "
菜豆	127	140	46	滝沢村	腐植質火山灰	47	" 10%改良
"	139	111	"	"	鉱質火山灰	"	" 10% "
きゅうり	4,920	128	40	滝沢村	腐植質火山灰	45	" 6%改良
"	5,266	137	"	"	"	"	" 12% "
トマト	-	127	"	滝沢村	腐植質火山灰	46	" 6%改良
"	-	152	"	"	"	"	" 12% "
レタス	3,197	172	"	滝沢村	腐植質火山灰	43	" 6%改良
"	3,336	180	"	"	"	"	" 12% "
"	2,919	294	43	金ヶ崎町	"	45	" 10% "
"	4,373	248	"	滝沢村	"	"	" 10% "
"	3,650	166	46	"	"	47	" 10% "
"	2,699	124	"	"	鉱質火山灰	"	" 10% "
"	3,993	130	40	"	腐植質火山灰	51	" 6% "
"	3,691	120	"	"	"	"	" 12% "
"	3,073	175	48	岩手町	"	48	" 10% "
"	2,122	170	50	一戸町	"	50	" 5% "
白菜	5,141	410	40	滝沢村	腐植質火山灰	41	" 6% "

表-28 土壤改良の効果(5)

作物	収量 (kg/10a)	未改良 対比 (%)	改 良 年 次	試 験 場 所	土 壤 型	試 験 年 次	備 考
白 菜	3,976	142	昭 40	滝沢村	腐植質火山灰	昭 43	燐吸 6% 改良
"	4,272	152	"	"	"	"	" 12% "
"	5,400	143	"	"	"	48	" 6% "
"	6,725	179	"	"	"	"	" 12% "
かんらん	5,789	94	48	岩手町	腐植質火山灰	50	" 10% "

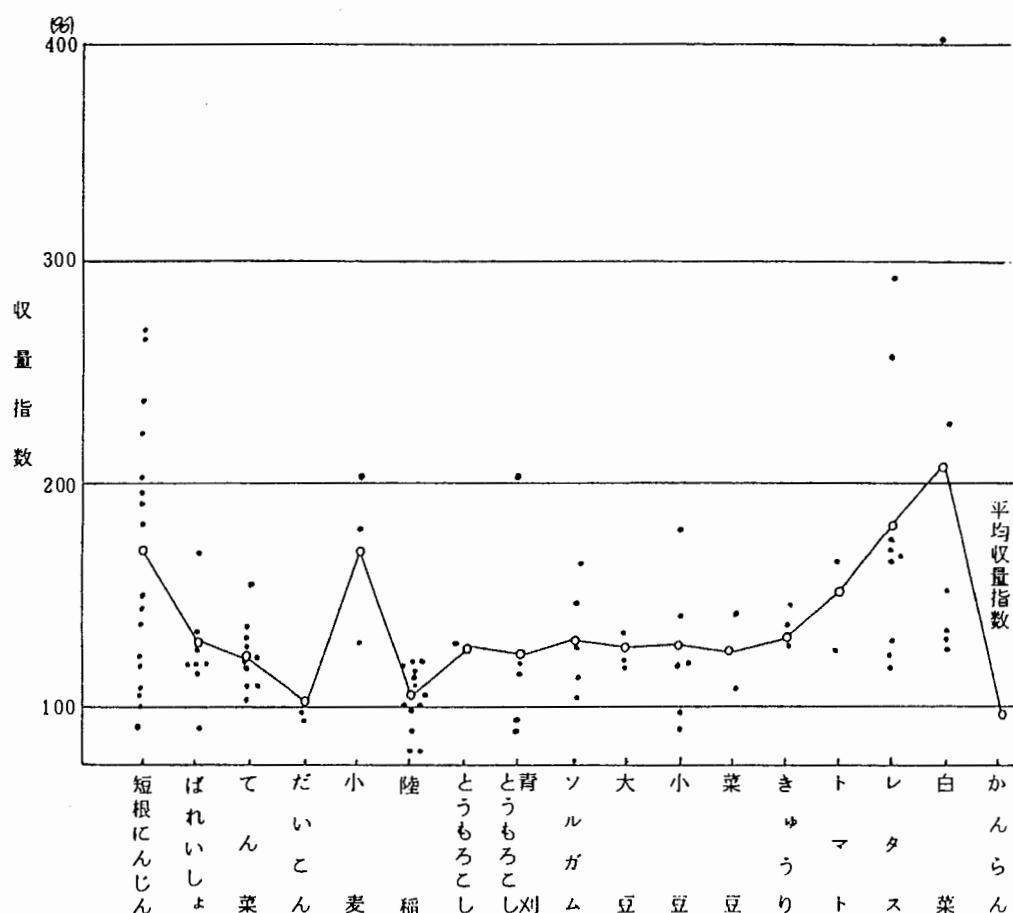


図-1 土壤改良の効果

この結果から、磷酸資材による土壤改良効果を次の3つに分類した。

(ア)改良効果の最も現われ易い作物；レタス、短根にんじん、白菜、小麦

(イ)改良効果のやや大きい作物；きゅうり、ばれいしょ、ソルガム、トマト

(ウ)改良効果の小さい作物；陸稻、大豆、小豆、  
青刈とうもろこし、菜豆、だいこん

このように、普通畠作物に比べて野菜類は概して

#### 量化 I類による解析

### 第三部分：数据处理与分析

## 数量化 I 類による解析

数量化 I 類による解析

表-29 分 散 分 析

ITEM	CATEGORY	SCORE	SCORE平均との差	RANGE
1. 土壤改良	1. 磷 吸 5 ~ 6 % 2. 磷 吸 10 ~ 12 %	157.502 147.742 } 152.662	平均 + 4.88 - 4.88	9.76
2. 改良後年数	1. 1 年 2. 2 年 3. 3 年 4. 4 ~ 7 年 5. 8 ~ 11 年	0.000 - 0.794 2.037 } - 22.895 - 46.459 }	平均 + 13.6222 + 12.8282 + 15.6592 - 9.2728 - 32.8368	48.496
3. 作目	1. 根菜類 2. 穀類 3. 豆類 4. 果菜類 5. 葉菜類	0.000 - 19.336 5.652 } 6.274 48.768 }	平均 - 8.2716 - 27.6076 - 2.6196 - 1.9976 + 40.4964	68.104
1. 土壤(火山灰)	1. 腐植質 2. 鉱質	0.000 - 30.028 }	平均 + 15.014 - 15.014	30.028

て土壤改良効果が高い。野菜類は一般に収益性が高いことを考慮すると、土壤改良実施当初に野菜を栽培することの意義が一層大きいことがうかがわれる。とくに高冷地野菜としてのレタスは、磷酸に対する感応度が極めて高く、土壤改良初年で投入資材費を償却出来る場合が多い。

次に、磷酸資材施用量、改良後年数、作目、土壤の種類を表-29のように分類して統計処理を行ない、収量指數の予測を行なった。

予測式：おののおののアイテムを平均してその平均から散布度を見た。

5~6% 157.5	1 年 0 2 年 - 0.8 3 年 + 2.0	+ 4~7年 - 22.9 8~11年 - 46.5	根菜類 0 穀類 - 19.3 豆類 + 5.7 果菜類 + 6.3 葉菜類 + 48.8	腐植質 0 鉱質 - 30.0
10~12% 147.7				

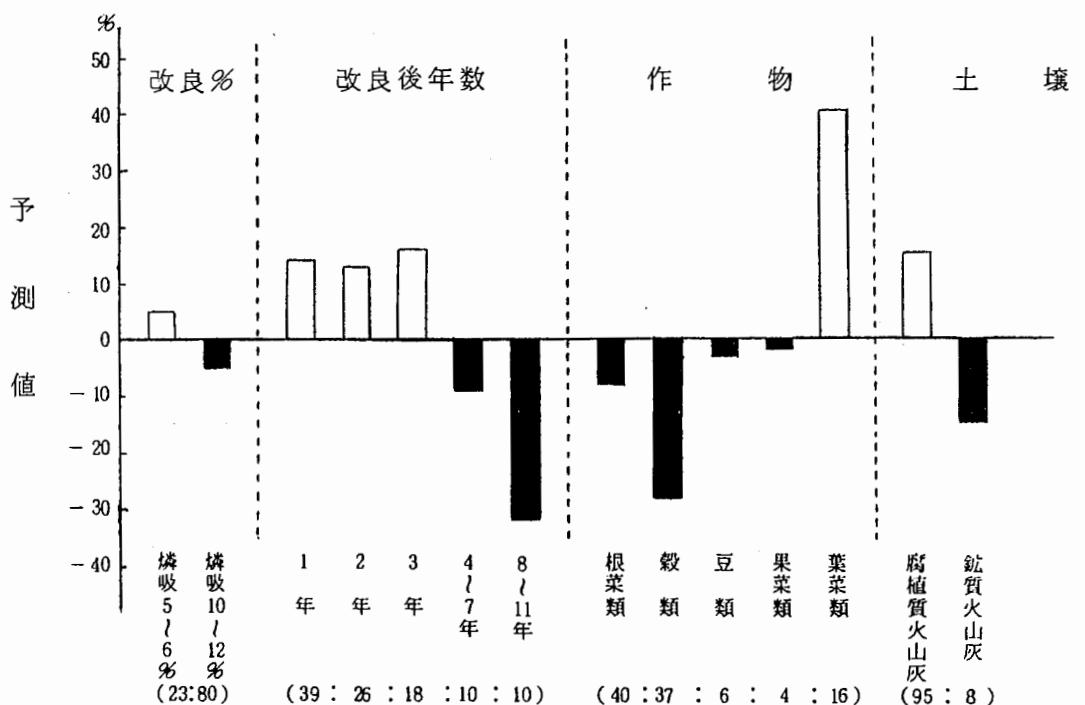


図-2 各処理と予測値

注: ( )はサンプル点数、

穀類にはとうもろこし類を含めた。

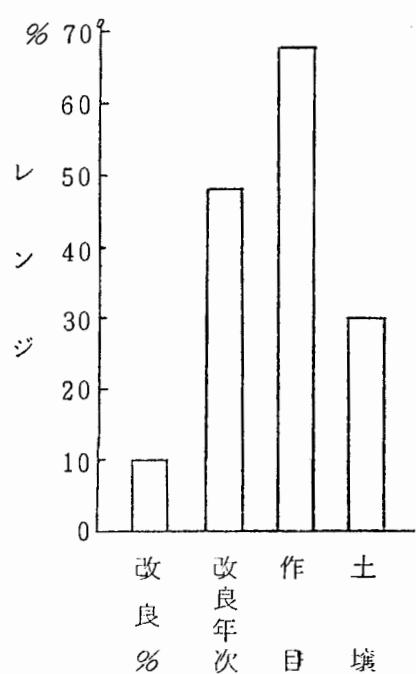


図-3 レンジ

この結果は、比較する標本の割合が各々異なり、同じ標本内で4つの要因が影響し合うケースを考えられるので、厳密な比較には使えない。しかし、ランダムな標本から要因毎の傾向を全体的に把握するには有効と見られる。

改良磷酸吸収%の比較は

$5 \sim 6 \% > 10 \sim 12 \%$ と、予想外のデータであり、さらに内容の検討を要する。土壤改良後年数は3年目で最高となっているが、これは過石と熔焼の溶解度に関係しているものと見られる。8~11年の効果が著しく低下しているが、予想式からマイナスにはなっていない。

作目別には穀類のみ予想式でマイナスになっているのは、地力窒素の放出による過繁茂と倒伏の影響が大きいと見られる。

土壤改良を行なった場合、収量指数に及ぼす影響をレンジでみると、作目 > 改良後年数 > 土壤 > 改良% の順である。

全体の相関係数の 0.468 は低く、予想式からはずれるものがあるが、収量に影響すると思われる因子を省略し過ぎているためとも見られる。

#### (エ) レタスの磷酸吸収に関する試験<sup>25)</sup>(昭51)

磷酸質土壤改良資材の施用効果は、これまでの試験成績に見られたように、野菜類、とくに葉菜

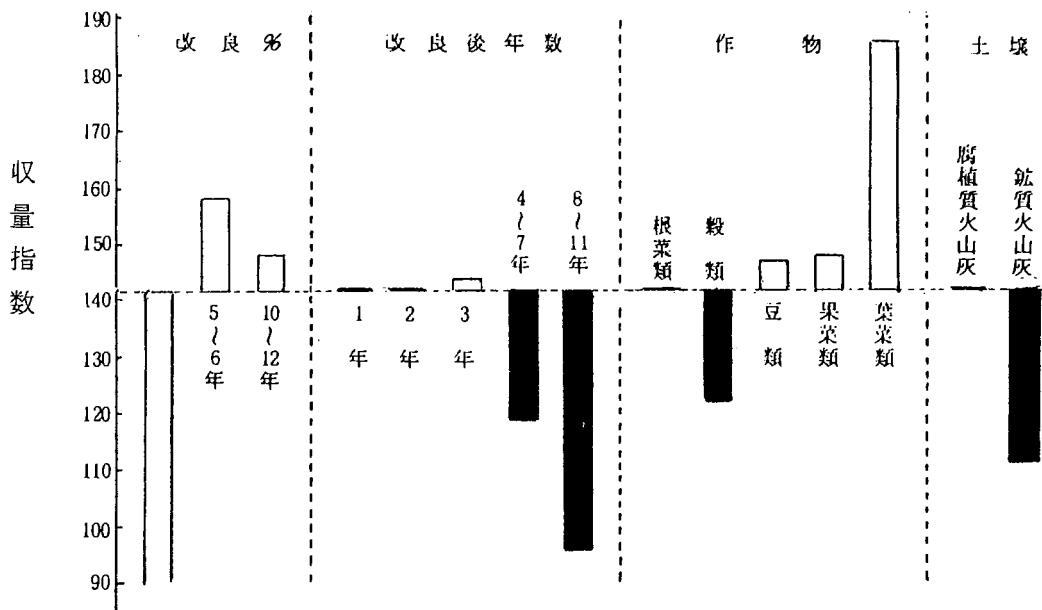


図-4 各処理と収量指數予測値

類で大きいことが知られたが、その中でも、とくにレタスで極めて大きいことが認められている。

しかもその肥効は生育極初期から現われることが観察されるので、このことを確認するために、レタスにおける施肥磷酸の吸収利用状況を調査しようとポット試験を行なった。

試験場所；岩手郡滝沢村、農試本場内、

#### ポット試験

供試土壤；岩手郡一戸町奥中山で採取した腐植に乏しい火山灰土壤（下層土）

試験規模； $1/5000a$  ワグネルポット、2連制

供試条件；未改良区及び磷酸吸収係数の10%  
相当改良区、( $P_2O_5$  3.8%を、熔  
燐・重過石比を4:1にして施用)

表-30 供試土壤の化学性

腐植 (%)	pH ( $H_2O$ )	磷酸吸収係数	有効磷酸 $P_2O_5$ (mg%)	仮比重
2.05	6.49	2,160	0.4	0.88

共通肥料；N - 0.3%，K<sub>2</sub>O - 0.3%

#### 試験結果

レタス体内の磷酸含有率及び磷酸吸収の状況を表-31～32と図-5～6に示した。

表-31 レタス体内磷酸含有率の変化

(乾物中  $P_2O_5$  %)

区名	4日	6日	10日	15日	20日	備考
未改良	2.36	2.05	1.17	0.70	0.33	日数は播種後日数
磷酸吸10%改良	2.35	2.42	2.02	2.17	1.90	発芽日は播種後3日目

表-32 レタスによる磷酸吸収量

(1,000ヶ体当mg)

区名	4日	6日	10日	15日	20日	備考
未改良	21.5	20.7	21.8	17.5	18.7	未改良は枯死
磷酸吸10%改良	21.9	27.1	40.2	71.4	166.1	

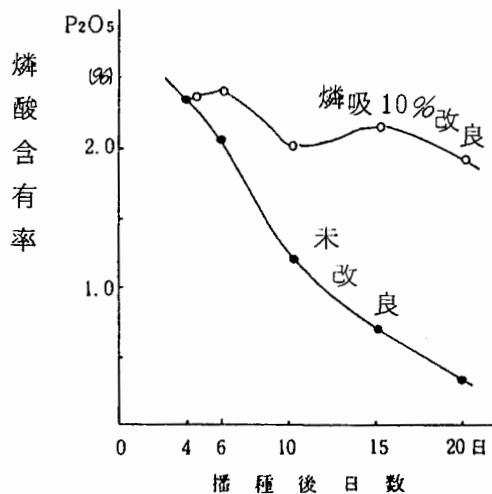


図-5. レタスの播種後日数と  
磷酸含有率(乾物)の推移

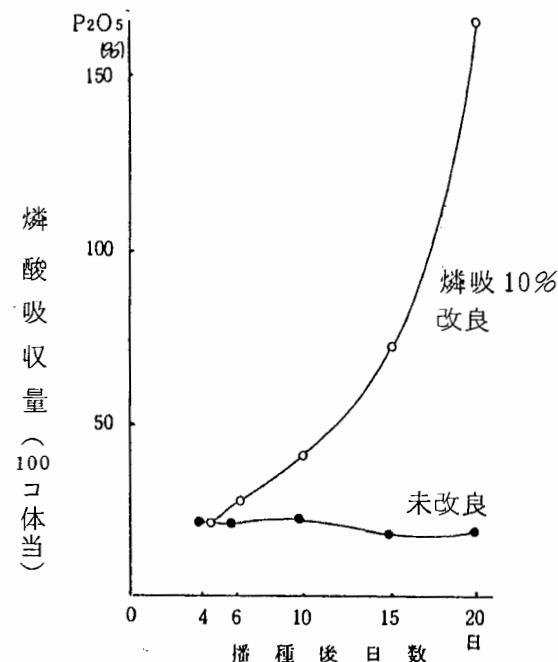


図-6. レタスの播種後日数と  
磷酸吸収量の推移

### 考 察

表-31のようにレタスの場合は、子葉の展開後、ただちに磷酸の吸収が行なわれ、施肥による差が現われる。このことは、レタスの種子が小さく、保有養分が極めて少ないとても関連していると思われるが、このように早い時期の磷酸吸収量の差異が、その後の生育にも大きな影響を与えていることがわかる。種子の大小による初期生育の違いは、同じ土壤の無磷酸区でも、例えば小麦の場合は、生育不良が認められる時期がかなり遅れることからも明らかに識別される。このように、レタスの磷酸要求が極めて早い時期から行なわれることが、逆の見方をすれば磷酸による土壤改良の効果が高い原因になっていると考えられる。

### 土壤中に有効磷酸を含まぬ場合の改良法要約

火山灰土壤地帯における新墾畠のように、土壤中に有効磷酸を殆ど含まない場合には、磷酸質土壤改良資材（熔磷・過石・重過石）の投入による土壤改良を行なうことによって磷酸肥沃度を高め、畠作物の収量を著しく高めることが出来る。この

事について山本らは、普通畠作物について検討を行ない、土壤改良の方法としては作土 10 cm相当の土量について、その土壤の磷酸吸収係数の10%相当のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を、過石と熔磷の現物で1:4になるように併用して作土全層に混合することにより、改良効果は著しく大きくなることを実証した。この研究成果をもとに、対象作物に、より収益性の高い野菜類を取り入れ、さらに現場での対応を簡単にするために、過石対熔磷比の現物で1:4の併用を、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>として1:4の併用とし、また過石に代えて重過石を用いるなど、二三の改変を加え検討を実施した。

その結果、作土 10 cmについて仮比重を勘案し、磷酸吸収係数の7.5~10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を投入することにより、野菜類においても生育を著しく良化させ得ることが明らかになった。この場合の磷酸質資材の混入比は、原則として過石対熔磷比を1:4とするが、土壤pHが高い場合は熔磷の比率を低めることとの効果のあることも知られた。県内各地において行なわれた、磷酸吸収係数の10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>施用の土壤改良試験初年目の結果 21 試験につい

て分散分析を行なった結果では、未改良区と土壤改良区、未改良区と土壤改良+堆肥区、さらに未改良区と土壤改良区+(土壤改良+堆肥区)について、いずれも1%水準で有意の差が認められた。これら試験の中でとくに肥効が高く現われたのは、短根にんじんとレタスであった。

また岩手農試圃場において昭和40年以來各種作物を供試して、作土10cmの土量について磷酸吸收係数の1.5%~12%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を過石・熔磷比1:2で施用し、試験開始初年以後は残効を長年にわたって調査した。その結果、昭和48年の第10作まで磷酸多用の効果は明らかに認められ、また、磷酸吸收係数の6%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>改良区における堆肥1t併用の効果も認められた。なお、本試験では、11作の大根で磷酸質資材の残効が消失するように見られたが、土壤分析の結果から、残効消失の原因是磷酸の欠乏にあるのではなく、石灰、苦土等塩基の欠乏で磷酸の肥効も上り難くなっていることが明らかになった。この場合の苦土欠乏に対しては硫酸苦土による補給の効果が大きいものの、本腐植質火山灰土壤においてはその肥効はほぼ単年度のみであり、苦土の溶脱が大きいことが知られた。

磷酸吸收係数の10%相当など、多量の土壤改良資材を施用する場合の資材投入法として、全量単年度施用と1/3量ずつの3カ年分割施用を比較すると全量単年度施用が勝り、また分割施用の場合も全面施用に比べ、作物の播種溝施肥が勝る傾向がうかがわれた。ただその差はあまり明瞭ではなく、分散分析の結果でも有意な差は見られなかった。しかしこの事は、供試作物の中に小豆があり、小豆に対する磷酸多投の効果が全般に低いことにも原因があると考えた。

次に磷酸質資材による土壤改良の効果を各試験から作物別に分類した結果、改良効果の最も現われ易い作物は、レタス、短根にんじん、白菜、小麦であり、次いで改良効果のやや大きい作物はきゅうり、ばれいしょ、ソルガム、トマトであり、改良効果の小さい作物は陸稻、大豆、小豆、青刈とうもろこし、菜豆、だいこんであった。このように、普通畑作物に比べて野菜類は概して土壤改良効果が高い。野菜類は一般に収益性が高いことを考慮すると、土壤改良に要する多額の資材費をな

るべく早期に償却するうえからも、土壤改良実施当初に野菜類、とくに高冷地野菜としてのレタス、あるいは短根にんじんの栽培が有利であると考えられる。

さらに、レタスが磷酸多用により著しく生育を良化される理由について検討した結果、レタスの種子の保有養分量が極めて少ないうえに、磷酸の吸収が極めて早い時期から行なわれることが認められ、これが施用磷酸の肥効を高くしているものと見られた。

## (2) 有効磷酸目標設定方式による土壤改良法

### ア. 磷酸質土壤改良資材による土壤型別

#### 有効磷酸の富化量調査

(室内実験)<sup>26) 27)</sup> (昭49~50)

土壤中に有効磷酸が殆んど含まれない場合の磷酸質資材による土壤改良は、作土10cmについて、磷酸吸收係数の10%相当量のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を仮比重を考慮して算出し、これを作土全層に混合することを基本とした。この土壤改良法を普及技術として奨励した当初は、改良の対象となる土壤はその殆んどが磷酸吸收係数が高く、かつ有効磷酸は少ない土壤であったから、磷酸質資材の所要量は磷酸吸收係数のみを測定してこれから算出していた。しかし、土壤改良の目標は、土壤中の有効磷酸含量を基準にして決定されることがより合理的と考えられるので、県内に分布する代表土壤について磷酸吸收係数を基準に、各種形態の磷酸質資材を施用して有効磷酸の富化量を調査し、各土壤の有効磷酸富化量を磷酸吸收係数の函数としてとらえる事が出来ないかを検討した。

#### 試験方法

供試土壤は、県内に分布する通常土壤改良の対象となる磷酸吸收係数2,000前後の畑土壤を主体としたが、三紀層土壤と沖積土壤も各1点供試した。(表-33~35)

土壤は風乾後2mmの篩を通して、各土壤100gに磷酸質資材(過石、重過石、熔磷)の所定量を混合し、内容150mlのスチロール管瓶につめ、各土壤の最大容水量の60%に相当する水を添加し、栓をして25°C定温器中で30、60、140日間インキュベートして有効磷酸の経時富化量を追跡した。

磷酸質資材の施用法は、土壤反応を矯正したうえで過石・熔磷比1:4で施用するのが原則であるが、土壤酸性の程度により資材の混合比を変え、あるいは過石に代えて重過石を施用することもあるので、これら資材の単用のほか、混合比を変えたうえでさらに施用量を変えて土壤に添加し、土壤中の有効磷酸の推移を検討した。なお磷酸資材の添加量はP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>として、磷酸吸収係数の2.5、10%相当量とした。(表-36~37)

#### 有効磷酸分析法(Truog法<sup>28</sup>)

2mmの篩を通過させた風乾細土1.00gを、300mlの三角フラスコにとり、これに0.002N-H<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>、(NH<sub>4</sub>)<sub>2</sub>SO<sub>4</sub>緩衝液(pH 3.0)を200ml加えて30分間振盪し、この浸出液について常法によりモリ

ブデン青の発色を行ない比色法で磷酸の定量を行なった。

なお、有効磷酸の測定法は、Truog法の他、Dyer法(1%クエン酸)、Bray法(ふっ化アンモン・塩酸法)、Egner法(乳酸法)その他、無機態、有機態の磷酸の分別定量法を含めて多くの方法が提唱されている。これらは、特定の作物との関連性が検討される場合が多い。しかし通常の場合畑では、各種の作物が輪作の一環として栽培されることが多いから、従来圃場試験に利用し、かつ現場の土壤調査においても応用し、しかも県下全域の畑土壤の分析に利用しているTruog法をもって有効磷酸の基準分析法としてその有効性の比較検討を行なうこととした。

表-33 供試土壤の理化学性

土壤名	土壤型	土性	磷酸吸収係数	pH(H <sub>2</sub> O)	腐植(%)	CEC(me)	仮比重
1. 胆沢I	腐植質火山灰土壤	CL	2,320	5.35	16.60	39.56	0.568
2. 滝沢I	"	L	2,280	6.80	11.60	23.91	0.800
3. 胆沢II	鉱質火山灰土壤	CL	2,120	4.98	1.63	19.28	1.015
4. 飯豊II	"	CL	2,080	5.25	0.90	18.39	1.009
5. 後藤野I	腐植質火山灰土壤	CL	2,060	5.22	16.81	30.66	0.711
6. 六原II	鉱質洪積層土壤	C	1,980	5.25	1.63	20.77	1.011
7. 飯豊I	腐植質火山灰土壤	CL	1,920	5.05	8.13	24.23	0.749
8. 六原I	腐植質洪積層土壤	C	1,740	4.95	7.05	22.05	0.866
9. 花泉I	三紀層土壤	CL	1,120	4.75	0.36	19.78	0.873
10. 江刺I	沖積層土壤	SL	880	5.34	1.26	11.37	1.263

表-34 供試土壤の理化学性解析

因子(No)	Mean	S.D.	C V %
1. 磷酸吸収係数	18.50	456.44	24.67
2. pH(H <sub>2</sub> O)	5.29	5.34	10.09
3. 腐植(%)	6.60	6.17	93.58
4. 塩基置換容量(me)	23.0	7.22	31.41
5. 仮比重	0.89	1.87	21.04

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-35 各因子間の相関

<i>y</i>	<i>x</i>	回帰式	<i>r</i>
No. 2	No. 1	$y = 0.00044x + 4.46729$	0.3817
No. 3	No. 1	$y = 0.00743x - 7.15563$	0.5496
No. 4	No. 1	$y = 0.01020x + 4.12989$	0.6445*
No. 5	No. 1	$y = -0.00024x + 1.33706$	-0.5959*
No. 3	No. 2	$y = 4.19795x - 15.62695$	0.3633
No. 4	No. 2	$y = 1.55633x + 14.76076$	0.1151
No. 5	No. 2	$y = -0.04240x + 1.11099$	-0.1215
No. 4	No. 3	$y = 1.01764x + 16.28657$	0.8697***
No. 5	No. 3	$y = -0.02495x + 1.05112$	-0.8258**
No. 5	No. 4	$y = -0.02395x + 1.43755$	-0.9278***

表-36 磷酸質資材添加量

(土壤 100 g 当り mg)

土 壤	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 成分量			過石单用			重過石单用			熔磷单用		
	2 %	5 %	10 %	2 %	5 %	10 %	2 %	5 %	10 %	2 %	5 %	10 %
1. 胆沢 I	46.4	116.0	232.0	273	682	1,365	136	341	682	232	580	1,160
2. 滝沢 I	45.6	114.0	228.0	268	671	1,341	134	335	671	228	570	1,140
3. 胆沢 II	42.4	106.0	212.0	249	624	1,247	125	312	624	212	530	1,060
4. 飯豊 II	41.6	104.0	208.0	245	612	1,224	122	306	612	208	520	1,040
5. 後藤野 I	41.2	103.0	206.0	242	606	1,212	121	303	606	206	515	1,030
6. 六原 II	39.6	99.0	198.0	232	582	1,164	116	291	582	198	495	990
7. 飯豊 I	38.4	96.0	192.0	226	565	1,129	113	283	565	192	480	960
8. 六原 I	34.8	87.0	174.0	205	512	1,024	102	256	512	174	435	870
9. 花泉 I	22.4	56.0	112.0	132	329	659	66	165	329	112	280	560
10. 江刺 I	17.6	44.0	88.0	104	259	518	52	129	259	88	220	440

注) 過石: 17% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>重過石: 34% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>熔磷: 20% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>

表-37 磷吸 2 %相当磷酸質資材添加量

(土壤 100 g 当り mg)

土 壤	過石 : 熔磷			重過石 : 熔磷		
	1 : 1	1 : 2	1 : 4	1 : 1	1 : 2	1 : 4
1. 胆沢 I	136	116	91	155	54	186
2. 滝沢 I	134	114	88	152	54	182
3. 胆沢 II	125	106	84	141	49	170
4. 飯豊 II	122	104	81	139	49	166
5. 後藤野 I	121	103	81	137	48	165
6. 六原 II	116	99	78	132	47	158
7. 飯豊 I	113	96	75	128	45	154
8. 六原 I	102	87	68	116	41	139
9. 花泉 I	66	56	44	75	26	90
10. 江刺 I	52	44	34	59	21	70

注) 磷吸 5 %は上表の 2.5 倍、 10 %は 5 倍量とした。

## 試験成績

① 磷酸質資材添加による有効磷酸富化量の経時変化

磷酸質資材の添加による有効磷酸の富化の経時変化を表-38~41(146~149頁)に示した。

表-38 15日目の有効磷酸富化量

(mg%)

土 壤 名	過 石 單 用	重過石 單 用	熔 麻 單 用	過石：熔麻			重過石：熔麻			
				1:1	1:2	1:4	1:1	1:2	1:4	
相 當 添 加	1. 胆沢 I	3.7	4.5	2.0	3.3	3.7	3.3	4.4	4.1	2.4
	2. 滝沢 I	3.0	4.2	2.0	4.0	2.0	2.0	1.2	2.4	1.2
	3. 胆沢 II	3.6	4.3	5.2	3.0	4.3	3.7	3.2	5.3	6.4
	4. 飯豊 II	2.0	Tr.	3.0	—	4.0	3.2	5.2	3.6	4.4
	5. 後藤野 I	3.2	5.2	1.8	4.4	4.8	2.0	2.8	1.6	1.6
	6. 六原 II	3.0	0.6	4.7	5.4	2.4	3.0	6.4	4.2	5.2
	7. 飯豊 I	6.4	6.4	5.9	5.6	0.8	5.6	2.7	4.0	2.8
	8. 六原 I	Tr.	Tr.	4.6	3.3	2.2	1.6	2.4	4.0	1.2
	9. 花泉 I	Tr.	Tr.	3.4	7.4	Tr.	2.4	Tr.	Tr.	0.6
	10. 江刺 I	1.8	2.8	2.4	2.0	3.4	3.0	2.3	4.6	3.7
平 均		2.7	2.8	3.5	4.3	2.8	3.0	3.1	3.1	3.0
相 當 添 加	1. 胆沢 I	10.5	13.6	5.9	7.6	10.3	5.6	11.1	10.1	8.8
	2. 滝沢 I	11.8	7.8	6.0	6.6	10.0	8.4	6.8	5.2	6.8
	3. 胆沢 II	10.6	9.4	8.4	11.1	11.2	10.9	10.5	11.1	8.5
	4. 飯豊 II	7.6	3.6	5.6	6.0	8.8	7.6	10.0	6.0	6.4
	5. 後藤野 I	12.8	9.6	9.6	10.4	11.2	10.8	11.2	—	9.6
	6. 六原 II	6.0	12.4	12.4	9.6	11.6	8.0	10.4	10.0	8.8
	7. 飯豊 I	9.6	13.9	5.9	12.0	12.0	10.4	6.8	10.8	10.0
	8. 六原 I	8.0	10.0	6.8	8.2	10.6	8.6	3.8	8.0	11.8
	9. 花泉 I	7.0	15.0	7.0	5.8	8.8	4.6	10.2	5.4	2.2
	10. 江刺 I	3.4	6.8	5.6	6.2	6.2	—	5.5	6.6	6.4
平 均		8.7	10.2	7.3	8.4	10.1	8.3	8.6	8.6	7.9
相 當 添 加	1. 胆沢 I	24.5	22.9	15.7	23.2	15.5	20.2	17.3	15.1	16.7
	2. 滝沢 I	28.8	24.6	15.0	23.2	19.2	16.0	15.2	18.8	14.8
	3. 胆沢 II	18.8	20.9	24.2	24.2	25.5	22.5	19.9	21.1	29.9
	4. 飯豊 II	21.2	25.2	33.2	14.8	24.8	18.8	15.6	13.2	18.4
	5. 後藤野 I	21.2	24.0	14.4	23.6	28.4	18.0	25.2	29.0	28.8
	6. 六原 II	15.8	22.2	19.6	22.0	16.4	19.4	15.0	27.2	26.4
	7. 飯豊 I	21.2	14.8	14.8	20.4	16.8	16.4	27.6	22.4	20.4
	8. 六原 I	35.2	25.0	22.0	24.0	14.8	23.8	19.0	17.0	31.0
	9. 花泉 I	28.2	23.0	17.7	—	27.4	25.0	19.0	20.6	15.8
	10. 江刺 I	13.0	12.0	15.2	14.6	14.4	12.4	10.8	13.1	12.4
平 均		22.8	21.5	19.2	21.1	20.3	19.2	18.5	19.8	21.5

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-39 30日目の有効磷酸富化量

(mg%)

土 壤 名	過 石 单 用	重過石 单 用	熔 燐 单 用	過石：熔燐			重過石：熔燐			
				1:1	1:2	1:4	1:1	1:2	1:4	
2 % 相当 添加	1. 胆沢 I	2.9	3.7	3.0	2.4	4.6	3.0	2.3	3.4	2.5
	2. 滝沢 I	2.8	2.4	3.2	3.2	6.8	3.6	2.4	1.6	3.6
	3. 胆沢 II	0.3	1.1	Tr.	Tr.	0.1	0.3	Tr.	0.7	0.7
	4. 飯豊 II	Tr.	Tr.	0.8	0.8	-	Tr.	0.8	1.2	2.8
	5. 後藤野 I	4.6	6.4	2.0	5.6	3.4	4.0	3.4	8.8	6.8
	6. 六原 II	3.7	1.4	3.0	2.8	3.4	3.4	2.3	2.3	3.2
	7. 飯豊 I	3.6	6.8	3.2	4.0	3.2	3.4	4.0	4.4	2.8
	8. 六原 I	2.4	4.4	2.4	2.0	3.6	4.0	5.6	3.2	4.4
	9. 花泉 I	2.6	2.6	4.0	2.2	2.6	3.0	3.4	2.6	2.6
	10. 江刺 I	0.8	1.2	1.6	1.2	4.2	1.8	2.0	1.8	1.2
平 均		2.4	3.0	2.3	2.4	3.5	2.7	2.6	3.0	3.1
5 % 相当 添加	1. 胆沢 I	8.3	10.8	6.7	7.6	9.3	9.1	9.8	9.3	8.0
	2. 滝沢 I	9.6	6.4	7.6	8.0	9.2	7.6	6.8	6.0	9.2
	3. 胆沢 II	2.5	5.5	4.1	6.9	9.0	6.1	6.5	7.5	3.2
	4. 飯豊 II	8.0	5.0	5.2	7.6	6.8	7.6	6.4	6.8	5.8
	5. 後藤野 I	11.2	7.4	9.6	9.6	8.8	10.0	7.2	10.0	10.4
	6. 六原 II	18.3	3.8	13.5	10.7	12.4	6.5	11.8	10.4	8.7
	7. 飯豊 I	10.0	10.5	9.7	7.4	9.0	6.6	8.6	11.6	8.6
	8. 六原 I	7.2	9.6	10.4	13.6	9.6	11.2	12.4	12.0	11.2
	9. 花泉 I	10.2	7.8	6.0	6.8	6.6	8.0	8.6	5.8	6.6
	10. 江刺 I	4.0	8.0	2.4	4.2	4.2	12.0	5.6	4.4	5.6
平 均		8.9	7.5	7.5	8.2	8.5	8.5	8.4	8.4	7.7
10 % 相当 添加	1. 胆沢 I	20.1	20.0	19.5	19.8	21.9	16.1	17.6	20.8	17.0
	2. 滝沢 I	22.8	19.6	16.0	20.4	16.4	18.0	18.4	17.6	16.1
	3. 胆沢 II	19.9	11.7	16.3	19.9	17.5	24.1	17.7	16.5	16.0
	4. 飯豊 II	12.6	18.8	18.4	24.4	22.6	19.4	16.6	22.2	18.4
	5. 後藤野 I	15.6	17.6	22.0	18.4	20.4	19.6	20.8	24.0	27.4
	6. 六原 II	17.0	(17.1)	16.4	22.7	18.3	21.2	23.8	-	28.3
	7. 飯豊 I	19.0	22.8	18.4	18.3	19.0	23.8	27.2	24.0	15.6
	8. 六原 I	18.4	18.0	20.4	16.4	22.8	26.0	13.6	20.4	24.4
	9. 花泉 I	20.2	34.2	15.8	34.2	21.4	21.4	16.8	17.8	13.2
	10. 江刺 I	18.8	19.2	15.0	10.6	11.4	10.4	12.0	8.0	11.6
平 均		18.1	19.9	17.8	20.5	19.2	20.0	18.5	19.0	18.8

表-40 60日目の有効磷酸富化量

(mg%)

土 壤 名	過 石 单 用	重過石 单 用	熔 燐 单 用	過石：熔燐			重過石：熔燐			
				1:1	1:2	1:4	1:1	1:2	1:4	
2 % 相当添加	1. 胆沢 I	2.7	4.7	3.5	2.3	4.3	1.9	2.7	3.1	2.7
	2. 滝沢 I	1.6	2.0	2.0	2.8	2.9	2.8	2.4	2.6	1.6
	3. 胆沢 II	1.9	2.7	1.9	1.5	2.3	1.9	3.1	3.9	3.5
	4. 飯豊 II	0.8	1.6	1.6	Tr.	1.2	5.6	2.8	2.0	2.4
	5. 後藤野 I	4.0	4.8	4.0	4.0	2.8	4.8	4.8	5.2	3.2
	6. 六原 II	4.0	3.2	2.8	2.4	2.4	2.8	2.0	1.6	3.2
	7. 飯豊 I	2.4	2.4	2.8	3.6	3.2	3.6	2.4	3.6	4.0
	8. 六原 I	1.6	2.8	1.2	2.8	3.2	2.0	3.2	3.2	2.8
	9. 花泉 I	1.8	1.8	3.4	2.2	3.4	2.2	3.0	3.0	2.6
	10. 江刺 I	4.4	4.4	4.8	5.6	6.8	5.2	4.8	3.2	3.6
平 均		2.5	3.0	2.8	2.7	3.3	3.3	3.1	3.1	3.0
5 % 相当添加	1. 胆沢 I	7.9	7.9	5.1	7.5	9.1	8.3	9.1	6.7	5.1
	2. 滝沢 I	6.8	4.0	5.6	6.0	6.2	5.3	5.2	3.6	4.5
	3. 胆沢 II	5.5	7.1	7.5	6.7	9.9	7.9	9.1	7.5	10.7
	4. 飯豊 II	6.0	6.0	5.2	6.8	8.0	9.2	8.4	6.0	6.8
	5. 後藤野 I	9.6	11.6	9.0	8.8	12.0	10.8	12.0	12.0	8.0
	6. 六原 II	10.8	3.6	8.4	9.2	7.6	7.6	6.8	8.4	6.0
	7. 飯豊 I	7.2	8.8	8.8	8.4	9.6	11.6	9.6	8.4	12.0
	8. 六原 I	7.2	7.0	8.8	7.6	6.8	8.0	9.2	9.6	8.4
	9. 花泉 I	9.0	8.2	7.0	9.0	8.6	6.6	6.6	8.2	7.0
	10. 江刺 I	10.8	10.0	8.0	8.0	8.4	10.0	4.8	5.6	4.8
平 均		8.1	7.4	7.3	7.6	8.6	8.5	8.1	7.6	7.3
10 % 相当添加	1. 胆沢 I	21.1	14.7	16.7	18.7	18.3	15.5	17.0	15.9	19.5
	2. 滝沢 I	14.4	15.2	13.6	11.8	12.0	12.5	12.0	16.8	12.0
	3. 胆沢 II	10.7	14.3	15.5	19.9	19.1	16.3	23.5	23.1	20.7
	4. 飯豊 II	13.2	18.8	17.6	23.6	24.8	16.0	17.0	21.2	18.0
	5. 後藤野 I	18.4	16.4	17.6	22.0	16.8	16.6	24.4	23.2	22.8
	6. 六原 II	20.0	16.0	22.8	16.8	12.8	19.6	22.4	25.6	15.2
	7. 飯豊 I	15.2	15.2	18.0	17.6	22.0	24.8	20.0	22.0	16.8
	8. 六原 I	17.6	12.4	22.4	16.8	14.8	17.2	11.2	12.0	14.4
	9. 花泉 I	24.2	32.2	18.6	28.6	-	18.0	19.4	20.2	14.6
	10. 江刺 I	21.2	20.8	15.6	11.6	12.8	14.0	11.6	12.0	10.8
平 均		17.6	17.6	17.8	18.7	17.0	17.1	17.9	19.2	16.5

表 - 41 140 日日の有効磷酸富化量

(mg : %)

土 壤 名	過 石 单 用	重過石 单 用	熔 磷 单 用	過石 : 熔磷			重過石 : 熔磷			
				1 : 1	1 : 2	1 : 4	1 : 1	1 : 2	1 : 4	
2 % 相当添加	1. 胆沢 I	1.5	2.8	3.3	2.5	1.7	2.1	1.3	2.3	1.7
	2. 滝沢 I	3.6	4.8	5.2	8.4	4.4	6.4	3.6	4.0	4.0
	3. 胆沢 II	1.1	1.7	3.2	3.2	2.1	4.1	3.4	6.1	2.3
	4. 飯豊 II	1.6	3.2	2.8	4.0	3.6	3.6	4.4	2.8	2.8
	5. 後藤野 I	1.2	2.8	2.4	3.2	4.0	3.2	2.0	2.0	0.8
	6. 六原 II	3.5	2.5	1.2	4.0	2.0	4.0	2.4	2.0	2.0
	7. 飯豊 I	2.4	2.8	5.6	2.4	1.2	3.6	2.0	3.2	2.0
	8. 六原 I	1.2	2.8	1.6	2.0	0.4	1.6	1.2	1.6	1.2
	9. 花泉 I	1.4	0.6	2.2	2.2	1.4	2.2	1.4	3.4	1.8
	10. 江刺 I	1.6	0.8	0.4	2.0	1.2	Tr.	2.0	6.8	2.0
平 均		1.9	2.5	2.8	3.4	2.2	3.1	2.4	2.8	2.1
5 % 相当添加	1. 胆沢 I	4.7	4.1	6.1	5.5	6.5	7.1	5.5	7.9	5.1
	2. 滝沢 I	7.2	6.0	8.8	8.8	6.0	8.8	7.6	8.8	8.4
	3. 胆沢 II	4.4	5.5	9.1	9.3	9.1	9.2	9.5	7.7	11.0
	4. 飯豊 II	6.0	4.8	5.2	6.0	6.8	12.4	8.8	8.8	6.8
	5. 後藤野 I	8.0	6.4	8.4	5.6	6.4	8.8	2.4	7.2	4.8
	6. 六原 II	9.6	1.2	14.0	8.0	9.6	11.2	9.6	7.6	7.2
	7. 飯豊 I	6.0	8.4	9.6	8.0	9.2	13.6	7.2	9.2	8.8
	8. 六原 I	3.0	4.0	4.8	6.4	8.0	6.4	4.8	6.8	6.4
	9. 花泉 I	5.8	6.6	6.2	6.6	6.6	7.0	6.6	7.4	9.8
	10. 江刺 I	3.6	3.4	3.6	3.6	4.4	11.6	4.0	4.0	4.8
平 均		5.8	5.1	7.6	6.8	7.3	9.6	6.6	7.5	7.3
10 % 相当添加	1. 胆沢 I	11.0	12.3	17.7	11.9	16.5	18.2	19.2	12.7	11.3
	2. 滝沢 I	13.6	13.2	18.0	17.6	21.6	16.8	14.4	18.0	16.8
	3. 胆沢 II	10.3	11.5	18.7	21.9	25.1	19.9	19.9	23.9	20.7
	4. 飯豊 II	10.8	17.2	16.8	24.8	17.6	19.6	17.6	19.2	24.8
	5. 後藤野 I	12.4	11.6	18.4	17.2	14.8	20.0	18.8	19.6	23.2
	6. 六原 II	17.0	(12.4)	15.2	17.2	23.6	23.2	25.2	19.2	14.0
	7. 飯豊 I	14.8	13.2	15.6	16.0	19.2	24.4	20.4	19.6	21.2
	8. 六原 I	9.6	10.0	15.6	10.4	10.4	11.2	10.4	11.2	15.6
	9. 花泉 I	19.4	28.2	18.0	25.4	25.4	17.8	16.2	11.4	17.4
	10. 江刺 I	8.4	10.1	13.6	9.6	9.2	19.6	10.0	10.6	12.8
平 均		12.7	14.0	16.8	17.2	18.3	19.1	17.2	16.6	17.8

表-42 燃吸 10%相当磷酸質資材添加に伴う有効磷酸の富化量解析

処理 資材	30日			60日			140日		
	Mean	S.D	C V%	Mean	S.D	C V%	Mean	S.D	C V%
過石	18.44	2.677	14.52	17.60	3.977	22.60	12.66	3.068	24.24
重過石	19.92	5.466	27.44	17.60	5.354	30.42	13.97	5.117	36.63
熔磷	17.82	2.175	12.20	17.84	2.755	15.44	16.76	1.598	9.53
過石：熔磷 1：1	20.51	5.768	28.12	18.74	4.907	26.18	17.20	5.299	30.81
1：2	19.17	3.324	17.34	17.04	3.963	23.26	18.34	5.455	29.75
1：4	20.00	4.272	21.36	17.05	3.190	18.71	19.07	3.421	17.94
重過石：熔磷 1：1	18.45	4.281	23.20	17.85	4.706	26.37	17.21	4.418	25.67
1：2	17.13	7.226	42.18	19.20	4.531	23.60	15.94	4.357	27.33
1：4	18.80	5.546	29.50	16.48	3.621	21.97	17.78	4.311	24.24

表-43 磷酸質資材添加量の差による有効磷酸富化量解析（60日後）

処理 資材	2%相当添加			5%相当添加			10%相当添加		
	Mean	S.D	C V%	Mean	S.D	C V%	Mean	S.D	C V%
過石	2.52	1.163	46.13	8.08	1.793	22.19	17.60	3.977	22.60
重過石	3.04	1.140	37.51	7.42	2.355	31.74	17.60	5.354	30.42
熔磷	2.80	1.084	38.70	7.37	1.417	19.23	17.84	2.755	15.44
過石：熔磷 1：1	2.73	1.401	51.31	7.80	1.019	13.06	18.74	4.907	26.18
1：2	3.25	1.410	43.39	8.62	1.578	18.30	17.04	3.963	23.26
1：4	3.28	1.362	41.53	8.53	1.815	21.28	17.05	3.190	18.71
重過石：熔磷 1：1	3.12	9.075	29.09	8.08	2.098	25.96	17.85	4.706	26.37
1：2	3.14	0.950	30.25	7.60	2.200	28.94	19.20	4.531	23.60
1：4	2.96	6.545	22.11	7.33	2.373	32.37	16.48	3.621	21.97

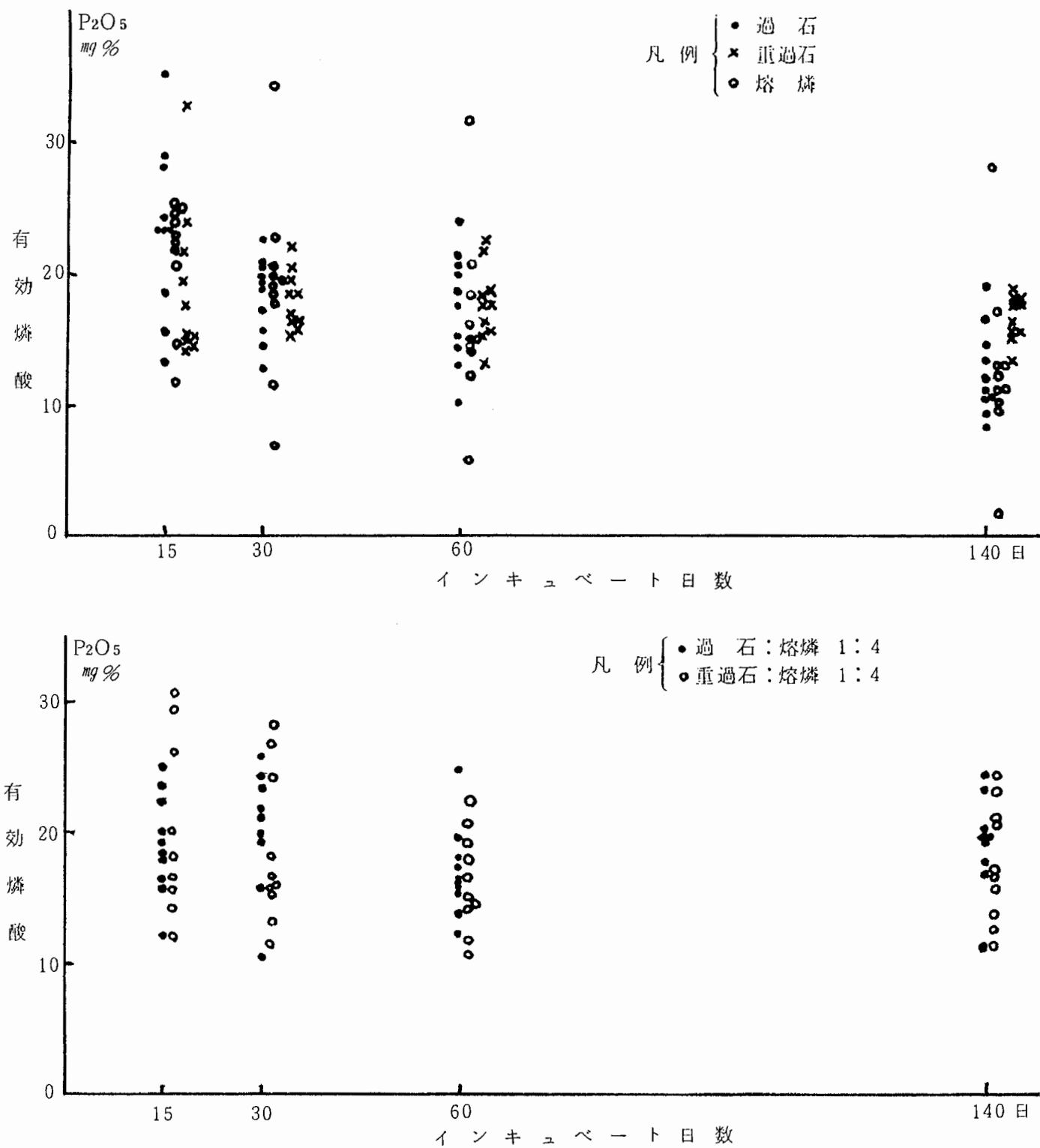


図-7 磷酸資材の種類と有効磷酸の経時変化 (磷吸の10%  $P_2O_5$ )

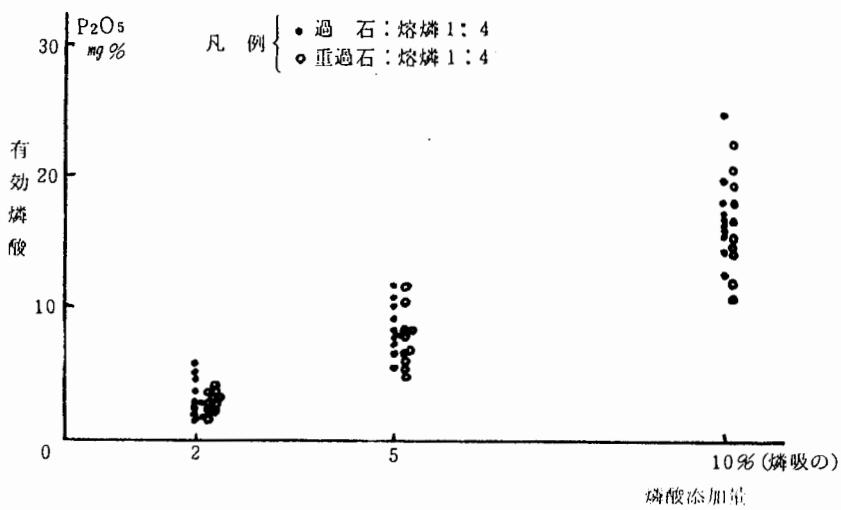
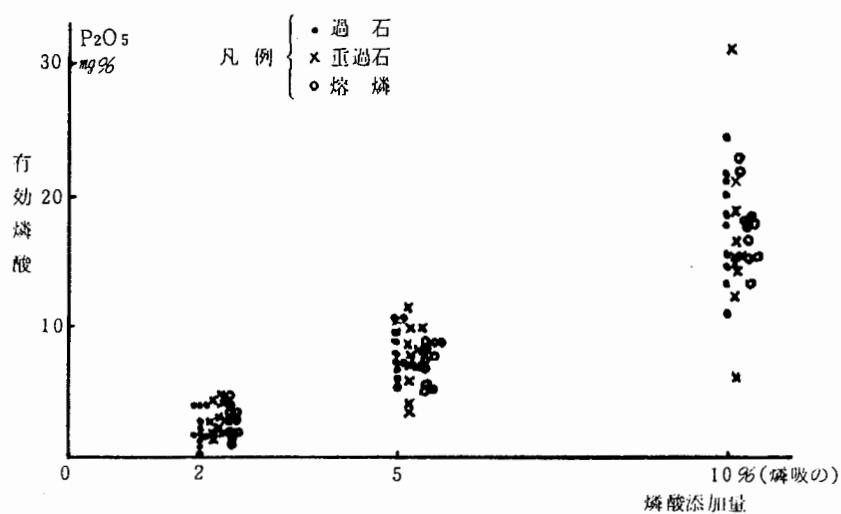


図-8 各磷酸資材の添加による有効磷酸富化量（60日）

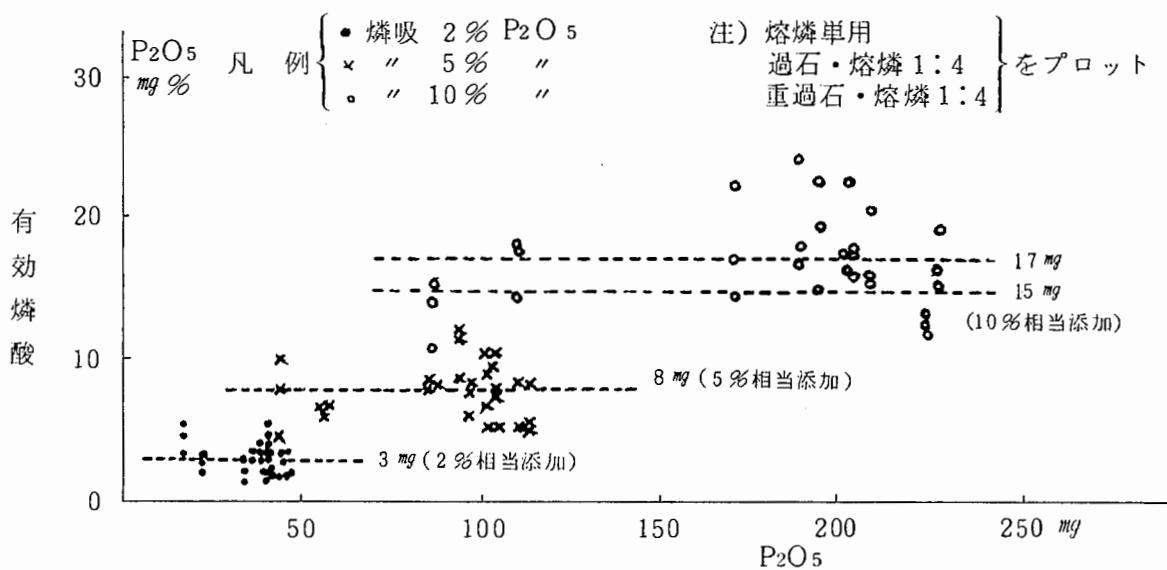


図-9 磷酸添加による有効磷酸の富化(60日)

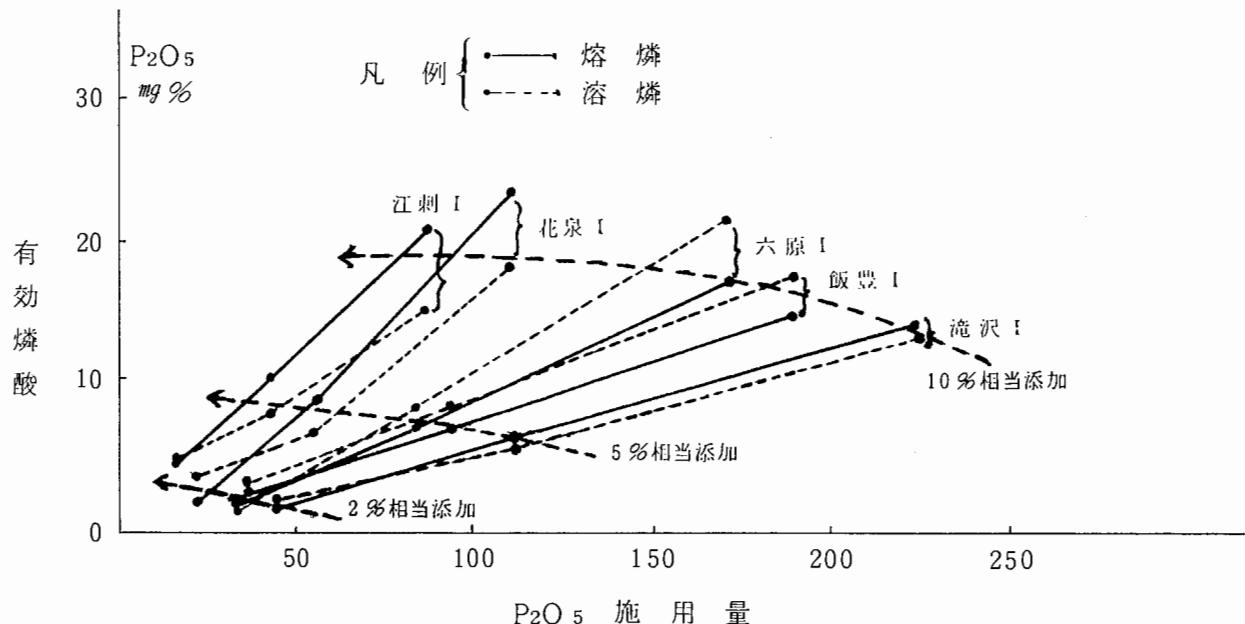


図-10 土壤の種類と過石、熔磷による有効磷酸富化量の差異（60日）

各磷酸質資材の添加による土壤中の有効磷酸の富化量を見ると、ほぼ磷酸の施用量に比例して増加するが、副成分の影響のためか、多量区(10%)の富化比率がわずかに高い。また添加量が多い程土壤間の差は大きくなる傾向が見られる。(図-8)。資材添加後60日までは、資材の種類によって有効磷酸富化量に差が見られ、中性火山灰土壤(滝沢I)、三紀層土壤(花泉I)、沖積層土壤(江刺I)では過石、重過石の富化量が多く、強酸性火山灰土壤(飯豊I)や洪積層土壤(六原I)では、熔磷の富化量が多い傾向である。(図-10)。

しかし、インキュベートが140日になると、何れの土壤でもほぼ熔磷の富化量が多くなる。一般に土壤間の有効磷酸の富化量の差は、過石と重過石では大きく熔磷では小さい傾向である(表-42～43、図-7)。

また、土壤別の有効磷酸の富化量は、腐植質火山灰土壤、腐植質洪積層土壤、沖積層土壤では、資材の種類、混合割合による富化量の変動幅が小さく、鉱質火山灰土壤(胆沢II、飯豊II)、鉱質洪積層土壤(胆沢II、飯豊II)、三紀層土壤(花泉I)では、その幅が大きい傾向が見られる(表-42～53)。

以上のように、磷酸質資材の添加により種々の要因を伴った有効磷酸富化が行なわれるが、作物

の生育期間を勘案し、添加後60日の富化量を目安とすれば、磷酸吸收係数を基準にした熔磷主体の磷酸添加による有効磷酸富化量は、各土壤ともかなり近い線に集まり、その平均値は、熔磷単用の場合、磷酸吸收係数の2%相当の磷酸添加で約3mg%、5%で約7mg%、10%で約18mg%となる。また熔磷4に対し過石又は重過石を1に混合した場合は、同様に2%で約3mg%、5%で約8mg%、10%で約17mg%となる(図-9)。

以上の結果から土壤改良基準としての磷酸施用量は、磷酸吸收係数の5%施用8mg%の富化量を中心とすれば、各土壤とも磷酸吸收係数の1%の磷酸(熔磷主体)により、有効磷酸は1.6mg%内外の増加を見込むことが出来るとみてよく、これを土壤改良の目標値の算定に使用できると考えた。

## ②磷酸添加による土壤の磷酸吸收係数の変化

(インキュベート140日後の土壤分析値)

①のインキュベート試験を行なった各土壤について、有効磷酸の富化が行なわれるとともに磷酸吸收係数の低下が行なわれることを予想し、これを調査した結果が表-44及び45である。なお磷酸吸收係数の測定法は横井による正磷酸法<sup>29)</sup>とした。

表-44 磷酸資材添加による磷酸吸収係数の変化

土壤名	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 無添加	過石			重過石			熔磷		
		2%	5%	10%	2%	5%	10%	2%	5%	10%
1. 胆沢 I	2,225	2,175	2,146	2,030	2,212	2,194	2,117	2,250	2,122	2,010
2. 滝沢 I	2,230	2,220	2,160	2,080	2,220	2,180	2,100	2,180	2,040	1,960
3. 胆沢 II	2,132	2,049	1,970	1,885	2,059	2,010	1,960	2,069	2,000	1,910
4. 飯豊 II	2,645	1,637	1,600	1,453	1,600	1,567	1,508	1,616	1,526	1,408
5. 後藤野 I	1,660	1,648	1,600	1,464	1,637	1,573	1,508	1,573	1,546	1,453
6. 六原 II	1,660	1,580	1,460	1,300	1,600	1,580	1,520	1,640	1,540	1,440
7. 飯豊 I	1,529	1,475	1,315	1,176	1,436	1,351	1,247	1,408	1,368	1,345
8. 六原 I	1,360	1,360	1,300	1,220	1,320	1,300	1,240	1,360	1,300	1,220
9. 花泉 I	600	584	529	443	598	542	514	578	542	431
10. 江刺 I	1,180	1,120	1,060	1,040	1,120	1,100	1,060	1,120	1,080	1,020

注) 表中の 2%、5%、10% は磷酸吸収係数の 2%、5%、10%相当の P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> を  
それぞれの磷酸資材で施用したこと示す。

表-45 磷酸資材添加による磷酸吸収係数の低下量

土壤名	過石			重過石			熔磷		
	2%	5%	10%	2%	5%	10%	2%	5%	10%
1. 胆沢 I	56	85	201	43	61	137	5	138	245
2. 滝沢 I	10	70	150	10	50	130	50	190	270
3. 胆沢 II	83	162	247	78	122	172	63	132	222
4. 飯豊 II	8	45	192	45	78	137	29	119	237
5. 後藤野 I	12	60	196	23	87	152	87	114	207
6. 六原 II	80	200	360	60	80	140	20	120	220
7. 飯豊 I	54	214	356	93	127	282	121	161	184
8. 六原 I	0	60	140	40	60	120	0	60	140
9. 花泉 I	16	71	157	2	58	86	22	58	169
10. 江刺 I	60	120	140	60	80	120	60	100	160

注) 表中 2%、5%、10% は表-44 注に同じ。

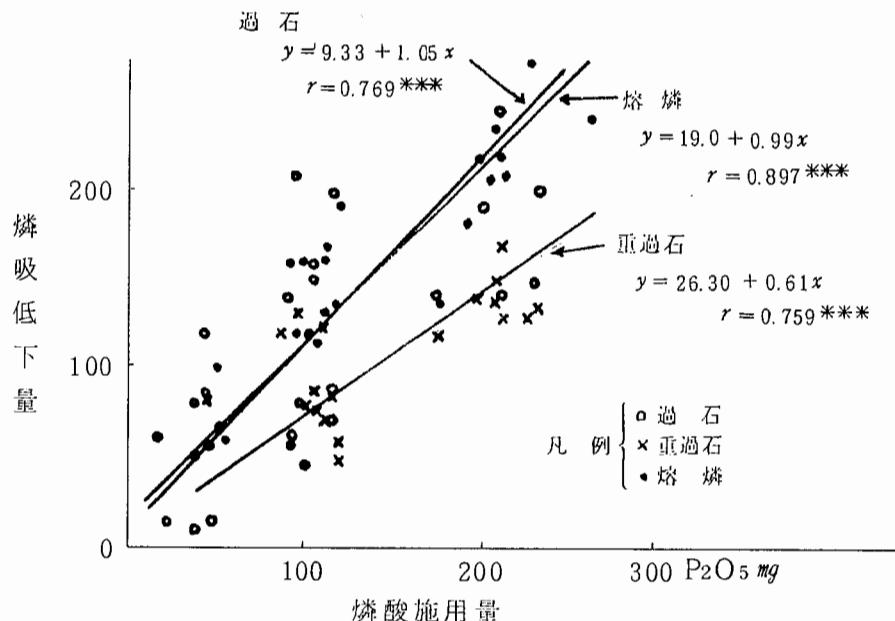


図-11 磷酸質資材添加に伴う磷酸吸收の低下

各磷酸資材による土壤の磷酸吸收の低下程度をみると、熔磷と過石は磷酸投入量とほぼ1:1に対応して低下するのに対して、重過石では低下程度は明らかに低い。この理由については明らかでないが、土壤改良資材としては重要な性質の違いになるものと考えられる。

#### 磷酸質土壤改良資材による土壤型別有効磷酸の富化量調査考察

磷酸欠乏土壤改良の第一段階として、有効磷酸を殆ど含まない土壤では、作土10cm相当の土量について、磷酸吸收係数の10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>が効果的であることが知られたが、引続き、磷酸吸收係数の10%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>施用とは、有効磷酸の富化量から見れば如何なる意味を持つかを検討しようとした。

逆に言えば、土壤改良の方法としては、磷酸吸收係数から算定するよりも、有効磷酸量から算定する方法がより合理的と考えられたからである。

磷酸吸收係数が880から2,320にわたる性格の異なる土壤10点を供試して、各土壤の磷酸吸收係数の2%、5%、10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を、過石、重過石、熔磷それぞれの単用又は過石と熔磷及び重過石と熔磷の併用として畑状態(最大容水量の60%水分)

にして25℃でインキュベートし、30日、60日、140日のそれぞれの有効磷酸の富化量を調査した。

その結果、各資材とも、副成分による影響のためか施用量が多くなる程有効磷酸富化比率がわずかに高まること、添加量が多い程土壤間の差が大きくなること、また土壤の種類により各資材による有効磷酸富化量に差はあるが、140日では熔磷の有効磷酸富化量が最も多いこと、さらに土壤別には腐植質の火山灰や腐植質の洪積層土壤に比べ、鉱質の火山灰や洪積層土壤及び三紀層土壤では資材間の富化量の変動幅が大きい傾向が見られた。鉱質土壤で資材間の差が大きくなるのは、副成分によるpHの変動の差が影響しているものと見られる。

以上のように磷酸質資材の添加による有効磷酸の富化は複雑に行なわれるが、施肥後日数を60日を基準にして見れば、磷酸吸收係数を基準にした熔磷主体の磷酸添加による土壤の有効磷酸の富化量は、各土壤ともかなり近い線に集まり、その平均値は熔磷単用では磷酸吸收係数の2%相当の磷酸添加で約3mg%、5%で約7mg%、10%で約18mg%となる。また熔磷4に対して過石又は重過石を1に混合した場合は、同様に2%で約3mg%、5%

%で約8mg%、10%で約17mg%となる。

この結果から土壤改良基準としての磷酸施用量は、磷酸吸収係数の10%施用の範囲内では1%相当のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の施用で1.5～1.7mg%、平均で1.6mg%内外の有効磷酸の増加を見込めるものとし、これを土壤改良の目標値の算定基準値とした。

なお、試験成績に見られるように、資材の種類、あるいは土壤による差は認められるが、現場対応技術としては利用できると考えた。

また、熔磷及び過石の施用により、ほぼP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>施用量に対応して磷酸吸収係数は低下したが、重過石では低下程度は低かった。これは副成分による影響とも見られるが、この理由については明らかに出来なかった。

## (参考)

## 磷酸質土壤改良資材所要量算定法

磷酸質資材による土壤改良の具体的な実施方法としては、例えば農家が農業改良普及所の土壤診断を受けて、簡単に普及利用されるものであることが望ましい。その意味ではこれまで検討した結果は、土壤分析の方法としても困難な操作は伴っていないし、また有効磷酸の指標としてTruog法による有効磷酸が、作物との関連において、なお検討を要するという評価があるにしても、岩手県内における数多くの試験について検討した結果からは十分に利用できる方法と考え、以上の成果を現場むけの簡単な表にとりまとめた。

表-46 磷酸投入量基準

(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>kg/10a)

不足有効磷酸 磷吸	mg 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
2,600	16	33	49	65	81	98	114	130	146	163
2,500	16	31	47	63	78	94	109	125	141	156
2,400	15	30	45	60	75	90	105	120	135	150
2,300	14	29	43	58	72	86	101	115	129	144
2,200	14	28	41	55	69	83	96	110	124	138
2,100	13	26	39	53	66	79	92	105	118	131
2,000	13	25	38	50	63	75	88	100	113	125
1,900	12	24	36	48	59	71	83	95	107	119
1,800	11	23	34	45	56	68	79	90	101	113
1,700	11	21	32	43	53	64	74	85	96	106
1,600	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
1,500	9	19	28	38	47	56	66	75	84	94

注) 作土 10 cm、仮比重 1.0 の場合の基準値

不足有効磷酸；富化目標有効磷酸

表-47 磷酸資材の現物換算値

混合比 資材の磷酸 成分	磷酸成分 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> ) 1:4 混合			現物 1:4 混合		
	過石 17 % 熔磷 25 %	過石 17 % 熔磷 20 %	重過 34 % 熔磷 25 %	過石 17 % 熔磷 25 %	過石 17 % 熔磷 20 %	重過 34 % 熔磷 25 %
過 石	1. 18 A	1. 18 A	-	0. 85 A	1. 03 A	-
重 過 石	-	-	0. 59 A	-	-	0. 75 A
熔 磷	3. 20 A	4. 00 A	3. 20 A	3. 42 A	4. 12 A	3. 00 A

A = 磷酸投入量 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)

注) 磷酸成分で 1:4 混合は岩手農試方式

現物で 1:4 混合は山本方式

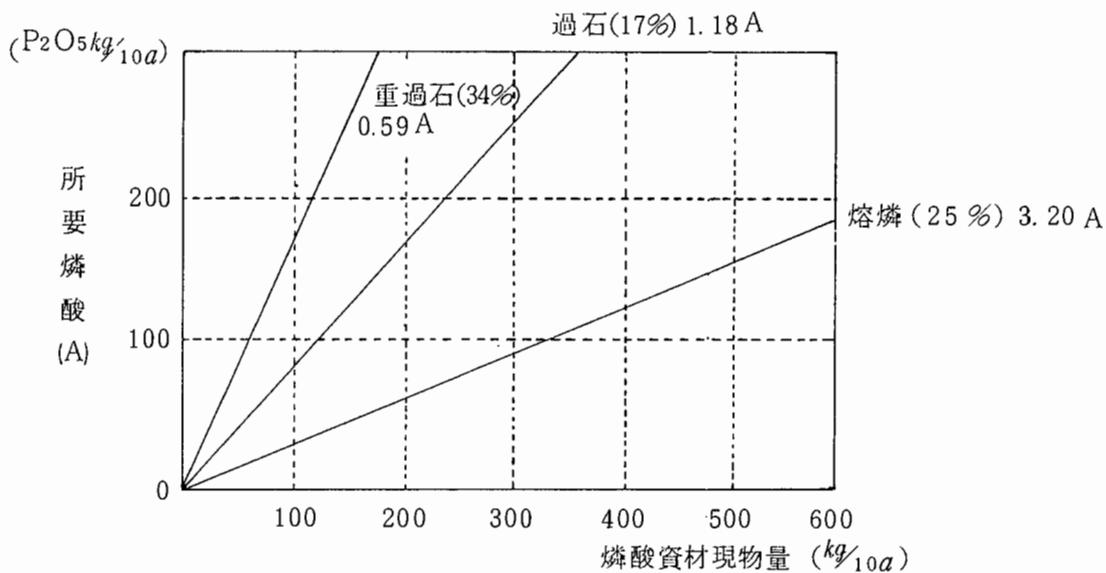


図-12 磷酸資材現物投入早見表

注) 資材混入比は磷酸成分で、  
過石又は重過石 1 : 熔燐 4

### 土壤改良資材所要量算定法

#### (1) 土壤中に有効磷酸が殆んど含まれない場合

磷酸吸収係数の 10 % 改良

= 有効磷酸 16 mg% 目標

#### 計算例

作土深 10 cm を対象に算定する

磷酸吸収係数 2,000、仮比重 0.7

改良目標、磷酸吸収係数の 10 %

$$2,000 \times 0.7 \times 0.1 (10\%) = 140 \text{ kg}$$



これを表-47により過石、熔燐比 1 : 4 等に配分し、作土全層に混合する。

#### (2) 土壤中に有効磷酸が含まれる場合

有効磷酸 16 mg% 目標

#### 計算例

作土深 10 cm を対象に算定する。

有効磷酸を 6 mg% 含むとすれば、

$$\text{富化必要量} = 16 \text{ mg\%} - 6 \text{ mg\%} = 10 \text{ mg\%}$$

磷酸吸収係数 2,000

表-46 より  $\text{P}_2\text{O}_5$  必要量は 125 kg

仮比重 0.7

$$125 \times 0.7 = 87.5 \text{ kg P}_2\text{O}_5$$

これを表-47により過石、熔燐比 1 : 4 等に配分する。

得られた資材量は作土全層に混合する。磷酸資

材量の算出は、作土 10 cm を基準にしているので、これを作土全層に混入すれば、作土層が 10 cm より厚い場合は、有効磷酸濃度は低くなる。同じ理由で、作土が 10 cm 以上の場合の有効磷酸富化目標量の算出には、作土全層の有効磷酸量を差引けばよい。

#### i. 各種磷酸資材の施用に伴う土壤 pH の変動 (室内実験)<sup>30)</sup> (昭和 50 年)

畑土壤の土壤改良の手順としては、磷酸欠乏を改良する前段として、まず土壤 pH を矯正して置くことが必要である。土壤 pH 矯正のための炭カル添加通気法が有効なことは筆者ら<sup>31)</sup> の研究があるが、これら石灰資材の投入と同時に磷酸質資材を多量に投入すれば、当然土壤 pH にも影響することが予想されるので、その実態を調査した。

#### 試験方法

供試土壤は有効磷酸の富化量調査に供試した土壤を 10 点用いたが、これら土壤の pH ( $\text{H}_2\text{O}$ ) は、4.75 ~ 6.80 にわたっている。供試土壤の理化学性を表-48 に示した。

土壤は風乾後 2 mm の篩を通し、各土壤 100 g に各種磷酸質資材 (過石、重過石、熔燐) の所定量を混合し、内容 150 ml のスチロール管瓶につめ、各土壤の最大容水量の 60% に相当する水を添加し

表-48 供試土壤の理化学性

土壤名	土壤型	土性	磷酸吸収係数	pH(H <sub>2</sub> O)	腐植(%)	C E C(m e)	仮比重
1. 胆沢 I	腐植質火山灰土壤	C L	2,320	5.35	16.60	39.56	0.568
2. 滝沢 I	"	L	2,280	6.80	11.60	23.91	0.800
3. 胆沢 II	鉱質、火山灰土壤	C L	2,120	4.98	1.63	19.28	1.015
4. 飯豊 II	"	C L	2,080	5.25	0.90	18.39	1.009
5. 後藤野 I	腐植質火山灰土壤	C L	2,060	5.22	16.81	30.66	0.711
6. 六原 II	鉱質、洪積層土壤	C	1,980	5.25	1.63	20.77	1.011
7. 飯豊 I	腐植質火山灰土壤	C L	1,920	5.05	8.13	24.23	0.749
8. 六原 I	腐植質洪積層土壤	C	1,740	4.95	7.05	22.05	0.866
9. 花泉 I	三紀層土壤	C L	1,120	4.75	0.36	19.78	0.873
10. 江刺 I	沖積層土壤	S L	880	5.34	1.26	11.37	1.263

栓をして25℃定温器中で10、20、30、40、60、140日間インキュベートして土壤pHの経時変化を追跡し、さらにインキュベート終了後の風乾土のpHを測定した。なおpHはいずれもpH(H<sub>2</sub>O)である。

各種磷酸質資材の添加量は各土壤100gに対しそれぞれ磷酸吸収係数の2、5、10%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>相当とし、それぞれの資材の単用および熔磷との併用とした。試験Noを表-49に示した。

表-49 試験区の構成(試験区No.)

資材 量 混合率	過石				重過石				熔磷 单用
	单用	1:1	1:2	1:4	单用	1:1	1:2	1:4	
磷酸 2%	1	4	7	10	13	16	19	22	25
" 5%	2	5	8	11	14	17	20	23	26
" 10%	3	6	9	12	15	18	21	24	27

(混合率は、過石:熔磷又は重過石:熔磷で示した。対照区として無施用区を設けNo.28とした。)

表-50 磷酸質資材添加量

(土壤100g当たりmg)

土壤名	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 成分量			過石单用			重過石单用			熔磷单用		
	2%	5%	10%	2%	5%	10%	2%	5%	10%	2%	5%	10%
1. 胆沢 I	46.4	116.0	232.0	273	682	1,365	136	341	682	232	580	1,160
2. 滝沢 I	45.6	114.0	228.0	268	671	1,341	134	335	671	228	570	1,140
3. 胆沢 II	42.4	106.0	212.0	249	624	1,247	125	312	624	212	530	1,060
4. 飯豊 II	41.6	104.0	208.0	245	612	1,224	122	306	612	208	520	1,040
5. 後藤野 I	41.2	103.0	206.0	242	606	1,212	121	303	606	206	515	1,030
6. 六原 II	39.6	99.0	198.0	232	582	1,164	116	291	582	198	495	990
7. 飯豊 I	38.4	96.0	192.0	226	565	1,129	113	283	565	192	480	960
8. 六原 I	34.8	87.0	174.0	205	512	1,024	102	256	512	174	435	870
9. 花泉 I	22.4	56.0	112.0	132	329	659	66	165	329	112	280	560
10. 江刺 I	17.6	44.0	88.0	104	259	518	52	129	259	88	220	440

(過石:17% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、重過石:34% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、熔磷:20% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-51 磷吸2%相当磷酸質資材添加量

(土壤100g当たりmg)

土壤名	過石：熔磷					重過石：熔磷				
	1:1	1:2	1:4	1:1	1:2	1:4	1:1	1:2	1:4	
1.胆沢I	136	116	91	155	54	186	68	116	45	155
2.滝沢I	134	114	88	152	54	182	67	114	45	152
3.胆沢II	125	106	84	141	49	170	62	106	42	141
4.飯豊II	122	104	81	139	49	166	61	104	41	139
5.後藤野I	121	103	81	137	48	165	61	103	41	137
6.六原II	116	99	78	132	47	158	58	99	39	132
7.飯豊I	113	96	75	128	45	154	56	96	38	128
8.六原I	102	87	68	116	41	139	52	87	34	116
9.花泉I	66	56	44	75	26	90	33	56	22	75
10.江刺I	52	44	34	59	21	70	26	44	17	59
										11
										70

注) 磷吸5%は上表の2.5倍、10%は5倍量とした。

## 試験結果

磷酸質資材の施用による土壤pHの推移を表-52~56に示した。

表-52 各磷酸資材の添加による土壤pHの変化(1)

No	処理	土壌 日 数		胆沢I					滝沢I				
		15	30	60	140	跡地	15	30	60	140	跡地		
1	過石	1	2%	5.10	5.20	5.25	5.05	4.91	6.32	6.33	6.28	6.05	5.93
2		..	5	4.90	5.00	5.10	4.95	4.89	6.10	6.10	6.10	5.98	5.90
3		0	10	4.81	4.98	5.00	4.90	4.83	5.90	5.90	5.95	5.82	5.82
4	熔磷	1	2	5.30	5.50	5.45	5.20	4.92	6.55	6.40	6.48	6.31	6.31
5		..	5	5.18	5.28	5.29	5.32	5.05	6.40	6.46	6.20	6.18	6.30
6		1	10	5.20	5.30	5.50	5.20	5.10	6.40	6.40	6.08	6.20	6.23
7	重過石	1	2	5.50	5.58	5.50	5.32	4.95	6.60	6.55	6.41	6.38	6.41
8		..	5	5.50	5.60	5.62	5.68	5.20	6.55	6.45	6.40	6.31	6.40
9		2	10	5.50	5.50	5.62	5.45	5.29	6.50	6.60	6.23	6.33	6.30
10	..	1	2	5.60	5.70	5.68	5.30	5.10	6.70	6.60	6.65	6.40	6.10
11		..	5	5.60	5.65	5.90	5.75	5.30	6.70	6.60	6.48	6.40	6.10
12		4	10	5.80	5.83	5.91	5.70	5.50	6.70	6.70	6.50	6.51	6.52
13	..	1	2	5.37	5.43	5.40	4.98	4.77	6.45	6.45	6.35	6.25	5.85
14		..	5	5.20	5.20	5.21	5.00	4.89	6.30	6.30	6.25	6.10	5.98
15		0	10	5.10	5.20	5.15	5.03	4.90	6.11	6.15	6.10	6.05	6.00
16	..	1	2	5.60	5.70	5.43	5.30	5.00	6.70	6.55	6.48	6.45	6.51
17		..	5	5.70	5.80	5.79	5.50	5.15	6.60	6.60	6.30	6.40	6.23
18		1	10	5.70	5.80	5.75	5.72	5.41	6.70	6.40	6.40	6.38	6.39
19	..	1	2	5.72	5.70	5.54	5.20	5.10	6.80	6.60	6.35	6.43	6.45
20		..	5	5.80	5.90	5.89	5.72	5.28	6.75	6.70	6.40	6.55	6.20
21		2	10	5.82	5.95	6.01	5.90	5.51	6.80	6.70	6.60	6.60	6.60
22	..	1	2	5.70	5.85	5.81	5.30	5.28	6.80	6.63	6.55	6.50	6.20
23		..	5	5.90	6.00	6.00	5.70	5.50	6.80	6.83	6.52	6.59	6.51
24		4	10	6.10	6.00	6.02	5.99	5.58	7.05	6.98	6.80	6.71	6.60
25	..	熔	单	2	5.87	5.95	5.70	5.42	5.05	6.80	6.71	6.75	6.59
26		..	5	6.14	6.23	6.12	5.75	5.50	6.90	6.90	6.85	6.70	6.50
27		燃	用	10	6.40	6.35	6.24	6.13	5.70	7.20	7.20	6.90	6.83
28	对照区			5.66	5.70	5.68	5.72	5.60	6.80	6.58	6.30	6.30	6.40

表-53 各磷酸資材の添加による土壤pHの変化(2)

No	処理	土壌 日 数	胆沢Ⅱ					飯豊Ⅱ				
			15	30	60	140	跡地	15	30	60	140	跡地
1	過 石 熔 磷	1 .. 0	2%	5.41	5.68	5.60	5.68	5.51	5.20	5.40	5.54	5.50
2		1 .. 5		5.25	5.33	5.32	5.28	5.30	5.10	4.92	5.10	5.17
3		10		5.09	5.17	5.22	5.13	5.10	4.91	4.85	4.92	4.99
4		1 .. 1	2	5.60	5.65	5.52	5.63	5.60	5.32	5.28	5.84	5.51
5		1 .. 5		5.50	5.53	5.40	5.60	5.50	5.25	5.15	5.38	5.43
6		10		5.48	5.40	5.42	5.45	5.40	5.05	5.10	5.30	5.16
7		1 .. 2	2	5.70	5.78	5.75	5.80	5.65	5.50	5.28	5.52	5.40
8		1 .. 5		5.60	5.71	5.70	5.75	5.60	5.32	5.25	5.49	5.40
9		10		5.60	5.60	5.62	5.70	5.60	5.21	5.38	5.40	5.48
10		1 .. 4	2	5.80	5.60	5.71	5.75	5.62	5.45	5.40	5.45	5.60
11		10		5.80	5.70	5.65	5.80	5.62	5.30	5.30	5.62	5.51
12		1 .. 0		5.38	5.41	5.48	5.31	5.43	5.10	5.00	5.10	5.05
13	重 過 石 熔 磷	1 .. 0	2	5.60	5.70	5.60	5.60	5.51	5.42	5.40	5.50	5.49
14		1 .. 5		5.50	5.63	5.60	5.50	5.51	5.15	5.12	5.35	5.30
15		10		5.38	5.41	5.48	5.31	5.43	5.10	5.00	5.10	5.05
16		1 .. 1	2	5.80	5.69	5.58	5.73	5.60	5.60	5.40	5.50	5.55
17		10		5.70	5.75	5.81	5.85	5.63	5.40	5.35	5.54	5.50
18		1 .. 2		5.70	5.70	5.78	5.80	5.65	5.50	5.45	5.58	5.61
19		1 .. 5	2	5.75	5.80	5.72	5.80	5.60	5.43	5.40	5.61	5.61
20		10		5.81	5.81	5.72	6.10	5.80	5.60	5.60	5.62	5.53
21		1 .. 4		5.81	5.81	5.72	6.10	5.80	5.60	5.60	5.62	5.49
22		1 .. 0	2	5.70	5.79	5.74	5.75	5.60	5.48	5.39	5.70	5.60
23		10		6.00	6.01	5.20	6.22	6.00	5.65	5.88	5.60	6.01
24		1 .. 4		6.00	6.18	6.28	6.48	6.00	5.60	5.70	5.60	5.60
25	熔 磷	单 用	2	5.62	5.75	5.95	5.75	5.73	5.48	5.60	5.65	5.80
26		5		5.80	5.91	5.90	5.93	5.90	5.60	5.50	5.60	5.87
27		10		6.00	6.18	6.28	6.48	6.00	5.60	5.70	5.60	5.65
28	対照区			5.60	5.60	5.55	5.63	5.50	5.58	5.50	5.52	5.50
												-

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-54 各磷酸資材の添加による土壤pHの変化 (3)

No.	土壤 日 数			後藤野 I					六原 II				
	処理			15	30	60	140	跡地	15	30	60	140	跡地
1	過 石 熔 磷	2%	1	5.05	5.31	4.85	4.42	4.65	5.10	5.38	5.48	5.29	5.10
2			5	4.81	5.08	5.05	4.72	4.90	4.60	5.00	5.12	5.00	5.83
3			10	4.70	4.90	4.92	4.63	4.80	4.55	4.80	4.90	4.85	4.60
4		2	1	5.43	5.51	5.12	4.61	5.28	5.00	5.35	5.48	5.38	5.20
5			5	5.20	5.30	5.08	4.72	5.95	4.80	5.19	5.10	5.09	5.00
6			10	5.10	5.30	5.35	4.87	5.18	4.70	5.00	5.10	5.02	4.88
7		2	1	5.50	5.73	5.42	4.69	4.85	5.17	5.40	5.54	5.33	5.25
8			5	5.40	5.57	5.10	4.93	5.00	4.90	5.21	5.38	5.30	5.15
9			10	5.35	5.50	5.30	4.92	4.79	4.80	5.10	5.20	5.12	5.00
10		2	1	5.67	5.67	5.00	4.73	4.70	5.22	5.51	5.50	5.49	5.30
11			5	5.60	5.75	5.35	4.95	4.48	5.07	5.38	5.50	5.50	5.20
12			10	5.55	5.65	5.40	5.19	5.14	5.00	5.23	5.41	5.32	5.10
13	重 過 石 熔 磷	2	1	5.51	5.50	4.79	4.41	4.59	5.01	5.35	5.41	5.40	5.15
14			5	5.30	5.39	4.90	4.49	4.70	4.70	5.08	5.11	5.11	4.95
15			10	5.10	5.20	5.04	4.44	4.85	4.55	4.88	5.00	4.83	4.75
16		2	1	5.77	5.70	5.00	4.63	4.70	5.25	5.40	5.48	5.51	5.20
17			5	5.65	5.70	5.15	4.76	4.48	5.10	5.40	5.32	5.45	5.22
18			10	5.65	5.75	5.30	5.15	5.22	5.02	5.30	5.42	5.22	5.08
19		2	1	5.88	5.70	5.00	4.69	4.81	5.21	5.52	5.49	5.40	5.25
20			5	5.80	5.75	5.18	4.97	5.08	5.10	5.40	5.59	5.46	5.30
21			10	5.93	5.90	5.32	5.09	5.29	5.01	5.30	5.40	5.30	5.20
22		2	1	5.80	5.90	5.05	4.68	4.88	5.18	5.58	5.63	5.58	5.30
23			5	5.95	5.90	5.40	4.88	5.00	5.20	5.53	5.50	5.41	5.25
24			10	6.00	6.15	5.40	5.14	5.45	5.10	5.50	5.80	5.45	5.40
25	熔 磷	单 用	2	5.97	5.93	5.00	4.63	4.82	5.23	5.55	5.54	5.55	5.30
26			5	6.15	6.20	5.52	4.99	4.95	5.30	5.65	5.72	5.61	5.25
27			10	6.30	6.30	5.65	5.31	5.15	5.31	5.60	6.45	6.20	5.50
28	対照区			5.90	5.85	4.81	4.37	4.52	5.39	5.50	5.60	5.60	5.40

表-55 各磷酸資材の添加による土壤pHの変化(4)

No	処理	日 数	土壤	飯 豊 I				六 原 I				
				15	30	60	140	跡地	15	30	60	140
1	過 石 燃 焼	2%	5.20	5.20	5.15	4.89	4.60	4.85	5.00	5.12	5.13	4.93
2			5.15	5.10	5.20	5.02	4.82	4.69	4.71	4.95	5.00	4.80
3			4.95	4.81	4.98	4.79	4.56	4.48	4.58	4.82	4.80	4.68
4			5.40	5.38	5.40	5.38	5.40	4.90	5.02	5.30	5.02	4.88
5		1 .. 1	5.48	5.30	5.40	5.15	4.90	4.66	4.70	4.78	4.70	4.48
6			5.35	5.28	5.32	5.12	4.98	4.53	4.72	4.90	4.62	4.55
7			5.45	5.40	5.50	5.14	4.81	4.99	5.20	5.50	5.40	5.20
8		1 .. 2	5.58	5.40	5.58	5.23	4.80	4.70	4.75	4.80	4.70	4.42
9			5.51	5.54	5.50	5.27	5.10	4.65	4.75	4.92	4.80	4.60
10		1 .. 4	5.50	5.49	5.53	5.21	4.80	5.10	5.10	5.48	5.20	5.10
11			5.10	5.48	5.70	5.29	4.85	4.95	4.90	4.84	4.73	4.50
12			5.60	5.65	5.60	5.23	5.09	4.81	5.00	4.90	4.85	4.72
13			5.62	5.35	5.31	4.97	4.75	4.99	5.10	5.40	4.88	4.60
14	重 過 石 燃 焼	1 .. 0	5.40	5.25	5.21	5.01	4.80	4.85	5.00	5.18	4.83	4.60
15			5.30	5.10	5.04	4.86	4.62	4.62	4.82	5.10	4.90	4.72
16			5.50	5.31	5.49	5.04	4.75	5.10	5.15	5.45	5.31	5.11
17		1 .. 1	5.52	5.40	5.50	5.23	4.80	4.79	4.80	4.75	4.59	4.43
18			5.70	5.60	5.52	5.42	5.05	4.80	4.80	4.72	4.71	4.60
19			5.70	5.50	5.55	5.13	4.90	4.85	4.85	4.70	4.53	4.41
20		1 .. 2	5.80	5.60	5.60	5.28	5.05	4.86	4.90	4.79	4.60	4.51
21			5.75	5.81	5.70	5.29	5.15	4.90	5.00	4.92	4.70	4.60
22			5.59	5.52	5.54	5.16	4.80	4.90	4.90	4.72	4.55	4.40
23		1 .. 4	5.78	5.50	5.70	5.31	5.29	4.90	4.98	4.83	4.73	4.50
24			5.78	5.80	5.80	5.46	5.18	5.09	5.02	4.89	4.80	4.65
25			5.65	5.50	5.50	5.22	4.80	5.20	5.30	5.58	5.05	4.90
26	燃 焼	单 用	5.70	5.80	5.70	5.43	4.90	5.40	5.51	5.79	5.30	5.10
27			6.05	5.82	5.89	5.71	5.13	5.63	5.90	6.00	5.60	5.55
28			5.60	5.55	5.60	5.11	4.70	5.11	5.21	5.48	4.80	4.78

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-56 各磷酸資材の添加による土壤pHの変化(5)

No	処理	日数	土壤					花 泉 I				江 刺 I			
			15	30	60	140	跡地	15	30	60	140	跡地	15	30	140
1	過石熔磷酸	2%	4.50	4.70	4.71	4.48	4.65	5.49	5.25	5.31	5.31	5.20			
2		1..0	4.23	4.30	4.35	4.22	4.40	5.25	5.07	5.20	5.01	5.08			
3		10	4.40	4.40	4.48	4.55	4.59	5.23	5.01	5.10	5.03	4.86			
4		2	4.60	4.70	4.70	4.73	4.70	5.51	5.30	5.35	5.29	5.05			
5		5	4.45	4.48	4.50	4.95	4.69	5.45	5.30	5.29	5.33	5.10			
6		10	4.47	4.69	4.51	4.73	4.90	5.48	5.32	5.30	5.29	5.08			
7		2	4.60	4.46	4.65	4.82	4.61	5.55	5.41	5.30	5.28	5.30			
8		5	4.56	4.50	4.70	4.88	4.71	5.93	5.51	5.32	5.30	5.30			
9		10	4.60	4.64	4.70	4.83	4.85	5.59	5.50	5.50	5.38	5.30			
10		2	4.70	4.85	4.68	4.85	4.75	5.60	5.40	5.42	5.25	5.05			
11	重過石熔磷酸	5	4.67	4.75	4.74	4.93	4.80	5.30	5.20	5.20	5.11	5.10			
12		10	4.70	4.51	4.89	4.93	4.95	5.65	5.58	5.61	5.58	5.50			
13		2	4.60	4.81	4.69	4.73	4.31	5.60	5.33	5.32	5.25	5.10			
14		5	4.40	4.48	4.43	4.53	4.60	5.51	5.21	5.48	5.18	5.10			
15		10	4.32	4.34	4.30	4.39	4.96	5.31	5.23	5.22	5.15	4.80			
16		2	4.67	4.75	4.80	5.01	4.70	5.60	5.40	5.38	5.32	5.21			
17		5	4.55	4.70	4.65	4.87	4.79	5.60	5.48	5.41	5.31	5.21			
18		10	4.58	4.55	4.70	4.84	4.79	5.70	5.50	5.40	5.40	5.48			
19		2	4.70	4.76	4.65	4.93	4.80	5.70	5.50	5.40	5.38	5.25			
20		5	4.68	4.55	4.72	4.92	4.81	5.71	5.55	5.42	5.47	5.30			
21	熔磷酸	10	4.73	4.60	4.90	5.03	4.85	5.80	5.57	5.50	5.50	5.38			
22		2	4.70	4.78	4.80	5.15	4.72	5.63	5.50	5.48	5.33	5.30			
23		5	4.70	4.74	4.80	5.04	4.90	5.72	5.50	5.50	5.33	5.45			
24		10	4.70	4.62	4.91	5.15	5.01	5.85	5.65	5.71	5.60	5.60			
25		单用	2	4.83	4.90	4.90	5.15	4.90	5.70	5.45	5.39	5.28	5.15		
26	熔磷酸	5	5.10	5.30	5.13	5.45	4.91	5.80	5.60	5.52	5.41	5.40			
27		10	5.64	5.71	6.40	6.53	6.35	6.02	5.80	5.83	5.60	5.65			
28	対 照 区			5.20	5.10	5.28	5.32	5.20	5.70	5.35	5.40	5.23	5.22		

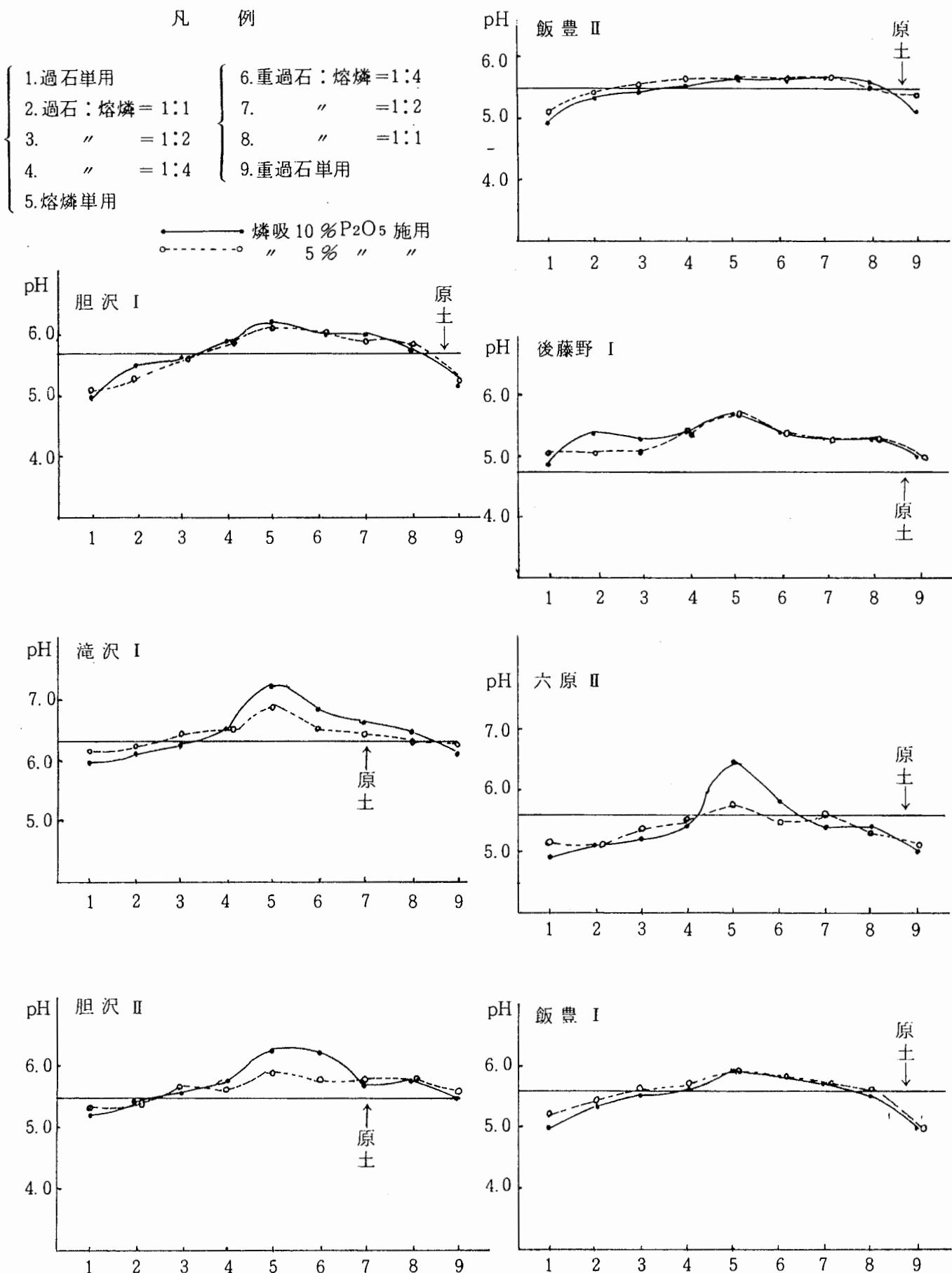


図 - 13 各磷酸資材の添加による土壤 pHの変化(1) (60 日)

畑土壤改良基準策定のための基礎研究

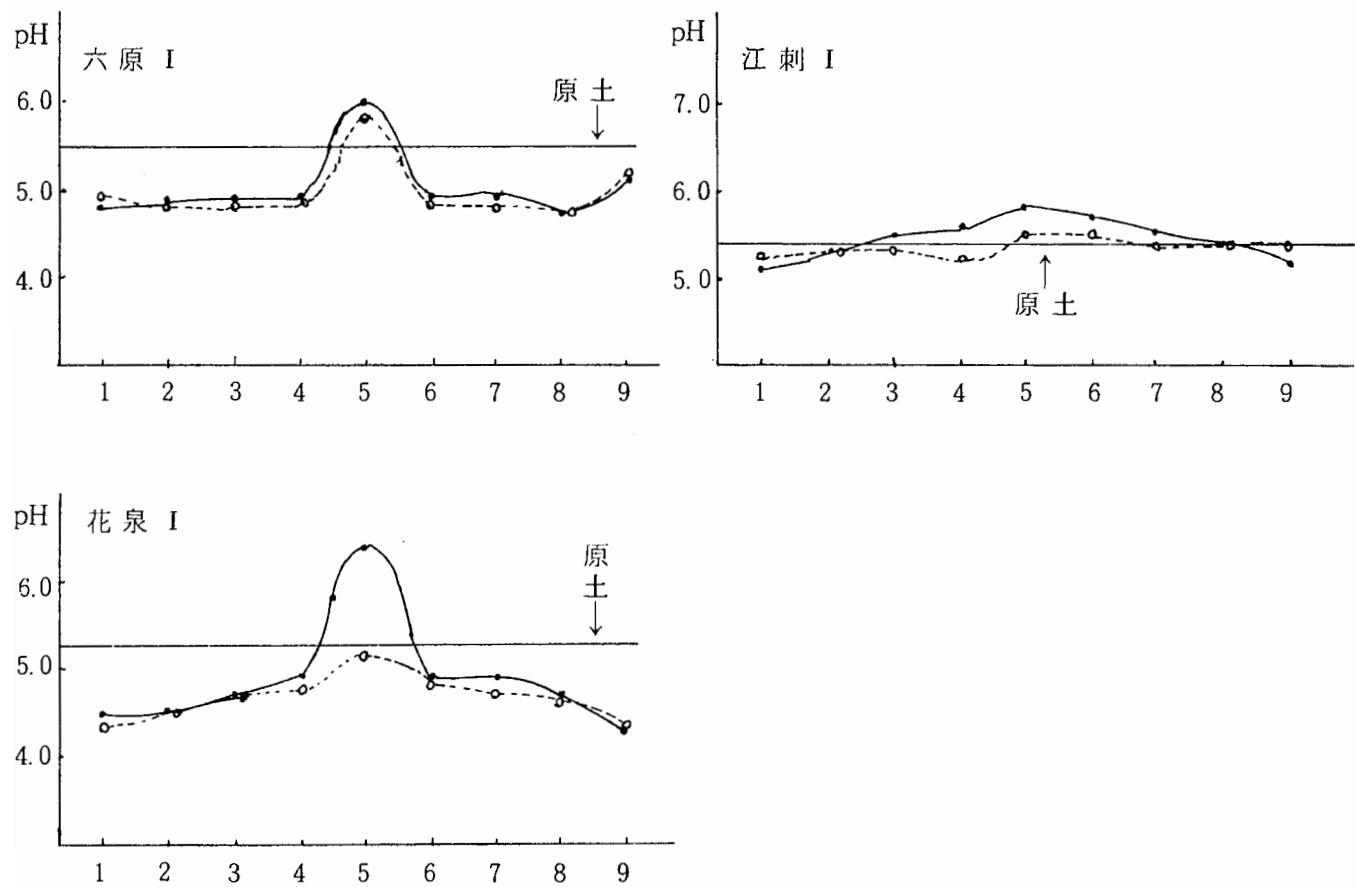


図-14 各磷酸資材の添加による土壤pHの変化(2) (60日)

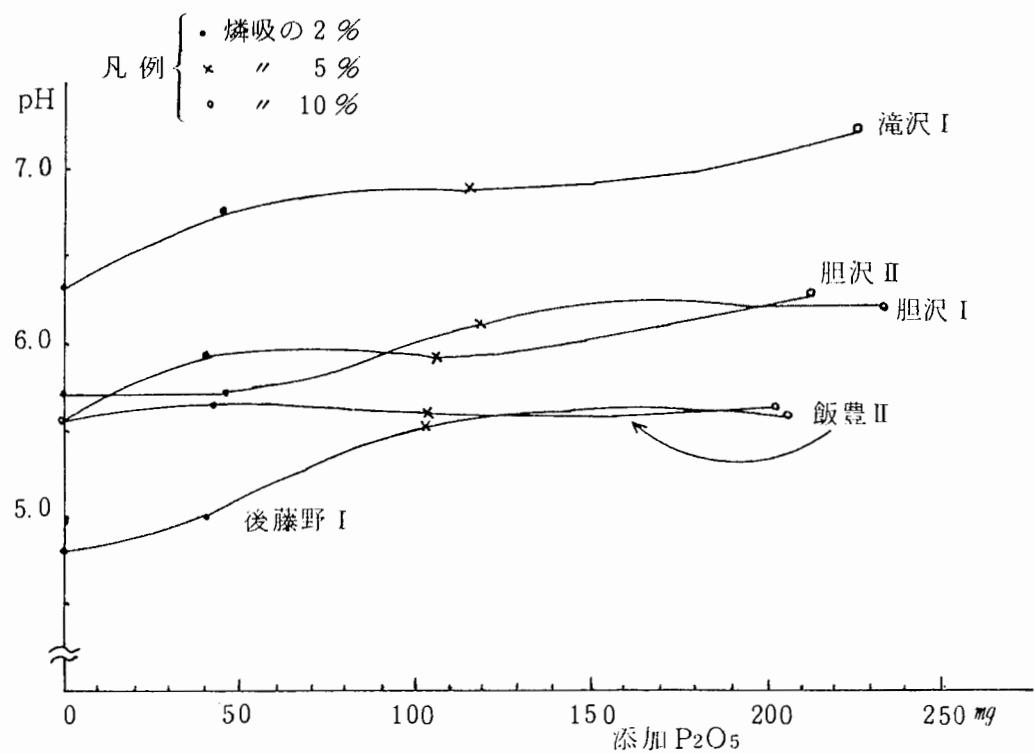


図-15 熔磷による土壤pHの変化(1) (60日)

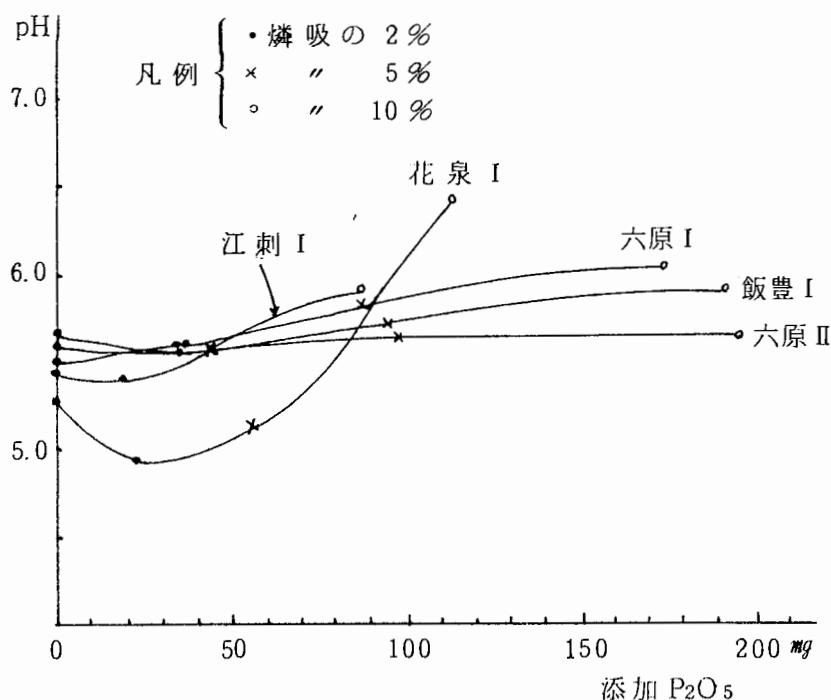


図-16 熔焼による土壤pHの変化(2)(60日)

### 試験結果

磷酸吸収係数が880～2,320、pH(H<sub>2</sub>O)が4.75～6.80の土壤を供試し、それぞれの土壤の磷酸吸収係数の2、5、10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を過石、重過石、熔焼で混合比も変えて添加し、経時的な土壤pHの変化を追跡した。

その結果、インキュベート開始後15日で、各土壤とも磷酸質資材添加量の違いによるpHの相対的な差は一定に近くなり、その後の経時変化は大きくなかった。

熔焼によりpHは上昇し、過石、重過石によりpHは低下する。過石と重過石の差は殆ど見られないが、わずかに過石で低下程度が大きい傾向であった。

熔焼と過石あるいは重過石を併用するとpHの変動は極めて小さく、過石又は重過石1に対して熔焼4の施用比では、磷吸5%、10%施用とも原土pHを殆ど動かさない場合が多くあった。

最もpHをおし上げる熔焼について見ると図17～18のように磷吸の10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>施用、土壤100g当りP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>として200～250mgの添加においてもpHの上昇はせいぜい0.5前後の土壤が多くあった。

### 考 察

磷酸欠乏土壤の改良のために磷酸質資材を投入するが、その際に必ず問題になるのは土壤pHの調整である。すなわち、pHの高い条件を好む作物では熔焼比を高め、酸性を好む作物では過石あるいは重過石比を高めるという考え方である。この考え方は基本的には誤りではないが、本試験に見られるように、磷酸質資材を混合して土壤に施用すると、これに伴う土壤pHの変動は意外に小さいので、土壤反応の矯正は別に考えるのが妥当である。すなわち、畑土壤でしばしば問題になるのは、強酸性の磷酸欠乏という条件が多いことからすれば、このような場合は先ずpH矯正に要する炭カルを算定し、次いで磷酸欠乏を改良するに要する磷酸質資材量を算定しこれを施用しても、磷酸質資材が熔焼4に対して過石又は重過石1という施用比であれば、pHの変動も少なく、ほぼ所期の目標を達せられると見られる。

ただし、これら土壤pHの変動は、土壤の緩衝能に左右されることはあるが、例えば本試験でも、花泉土壤のように緩衝能の小さい土壤の場合は、各資材の単用により、少ない施用量でもpHの変動が大きいことが認められる。

結局野菜栽培における一般的な腐植質火山灰の

土壤改良の手順としては、pH ( $H_2O$ ) の矯正目標を 6.2 ~ 6.5 として炭カルを施用し、作土 10cm 相当の有効磷酸を 16 mg% になるよう、熔燐、過石(重過石)比を 4 : 1 にして施用すれば、土壤 pH は 6.2 ~ 6.5 からの変動はほぼ無視してよいことになる。また何等かの理由により熔燐を単用する場合、土壤の緩衝能と施用する熔燐量(つまり磷酸吸収係数)によって pH の変動値は当然異なるが、火山灰土壤の場合は 10a 当り  $P_2O_5$  として 200 ~ 250 kg の熔燐施用であっても、pH の上昇は 0.5 前後しか見込まれない。ただし、腐植含量が少なく塩基置換容量、磷酸吸収係数も小さい花泉土壤(三紀層土壤)のような場合は、少量の熔燐によって pH がかなり上昇することは認められる。以上のようなことから、土壤改良の手順としては、たとえ、熔燐を単用する場合においても、熔燐による酸性矯正の効果を過大に評価しないよう、炭カルによる酸性矯正を別途考慮しておくことが必要である。

#### ウ. 硅酸質肥料の施用に伴う土壤 pH 及び磷酸吸収係数の変動(室内実験)<sup>32)</sup>(昭和 50 )

珪酸質肥料(以下珪カルと略称)は一般には水

田にのみ施用されているが、その含有主成分が石灰と珪酸であることを考えれば、畑土壤の改良、つまり酸性の矯正とばん土性の低下による磷酸吸収係数の低下にも関与することが予想されるので県内の地質系統の異なる土壤を供試して室内実験を行なった。

#### 試験方法

風乾土(1 mm 篩パス) 100g を 150 ml のスチロール管瓶につめ、これに珪カルをそれぞれ、2、250、500、750、1,000 mg を混合し、水を各土壤の最大容水量の 60 ~ 70 % になるように加え、栓をして 30°C 定温器中で 150 日間インキュベートした。

#### 可給態珪酸分析法<sup>33)</sup>

風乾土 10g に pH 4.0 の 1N 酢酸ナトリウム緩衝液を 100 ml 加え、40°C で 5 時間振盪し、濾液 1 ml を比色に供した。すなわち濾液 1 ml に 脱塩水 9 ml、0.25 N 塩酸 5 ml、モリブデン酸アンモニウム液 5 ml を加えて 3 分間放置する(モリブデン酸アンモニウム 102 g を水に溶かして 1 l としたもの)。次いで亜硫酸ナトリウム液(無水亜硫酸ナトリウム 170 g を水に溶かして 1 l としたもの)を 10 ml 加え、

表-57 供 試 土 壤

採取地点	土性	土 色	腐 植 (%)	pH ( $H_2O$ )	可給態珪酸(mg)	備 考
赤 林	CL	7.5 YR 2/2	9.76	5.33	29	洪積性火山灰
石鳥谷	C	10 YR 6/6	0.27	5.21	31	洪積層
村崎野 I	CL	7.5 YR 3/2	8.13	5.05	37	洪積性火山灰
" II	CL	7.5 YR 4/3	0.90	5.25	77	"
花 泉	CL	10 YR 3/3	0.36	4.75	26	三 紀 層
一 関 I	C	10 YR 5/4	0.54	5.18	36	"
" II	CL	10 YR 6/4	0.54	5.62	28	"
巖 美	L	10 YR 6/4	0.36	5.45	35	"
後藤野	CL	7.5 YR 1/1	16.81	5.22	22	洪積性火山灰
六 原 I	C	7.5 YR 3/1	7.05	4.95	30	洪積層
" II	C	7.5 YR 4/5	1.63	5.25	52	"
胆 沢 I	CL	7.5 YR 1/1	16.60	5.35	44	風積性火山灰
" II	CL	7.5 YR 4/6	1.63	4.98	80	"
前 沢	C	7.5 YR 5/4	1.26	4.78	28	洪積層
江 刺	SL	7.5 YR 4/3	1.26	5.34	11	沖積層
滝 沢 I	L	7.5 YR 3/1	11.20	6.45	121	風積性火山灰
" II	L	7.5 YR 4/3	2.57	7.30	129	"

15~20分間放置し、モリブデン青の発色を634m $\mu$ で比色する。

磷酸吸収係数測定法<sup>29)</sup>

磷酸吸収係数は0.01M・正磷酸を吸着させる方法によった。すなわち風乾土5gに0.01M・正磷酸液を100ml加え、1時間振盪後時々振盪しながら24時間室温に放置し、後漉過して滤液について磷酸濃度を測定し、磷酸吸収係数を算出した。

なお磷酸の定量は燐バナドモリブデン酸による比色法によった。すなわち、100mlのメスフラスコにメタバナジン酸アンモニウム液(メタバナジン酸アンモニウム1.12g)を水に溶かし、硝酸を250ml加え、これにモリブデン酸アンモニウム27gを水にとかした液を攪拌しながら徐々に注加し、全

量を1lとし、使用時これを5倍に稀釈したもの)を50mlあらかじめとり、これに検液1mlを入れる。水を加えて全量を100mlとして暫時振盪し、30分間放置後、400~420m $\mu$ で比色し、磷酸濃度を測定した。

## 供試土壤

供試土壤の性質を表-57に示した。

## 試験結果と考察

珪カル添加による可給態珪酸の富化量、pHの変動値、磷酸吸収係数の変動値を表58~59に示した。

表-58 硅カル添加による土壤化学性の変動 (1)

土壤	項目	珪カル添加量(mg)					無処理区対比変動値				水分%
		0	250	500	750	1,000	250	500	750	1,000	
赤林	可珪(mg)	28.9	45.6	52.0	86.6	94.1	16.7	23.1	57.7	65.2	21.3
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.10	5.29	5.51	5.81	6.08	0.19	0.41	0.71	0.98	
	磷酸吸	1,034	1,034	1,034	1,025	1,025	0	0	-9	-9	
石鳥谷	可珪(mg)	30.9	39.6	55.1	95.3	159.3	8.7	24.2	64.4	128.4	20.1
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.90	4.92	5.11	6.01	7.82	0.02	0.21	1.11	2.10	
	磷酸吸	589	589	571	535	535	0	-18	-54	-54	
村崎野 I	可珪(mg)	37.3	49.2	60.3	72.2	85.4	11.9	23.0	34.9	48.1	22.2
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.30	4.80	5.08	5.15	5.65	0.50	0.78	0.85	1.35	
	磷酸吸	1,351	1,342	1,306	1,297	1,280	-9	-45	-54	-71	
村崎野 II	可珪(mg)	76.6	94.9	110.0	139.4	162.1	18.3	33.3	62.8	85.5	18.4
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.25	5.40	5.66	5.85	6.25	0.15	0.41	0.60	1.00	
	磷酸吸	1,532	1,510	1,496	1,487	1,469	-22	-36	-45	-63	
花泉	可珪(mg)	26.1	28.9	40.4	67.1	86.2	2.8	14.3	41.0	60.1	22.7
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.56	4.80	4.88	5.10	6.30	0.24	0.32	0.54	1.74	
	磷酸吸	535	530	470	470	446	-5	-65	-65	-89	
一関 I	可珪(mg)	36.1	46.4	61.1	70.7	123.9	10.3	25.0	34.6	87.8	20.1
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.87	5.00	5.12	5.66	6.75	0.13	0.25	0.79	1.88	
	磷酸吸	544	508	481	470	462	-36	-63	-72	-82	

注) 可珪=可給態珪酸、磷酸吸=磷酸吸収係数

## 畑土壤改良基準策定のための基礎研究

表-59 珪カル添加による土壤化学性の変動(2)

土壤	項目	珪カル添加量(mg)					無処理区対比変動値				水分 %
		0	250	500	750	1,000	250	500	750	1,000	
一関 II	可珪(mg)	27.7	65.1	86.2	110.8	129.9	37.4	58.5	83.1	102.2	26.8
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.40	7.50	8.31	8.58	8.85	2.10	2.91	3.18	3.45	
	磷吸	100	136	145	145	118	36	45	45	18	
巣美	可珪(mg)	21.7	35.3	52.4	108.0	129.9	13.6	30.7	86.3	108.2	12.4
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.40	5.40	5.49	6.10	6.75	0	0.09	0.70	1.35	
	磷吸	372	345	326	326	299	-27	-46	-46	-73	
後藤野	可珪(mg)	22.1	30.5	38.4	50.4	58.9	8.4	16.3	28.3	36.8	25.9
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.40	4.70	4.90	5.18	5.35	0.30	0.50	0.78	0.95	
	磷吸	1,460	1,442	1,430	1,420	1,415	-18	-30	-40	-45	
六原 I	可珪(mg)	29.7	39.6	50.4	59.9	75.0	9.9	20.7	30.2	45.3	22.0
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.05	5.20	5.31	5.70	5.80	0.15	0.26	0.65	0.75	
	磷吸	1,188	1,165	1,143	1,140	1,133	-23	-45	-48	-55	
六原 II	可珪(mg)	52.4	68.3	83.0	113.2	134.7	15.9	30.6	60.8	82.3	16.7
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.40	5.45	5.48	5.50	5.80	0.05	0.08	0.10	0.40	
	磷吸	1,505	1,496	1,442	1,415	1,378	-9	-53	-90	-122	
胆沢 I	可珪(mg)	44.0	52.8	58.3	83.0	79.0	8.8	14.3	39.0	35.0	27.3
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.10	5.21	5.30	5.34	5.60	0.11	0.20	0.20	0.24	
	磷吸	1,995	1,959	1,904	1,859	1,810	-36	-91	-136	-185	
胆沢 II	可珪(mg)	80.2	100.9	116.8	127.1	157.9	20.2	36.6	46.9	77.7	18.2
	pH(H <sub>2</sub> O)	5.17	5.35	5.52	5.69	6.00	0.18	0.35	0.52	0.83	
	磷吸	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
前沢	可珪(mg)	28.1	42.4	59.5	88.9	131.5	14.3	31.4	60.8	103.4	17.0
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.71	5.08	5.31	6.00	6.89	0.37	0.60	1.29	2.18	
	磷吸	444	417	399	399	390	-27	-45	-45	-54	
江刺	可珪(mg)	10.6	21.7	49.6	83.4	104.8	11.1	39.0	72.8	94.2	12.6
	pH(H <sub>2</sub> O)	4.80	5.60	6.50	7.45	7.65	0.80	1.70	2.65	2.85	
	磷吸	281	281	281	263	236	0	0	-18	-45	
滝沢 I	可珪(mg)	121.0	142.3	170.8	175.1	212.8	21.3	49.8	54.1	91.8	29.6
	pH(H <sub>2</sub> O)	6.45	6.65	7.00	7.15	7.40	0.20	0.55	0.70	0.95	
	磷吸	2,370	2,260	2,215	2,200	2,078	-110	-155	-170	-292	
滝沢 II	可珪(mg)	128.9	151.4	178.7	203.1	241.9	22.5	49.8	74.2	113.0	27.4
	pH(H <sub>2</sub> O)	7.32	7.51	7.75	7.99	8.22	0.19	0.43	0.67	0.90	
	磷吸	2,151	2,041	1,932	1,850	1,779	-110	-219	-301	-372	

注) 可珪 = 可給態珪酸、磷吸 = 磷酸吸收係数

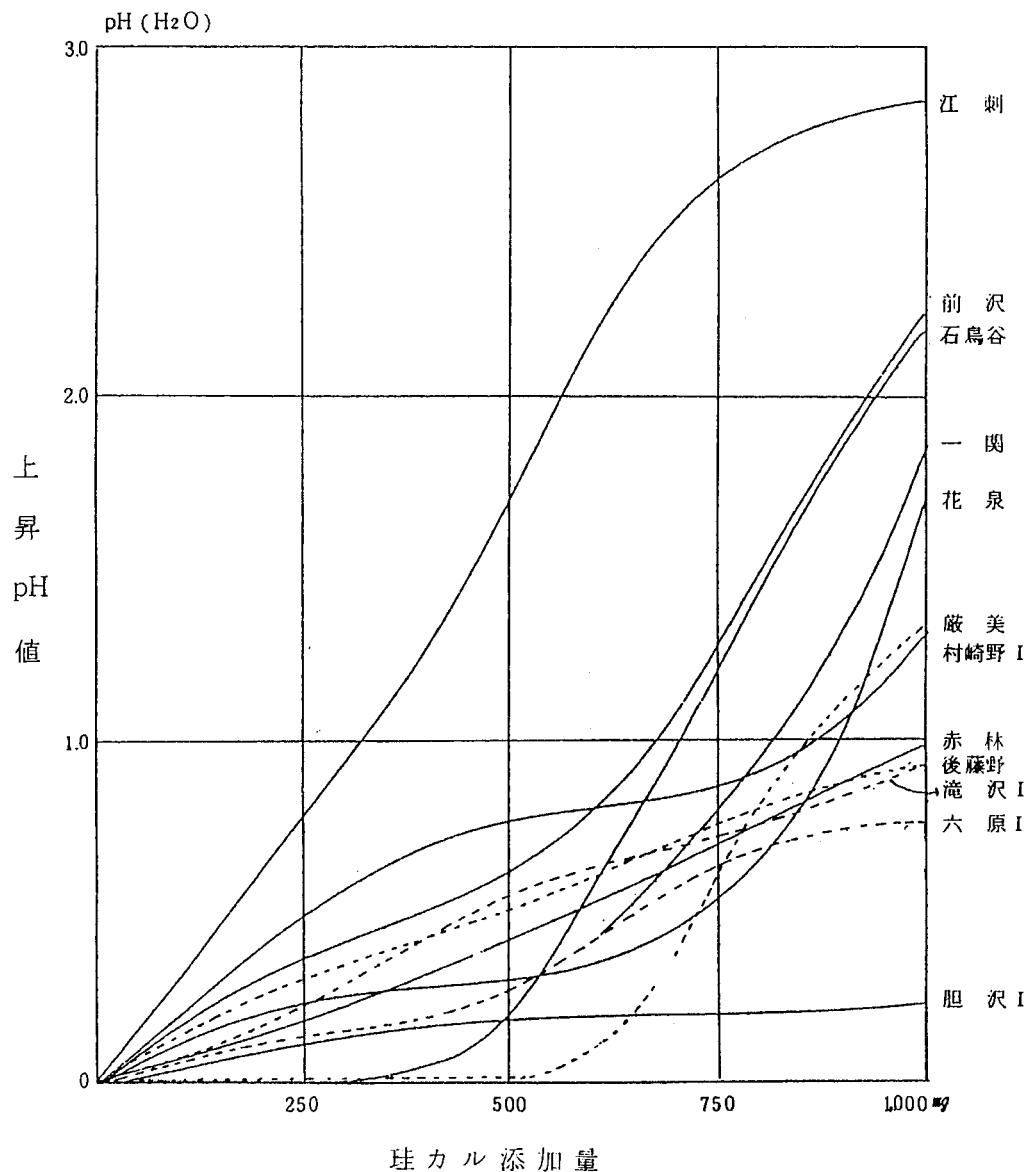


図-19 硅カル添加によるpHの上昇

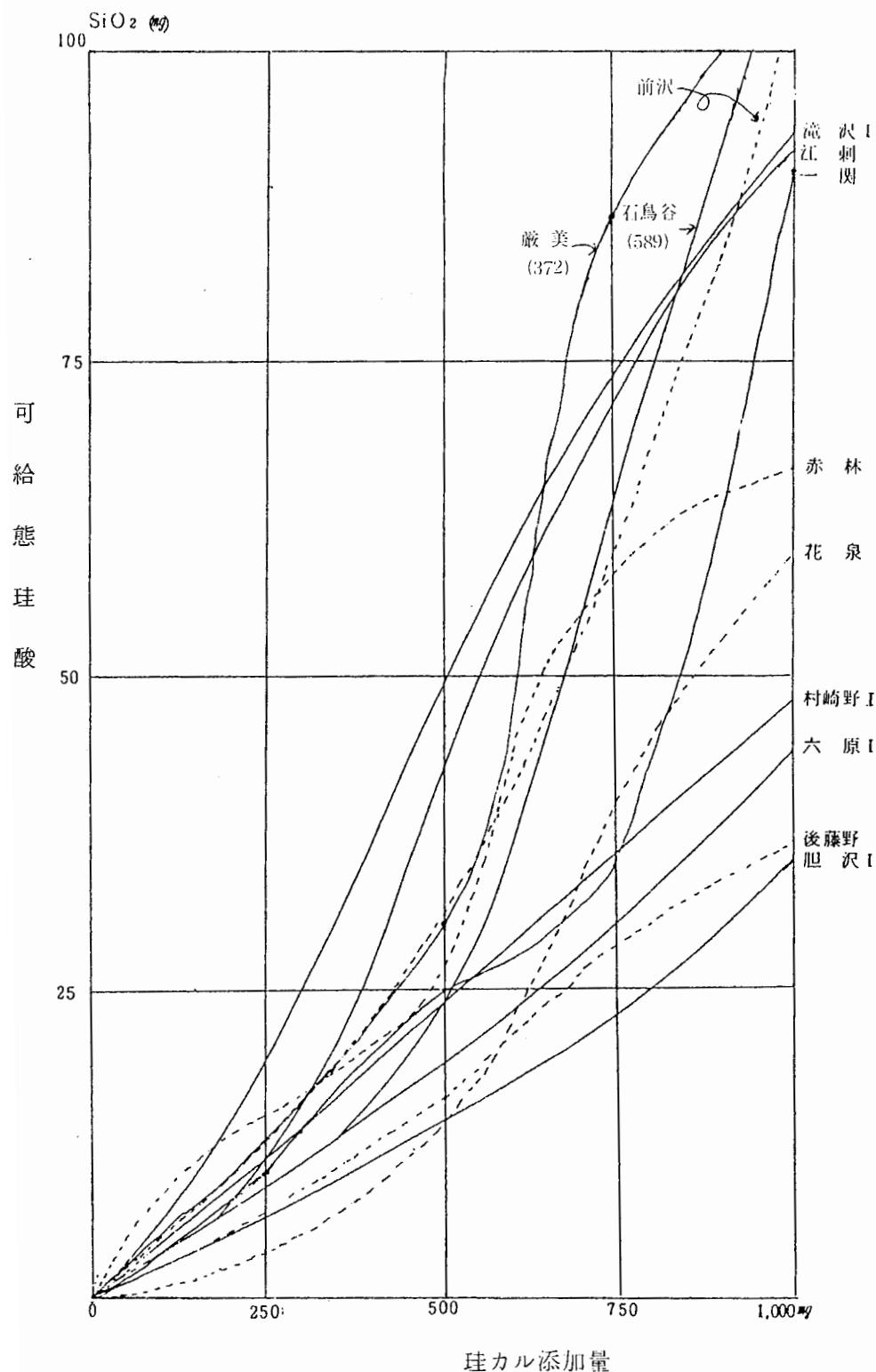


図-20 硅カル添加による可給態珪酸の富化

表-60 土壌における珪カル添加によるpHの上昇と可給態珪酸富化量の相関

地質	土性	腐植	地点	処理点数	r	要因別相関係数(r)
風積性	L	—H	滝沢Ⅰ	4	0.974	磷酸吸収係数 磷吸 1,000以下: 0.829 (28点) " 1,000以上: 0.566 (32点)
	L	↙H	滝沢Ⅱ	4	0.933	
火山灰	CL	—H	胆沢Ⅰ	4	0.693	土性 S L: 0.985 (4) L: 0.968 (4) C L: 0.797 (20) C: 0.878 (32)
	CL	↙H	胆沢Ⅱ	4	0.997	
洪積性	CL	°H	赤林	4	0.966	腐植 富む以上: 0.720 (20) 含む以下: 0.768 (40)
	CL	°H	村崎野Ⅰ	4	0.526	
火山灰	CL	↙H	村崎野Ⅱ	4	0.979	腐植 富む以上: 0.720 (20) 含む以下: 0.768 (40)
	CL	—H	後藤野	4	0.999	
三紀層 土壌	C	ナシ	一関Ⅰ	4	0.986	地質 風積性火山灰: 0.892 (8) 洪積性火山灰: 0.693 (16) 三紀層: 0.829 (16) 洪積層: 0.858 (16) 沖積層: 0.985 (4)
	CL	ナシ	一関Ⅱ	4	0.968	
	L	ナシ	巖美	4	0.956	
	CL	ナシ	花泉	4	0.885	
	C	ナシ	石鳥谷	4	0.995	
洪積層 土壌	C	°H	六原Ⅰ	4	0.947	
	C	ナシ	六原Ⅱ	4	0.894	
	C	ナシ	前沢	4	0.997	
沖積層 土壌	SL	ナシ	江刺	4	0.985	

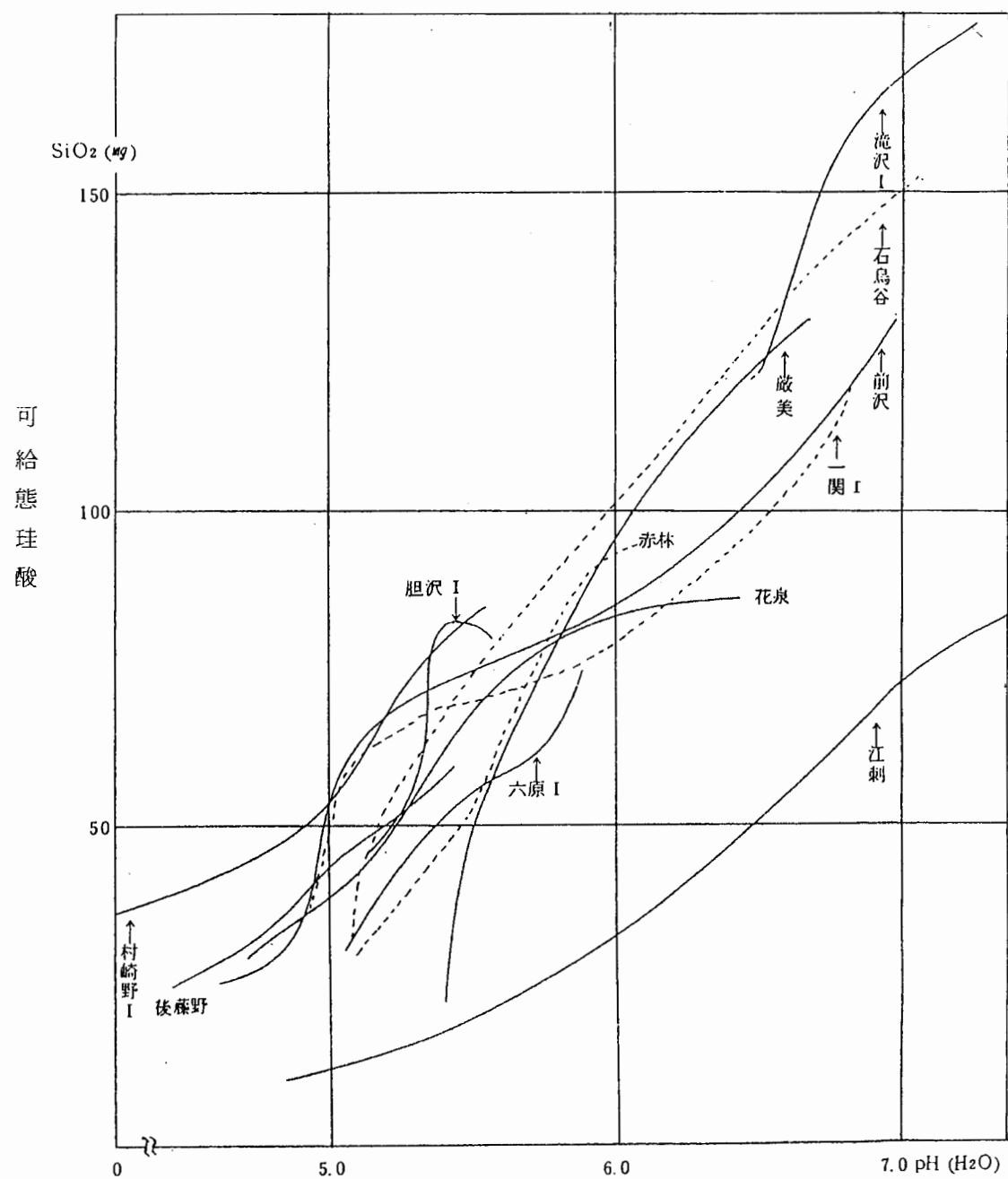


図-21 硅カル添加によるpHの変動と可給態珪酸含量の変動

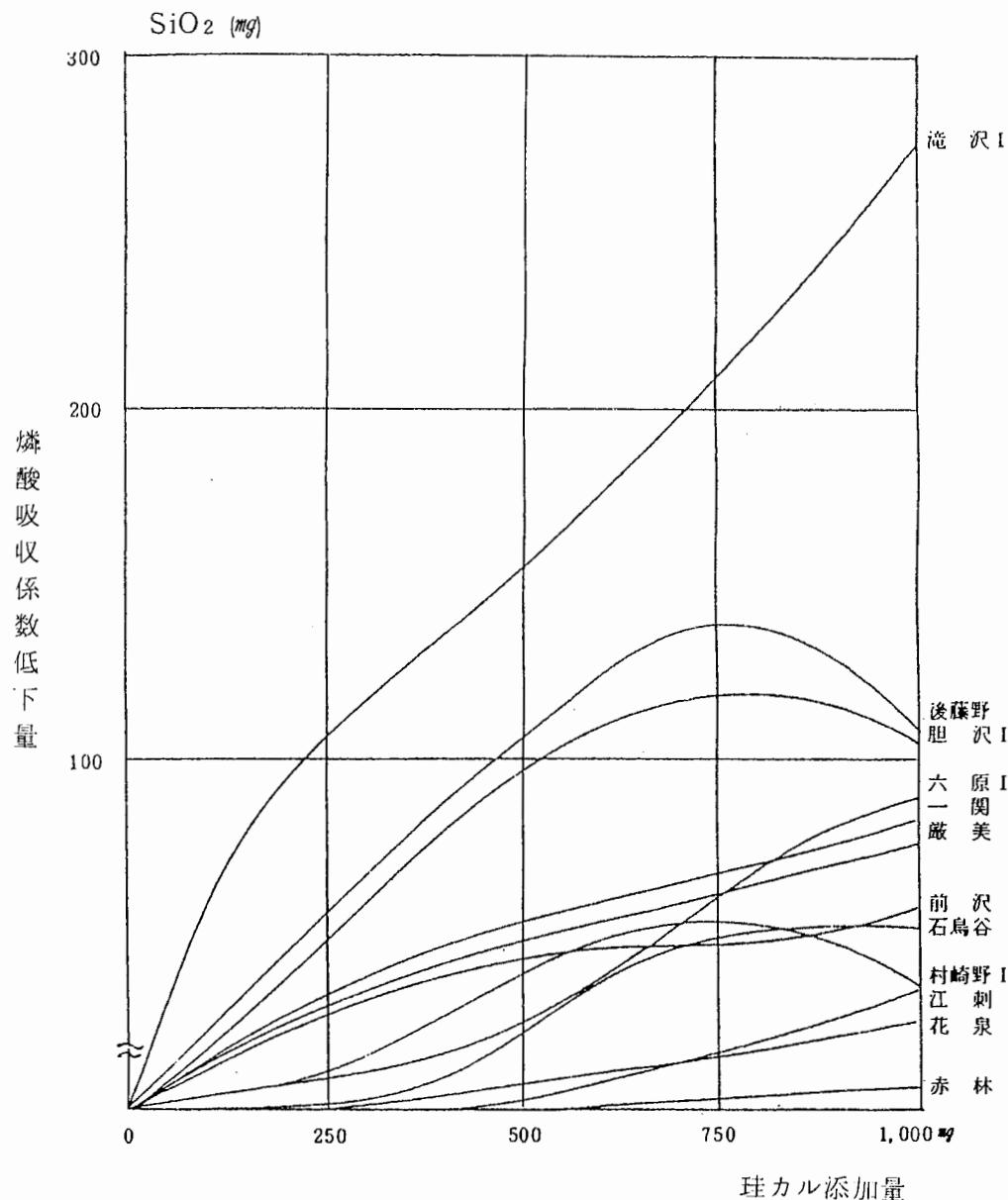


図-22 珪カル添加による磷酸吸收係数の変動

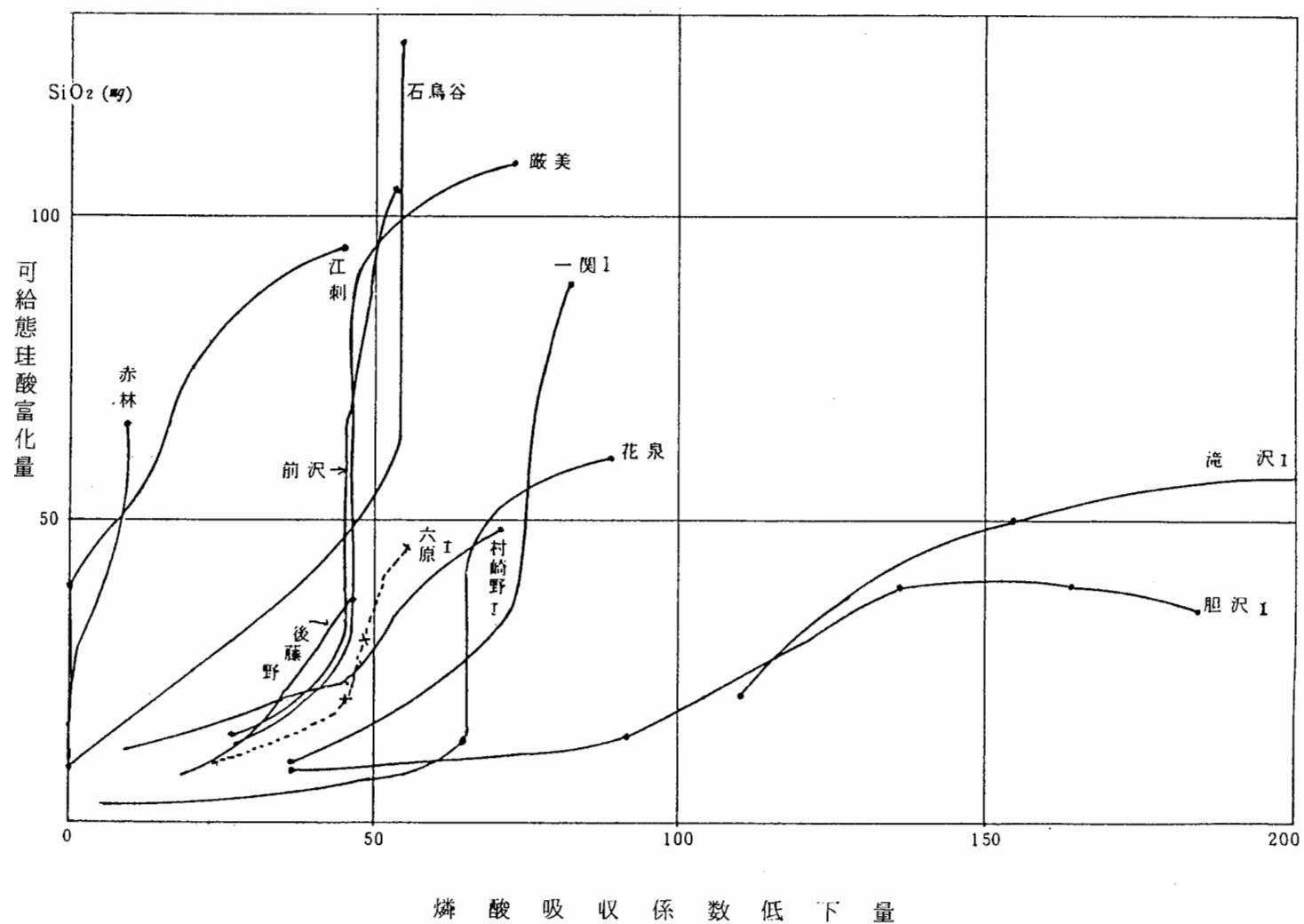


図-23 可給態珪酸富化量と磷酸吸收係数低下量との相関

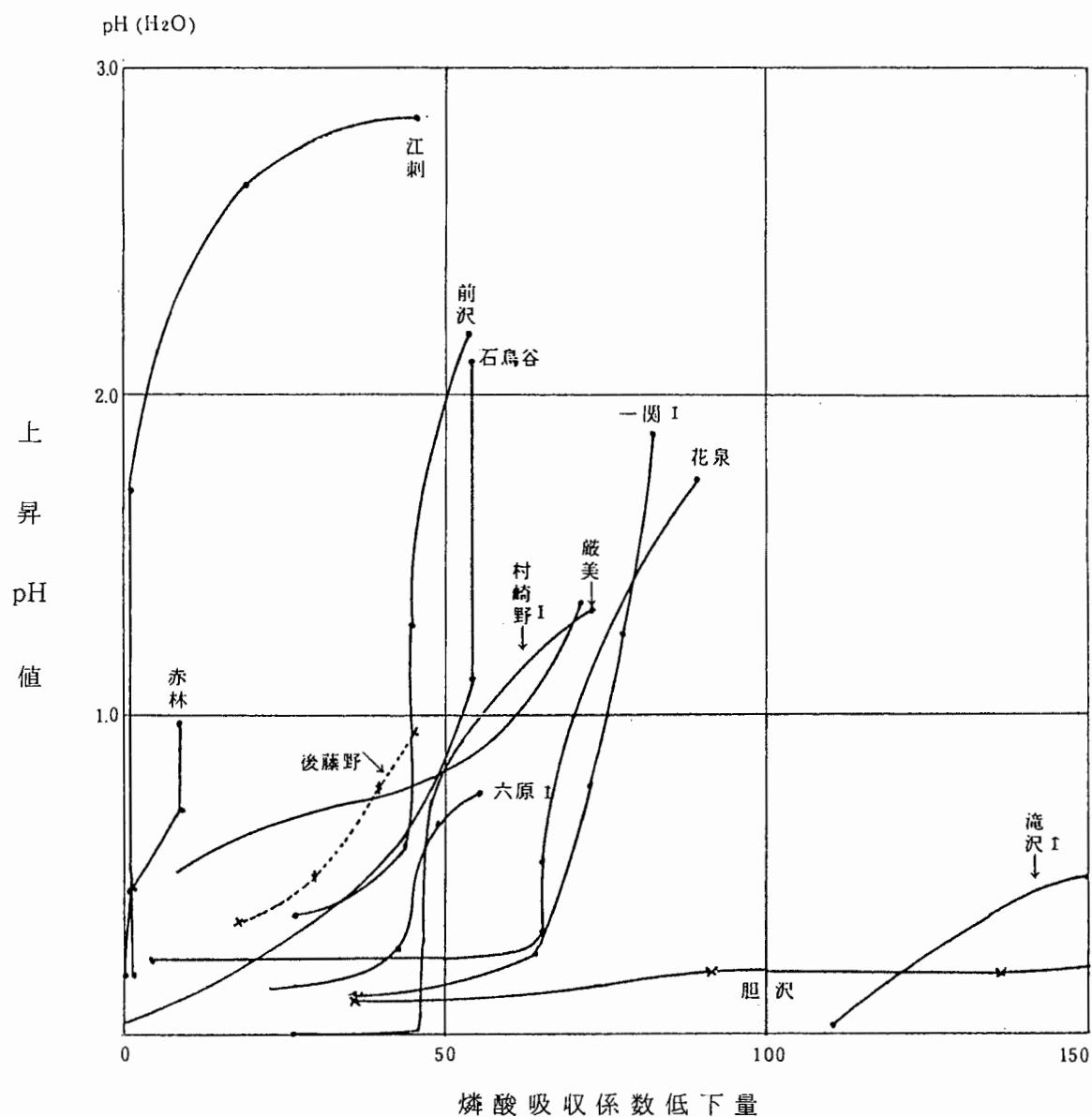


図-24 pHの上昇値と磷酸吸収係数低下量との相関

## 試験結果と考察

地質系統の異なる土壤を供試し、土壤 100gについて珪カルを 1,000 mgまで4段階に変えて添加し、添加 140 日後の土壤 pH、可給態珪酸の富化量、及び磷酸吸收係数の変動を調査した(表 - 58~59)。

### (ア) pH の変動

原土の pH ( $H_2O$ ) は 4.78~6.45 の幅があるが 5.2 前後の土壤が多かった。珪カル添加により pH は上昇したが、腐植含量の高い胆沢、六原、後藤野、赤林等の土壤は上昇程度が低いに対し、腐植含量の少ない江刺、前沢、石鳥谷等の土壤では大きかった。土壤の緩衝能として見れば当然土性も関連していると思われる(図-19)。

### (イ) 可給態珪酸の富化

原土の可給態珪酸は、新規火山灰の滝沢土壤で 120 mg 内外で著しく多く、逆に沖積土壤の江刺土壤で 10 mg 内外で少なかったほか、大部分の土壤は 30~40 mg の範囲にあった。

珪カル添加に伴う可給態珪酸の富化量は土壤により明らかに異なり、胆沢、後藤野、六原土壤は少ないので対し、前沢、江刺、石鳥谷、一関等の土壤は多かった(図-20)。この傾向は pH 上昇の傾向と類似している。すなわち、富化量の多い土壤は概して腐植含量の少ない三紀層、洪積層、沖積層土壤であり、富化量の少ない土壤は腐植質火山灰土壤に多い傾向である。ただしこの中で、滝沢土壤のみは腐植の多い 1 層土壤においても富化量は多くなっている。一方、pH の上昇と可給態珪酸の高い相関が見られる。

### (ウ) 磷酸吸收係数の低下

珪カルの添加による磷酸吸收係数の低下はほぼ各土壤に認められるが、その低下程度は概して小さく、最高でも 100 以下のものが多い。この中で比較的低下の大きい土壤は滝沢、後藤野、胆沢の 3 土壤でいずれも腐植質火山灰であるが、同じ腐植質火山灰でも、赤林、村崎野(洪積性)では低下程度は小さい。磷酸吸收係数の低下は、各土壤の pH、粘土鉱物の種類、アルミ、鉄含量等に影響されると考えられるから、簡単な比例関係は見られないと思われるが、さらに検討を継続する予定である。

また可給態珪酸の富化量と磷酸吸收係数の低下

量の相関を図-23について見ると、大きく 3 つのタイプに分けられる。第 1 は腐植の少ない三紀層あるいは沖積土壤で、磷酸吸收係数の低下に進まず可給態珪酸の富化に進むもの、第 2 は風積火山灰のように磷酸吸收係数の低下に働き、可給態珪酸の富化が少ないもの、第 3 のグループは腐植の多い洪積性の土壤で磷酸吸收係数の低下も可給態珪酸の富化量も小さいものである。この第 3 グループの生じた原因は、原土 pH が低いことと、腐植含量が高いことによると思われる。

以上のように、畑土壤に施用した珪カルの土壤中の行動は種々の点で興味深いものがある。

すなわち、珪カルの添加により土壤 pH は上昇し、可給態珪酸の増加、磷酸吸收係数の低下が見られるが、畑土壤の改良で問題になる酸性の矯正力については、緩衝能の強いと見られる土壤で、pH が動き難いことは当然であったが、土壤の種類により磷酸吸收係数の低下傾向がかなり異なることが知られた。

すなわち、腐植の少ない非火山土壤では、施用された珪酸は可給態珪酸として富化されるが、磷酸吸收係数の低下にあずかるところは少なく、腐植質火山灰土壤では磷酸吸收係数の低下にあずかるが可給態珪酸の富化量は少ないという逆の傾向である。このような形をとる傾向は土壤 pH との関連も高く、pH の著しく低い土壤では、可給態珪酸の富化も、磷酸吸收係数の低下にもあずかり難いのではないかと思われた。これらのこととは水田土壤に対する珪酸質資材の施用量の検討とも関連して、興味深い問題を提起していると考えられた。

## エ 有効磷酸目標設定方式による 土壤改良試験

室内実験による土壤型別の有効磷酸富化量の調査結果から、これを圃場試験において実証しようとした。すなわち、磷酸吸收係数の 10% 改良方式の土壤改良方法から発展させて、有効磷酸富化目標設定による土壤改良試験を実施した。

### (ア) 短根にんじん及びレタスに対する土壤改良の効果(その 1)(昭 51~54)<sup>34) 35)</sup>

試験場所：岩手郡滝沢村、農試圃場

供試作物：短根にんじん、MS 5 寸(51年)

レタス、グレートレークス 366(52年)

小麦	ナンブコムギ	(52年)
白菜	松島交配春秋白菜(53年)	
大豆	ナンブシロメ	(54年)

土壤条件；腐植質火山灰土壤

表-61 試験地土壤の化学性

層位	pH		腐植 (%)	全窒素 N (%)	磷酸吸収 係數	有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	塩基換量 (m e)	置換性塩基 (mg%)			仮比重
	(H <sub>2</sub> O)	(KCl)						CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	
I (0~17 cm)	5.90	4.80	14.4	0.50	1,800	4.0	24.4	217	22	37	0.97
II (17~25 cm)	5.75	4.80	15.2	0.51	1,480	Tr	24.2	243	19	15	-

試験設計；有効磷酸富化目標 (15 mg% P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) による資材施用量を表-62に示した。

表-62 有効磷酸富化目標の設定

処理	有効磷酸富化目標	土壤改良資材 (kg/10a)		
		炭カル	熔磷	重過石
標準区	現状 (4 mg%)	288	0	0
土壤改良区	15 mg%	288	605	89

土壤改良資材の投入方法；

とし、作土全層 (15 cm) に混入した。

炭カルはpH (H<sub>2</sub>O) の矯正目標を 6.2 にして施用、磷酸資材は作土 15 cm の有効磷酸目標を 15 mg%

なお土壤改良資材の投入は初年のみとした。

各区共通の施肥量を表-63に示した。

表-63 施肥設計

(kg/10a)

供試作物	N		P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O		堆肥 加用 区 み
	基肥	追肥	基肥	基肥	追肥	
短根にんじん	12	4 + 4	15	12	4 + 4	1,500
レタス	16	2	15	16	2	1,500
小麦	4	4	20	15	-	1,500
白麦	12	4 + 4	20	12	4 + 4	1,500
大豆	4	-	15	10	-	1,500

## 試験成績

第1作 短根にんじんから第5作 大豆迄の収量成績を、表-64 及び図-25 に示した。

表-64 収量成績

(kg/10a)

区名		第1作		第2作		第3作		第4作		第5作	
		短根にんじん		レタス		小麥		白菜		大豆	
		正常根重	比	結球重	比	子実重	比	結球重	比	子実重	比
1. 標準	A	2,560	99	1,300	86	284	95	5,763	90	273	93
	B	2,626	101	1,737	115	311	104	7,113	110	315	107
	M	2,593	(100)	1,517	(100)	298	(100)	6,438	(100)	294	(100)
2. 土壤改良	A	3,258	126	3,405	224	273	92	7,826	122	368	125
	B	3,118	120	2,388	157	315	106	7,096	110	347	118
	M	3,188	123	2,897	191	294	99	7,461	116	358	122
3. 土壤改良 堆肥	A	2,831	109	3,485	230	256	86	7,359	114	419	143
	B	3,040	117	3,572	235	298	100	6,153	96	385	131
	M	2,936	113	3,529	233	277	93	6,756	105	402	137

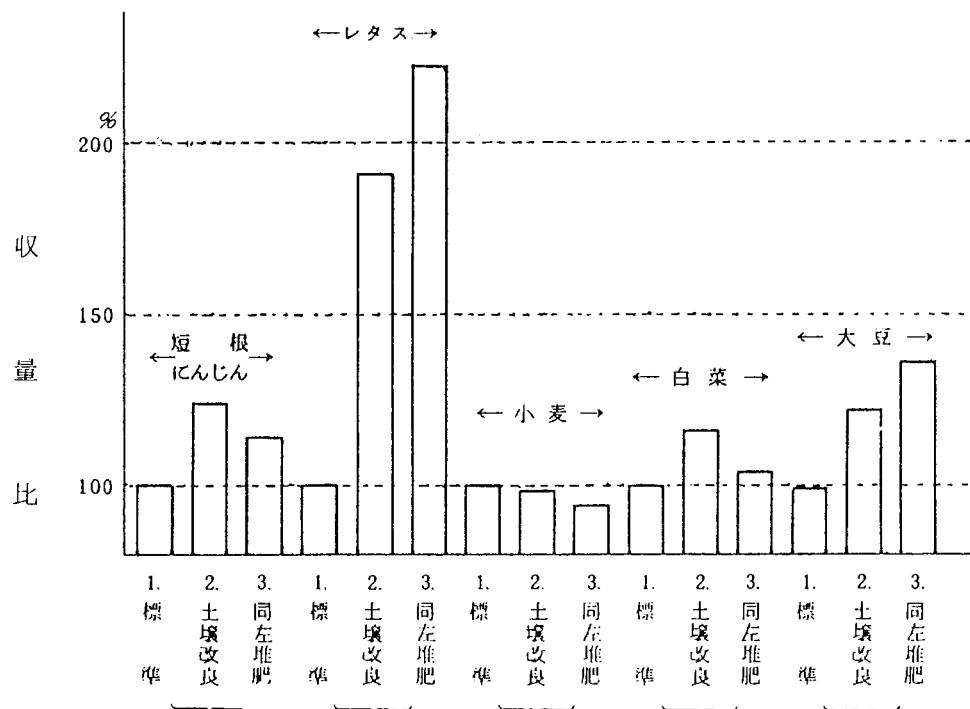


図-25 収量成績

表-65 短根にんじん（根重）

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全体	5	415,001		
処理	2	378,360	189,180	15.49*
誤差	3	36,641	12,214	

$$S_d = 110.5 \quad \ell_{sd} \ 5\% = 352 \text{ kg/10a}$$

$$F_{3,2}^2(0.05) = 9.55 \quad \ell_{sd} \ 1\% = 646 \text{ kg/10a}$$

表-66 レタス（球重）

項目	自由度	平方和	分散	分散比
全体	5	4,842,019		
処理	2	4,225,605	2,112,803	10.28*
誤差	3	616,414	205,471	

$$S_d = 453 \quad \ell_{sd} \ 5\% = 1,442 \text{ kg/10a}$$

$$F_{3,2}^2(0.05) = 9.55 \quad \ell_{sd} \ 1\% = 2,648 \text{ kg/10a}$$

注) 表-65~66 とも 2 連成績より処理

表-67 跡地土壤分析成績

区 名	pH		全窒素 N (%)	置換性塩基 (mg%)			磷酸 吸収 係 数	備 考
	H <sub>2</sub> O	KCl		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O		
1. 標 準	6.24	5.14	0.54	301	15	27	-	短根にんじん 跡
2. 土 壤 改 良	6.40	5.32	0.52	361	50	19	-	
3. 土壤改良・堆肥	6.56	5.43	0.54	386	69	29	-	
1. 標 準	5.66	4.99	0.49	263	11	18	2010	
2. 土 壤 改 良	6.07	5.34	0.50	380	54	19	1680	レタス跡
3. 土壤改良・堆肥	6.15	5.44	0.50	394	61	28	1620	
1. 標 準	5.39	4.99	0.52	223	8	28	2005	
2. 土 壤 改 良	5.84	5.28	0.50	310	37	31	1750	白菜跡
3. 土壤改良・堆肥	5.72	5.36	0.51	330	46	43	1725	
1. 標 準	5.26	4.87	0.50	188	7	14	-	
2. 土 壤 改 良	5.89	5.17	0.47	263	24	20	-	大豆跡
3. 土壤改良・堆肥	6.08	5.26	0.51	315	36	25	-	

注) 第4作跡地

表-67 跡地土壤分析成績(続)

区 名	有効 磷 酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)				
	第1作	第2作	第3作	第4作	第5作
	短根にんじん	レタス	小麦	白菜	大豆
1. 標 準	3.7	6.5	-	2.9	7.7
2. 土 壤 改 良	12.2	24.4	-	15.3	14.2
3. 土壤改良・堆肥	15.6	25.2	-	17.5	18.8

## 考 察

有効磷酸の富化目標を設定した土壤改良の可能性を実証するため、岩手農試圃場（腐植質火山灰土壌、岩手火山灰B統）において4カ年にわたり栽培試験を行なった。土壤改良の方法としては、pH矯正目標を6.2として炭カルを10a当たり288kg施用し、作土15cm相当の有効磷酸目標を15mg%とし、熔磷、重過石を用いて施用比を4:1(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)にして作土全層に混合施用した。

試験の結果は、磷酸質資材による有効磷酸15mg%改良の効果は、短根にんじん、レタス、白菜、大豆いずれにも認められた。小麦も生育中期迄良好な生育をしたが、最終的には土壤改良区、同堆肥区とも生育過剰から倒伏を来し減収になった。

供試作物の中ではレタスで肥効が最も高かったことは、これ迄の試験の傾向と同様である。短根にんじん、レタスについて収量の分散分析を行なった結果、両作物とも3処理間には5%水準で有意の差が認められた。ただし、レタスではA B間のバラツキが大きいため、lsd値が大きくなつた。

目標とした有効磷酸含量は、作土全層について施用60日後で15mg%であるが、第1、4、5作跡地についてはそれぞれ12.2、15.3、14.2mg%で

あり、施肥磷酸あるいは吸収磷酸の影響、さらには施用後日数の違いという種々の異なる条件が重なっているものの、ほぼ満足出来る目標範囲に入ったものと考えられた。これに対し第2作レタス跡地では有効磷酸が24.4mg%で異常に高かった。この理由については不明である。

また、すでに指摘したように<sup>36)</sup>、堆肥併用による有効磷酸の富化も認められた。

以上のように岩手農試圃場における腐植質火山灰土壌の改良には、有効磷酸目標設定による土壤改良法は、ほぼ実用化し得るものと考えた。

(イ) 短根にんじん及びレタスに対する土壤改良の効果(その2)(昭51~52)<sup>37)38)</sup>

試験場所 二戸郡一戸町 岩手園試箇冷地分場圃場

供試作物 レタス・グレートレークス 366  
(51年)  
短根にんじん、キング越越5寸  
(52年)

土壤条件；腐植質火山灰土壌の原土区、混層処理区(30cm)及び表土剥離処理区の3条件

表-68 土壤分析成績

処理	pH (H <sub>2</sub> O)	腐植 (%)	全窒素 N (%)	磷酸吸收 係 数	有効磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	置換性塩基(mg%)			仮比重
						CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	
原土系列	6.40	12.51	0.58	1940	4.6	361	19	58	0.75
混層耕系列	6.42	4.10	0.31	2440	0.8	205	10	37	0.75
表土剥離系列	6.49	2.05	0.10	2160	0.4	274	50	32	0.88

## 試験設計

表-69 土壤改良区の資材投入量(kg/10a)

処理	土壤改良資材		P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	
	熔磷	重過石	(熔磷)	(重過石)
1.原土系列	380	56	76	56
2.混層耕系列	670	100	134	34
3.表土剥離系列	670	100	134	34

土壤改良資材の投入方法；

作土のpHは6.4前後で炭カルは施用せず。

磷酸資材は作土10cm相当について有効磷酸15

mg%を目標に施用した。作土深は15cmであり、従って作土全層では有効磷酸は10mg%目標となつた。

表-70 施肥設計 (kg/10a)

供試 作物	N		P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O		堆肥 加用 区のみ
	基肥	追肥		基肥	追肥	
短根 にんじん	12	4+4	15	12	4+4	2,000
レタス	15	4	15	12	3	2,000

表-71 収量成績

(kg/10a)

処理・区名			短根にんじん			レタス		
			正常根重	同左欠株補正	比	結球重	同左欠株補正	比
原土系列	1. 標準	A	2,560			2,002		
		B	3,116			1,602		
		M	2,838	2,851	100	1,802	1,804	100
	2. 土壤改良	A	3,580			2,992		
		B	2,300			2,360		
		M	2,940	2,940	104	2,676	2,673	149
	3. 土壤改良堆肥	A	3,346			2,192		
		B	2,783			2,644		
		M	3,065	3,072	108	2,418	2,422	134
混層系列	4. 標準	A	2,160			292		
		B	2,520			1,475		
		M	2,340	2,356	82	884	941	49
	5. 土壤改良	A	3,665			852		
		B	2,772			2,730		
		M	3,219	3,204	113	1,791	1,823	99
	6. 土壤改良堆肥	A	3,474			2,435		
		B	3,070			2,474		
		M	3,272	3,272	115	2,455	2,456	136
表土剥離系列	7. 標準	A	522			329		
		B	488			0		
		M	485	485	17	165	164	9
	8. 土壤改良	A	2,153			1,650		
		B	1,865			1,255		
		M	2,009	2,006	71	1,453	1,449	81
	9. 土壤改良堆肥	A	2,290			1,669		
		B	2,982			1,832		
		M	2,636	2,624	93	1,751	1,753	97

(比は欠株未補正值)

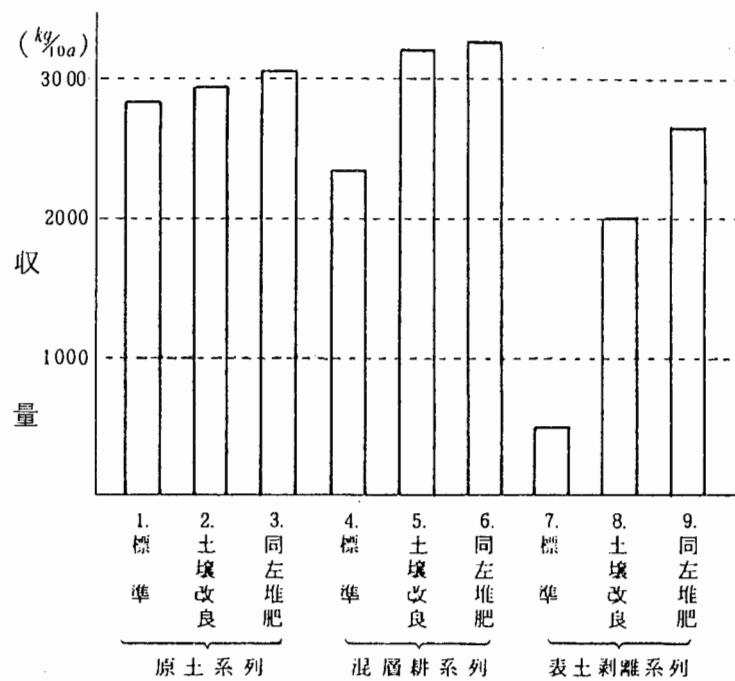


図-26 収量成績（短根にんじん）

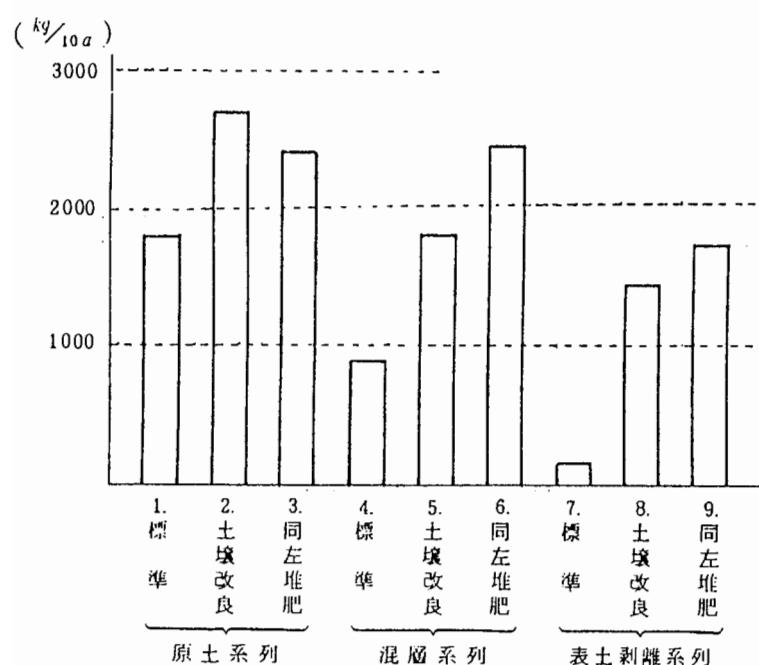


図-27 収量成績（レタス）

## 分散分析

(2元配置分散分析)

表-73 短根にんじん(根重)

項目	平方和	自由度	分散	分散比
処理(改良) A	3.9718	2	1.9859	9.1142 **
処理(土壤) B	6.1058	2	3.0529	14.0112 **
A × B	2.0701	4	0.5175	2.3751
誤差	1.9610	9	0.2178	
全体	14.1088	17		

表-74 レタス(球重)

項目	平方和	自由度	分散	分散比
処理(改良) A	5.3671	2	2.6835	8.0743 **
処理(土壤) B	4.1501	2	2.0750	6.2434 *
A × B	0.7694	4	0.1923	0.5787
誤差	2.9912	9	0.3323	
全体	13.2779	17		

注) 表-73~74、2連成績より処理

表-75 跡地土壤分析値

区 名	pH		全窒素 N %	置換性塩基(mg%)			有効 磷酸 P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg%)	備 考	
	H <sub>2</sub> O	KCl		CaO	MgO	K <sub>2</sub> O			
原 土 系 列	1. 標準	5.56	5.32	0.58	361	19	58	4.5	レタス跡
	2. 土壤改良	6.10	5.44	0.57	457	45	53	8.2	
	3. 土壤改良・堆肥	5.90	5.33	0.60	382	50	54	8.1	
混 層 耕 系 列	4. 標準	6.09	5.65	0.31	205	10	37	1.8	
	5. 土壤改良	6.70	6.13	0.27	475	104	30	5.8	
	6. 土壤改良・堆肥	6.74	6.10	0.34	520	119	38	7.8	
表 土 剥 離 系 列	7. 標準	5.61	5.18	0.10	274	50	32	2.0	
	8. 土壤改良	6.55	5.88	0.09	377	92	56	9.0	
	9. 土壤改良・堆肥	6.55	5.99	0.05	369	97	47	11.8	

## 考 察

有効磷酸の富化目標を設定した土壤改良の第二試験として、二戸郡一戸町の岩手県園芸試験場、高冷地分場圃場で、腐植質火山灰土壤を表土とする圃場、腐植質の表土を剥離して鉱質の火山灰を表土とした圃場、及び表層30cmを混層して、腐植質火山灰と鉱質火山灰を混層した圃場を造成して試験を行なった。各土壤の目標有効磷酸量は、作土10cmについて15mg%とし、作土15cm全層混入とした。したがって作土全層では10mg%となつた。土壤は原土（従来の作土）に比べ、混層土、下層土（表土剥離土）共に磷酸吸收係数が高く有効磷酸が少ないので、磷酸質資材の投入量は後二者で著しく多くなつた。

第1作レタスでは、原土系列、混層系列、表土剥離系列とも、磷酸質資材による土壤改良の効果は認められたが、収量水準は原土系列が高く、表土剥離系列は明らかに低かった。この理由は、潜在的な土壤窒素の発現の多少によるものと見られ、その結果土壤改良プラス堆肥区においては、堆肥の肥効が高く認められている。

第2作短根にんじんでは、混層系列の土壤改良区は原土系列よりむしろ勝る収量水準となつたが、表土剥離系列においては土壤改良プラス堆肥区においてもやや収量は低かった。

これらの収量成績について2元配置による分散分析を行なった結果、レタス、短根にんじん共、土壤改良及び土壤改良プラス堆肥の効果は1%の水準で有意性が認められた。また土壤処理の原土系列、混層耕系列、表土剥離系列間については、短根にんじんでは1%水準で有意性が認められたが、レタスではAB両区の収量差が大きいため、5%水準の有意性となつた。

また目標有効磷酸の富化量については、目標10mg%に対して第1作レタス跡の原土系列で8.2mg%、表土剥離系列で9.0mg%と、やや低目の水準となつたが、資材投入後レタス収穫まで約3ヶ月の期間があることを考慮すれば、これはほぼ満足できる値と考えられた。これに対し、混層耕系列においては5.8mg%であり、明らかに富化量が少なかつた。この理由については明らかでないが、前述の基礎試験から見て、磷酸吸收係数が最も高い土壤であることが、誤差を大きくしていることも考え

られる。ただ、土壤混入のバラツキ、耕深の程度など、作業上の問題も考えられるので、圃場試験としてはこれ以上の解析は出来なかった。

## 有効磷酸富化目標設定方式による土壤改良 試験要約

有効磷酸を殆ど含まない土壤において、磷酸吸收係数の10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の施用は、野菜をはじめ各作物の生育を良化させることができ明らかになつたので、次に磷酸吸收係数の10%までのP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>施用による土壤の有効磷酸富化量を調査し、その概略値は、磷酸吸收係数の10%の範囲内では1%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>あたり約1.6mg%の有効磷酸の富化という値を得た。そこで、有効磷酸富化目標を作土10cm当り16mg%前後にすれば土壤の磷酸肥沃度はほぼ充分に高められ、その残効も長期にわたるものと期待した。

このような考え方から、有効磷酸目標を15mg%として、農試本場の腐植質火山灰土壤及び園試高冷地分場の腐植質火山灰土壤、表土を剥離した鉱質火山灰土壤及びその混層土の4土壤条件で、レタス、短根にんじん（農試本場は更に小麦、白菜、大豆）を用いて試験を行なった。その結果、土壤改良の効果は、生育過剰により倒伏した農試本場の第3作（小麦）を除き、各作物に認められた。

一方跡地土壤によって有効磷酸の富化量をみると、磷酸吸收係数の最も高かった（2440）混層土で富化量が少なく、第3作の小麦作で異常に高かった他はほぼ目標に達した。磷酸吸收係数の高い土壤で有効磷酸の富化率が低くなる傾向が見られることは図-10からも明らかであるが、圃場においての耕起深度のふれ等も影響していることも考えられる。

このように15～16mg%の磷酸肥沃度を土壤改良の目標に置くとすれば、火山灰土壤の新墾畑の土壤改良に応用出来ることはもちろんのこと、野菜連作畑などで最近見られる磷酸過剰施肥の対策にもなり得ると考えられる。

すなわち土壤改良が進み作土10cm相当の有効磷酸が15～16mg%を越えるようになった場合は、土壤改良的な磷酸質資材の施用は行なわず、普通肥料としての磷酸施肥を行なうことにより、高冷地野菜のようなものでも充分生育を確保出来るも

のと考えられる。

### III 磷酸欠乏土壤改良対策総合考察

岩手県内の火山灰土壤はその噴出源の違いにより、土壤酸性の程度、置換性塩基含量あるいは有効態の微量要素含量等に大きな違いが見られる。

しかし、土壤の磷酸吸収係数が高く有効磷酸に不足し勝ちであることはほぼ共通したことであり、このことは、岩手県内の畑地全面積の約 56 % が火山灰土壤であるという地力保全基本調査結果からもわかるように、畑地力の向上のために是非とも解決しなければならない問題である。

磷酸欠乏土壤の改良基準を作成するに当って必ず問題になるのは、磷酸吸収係数の測定法と有効磷酸(可給態磷酸)の測定法である。磷酸吸収係数測定法は横井らの考え方従い、0.01M 正磷酸吸着法を採用した。また、有効磷酸については次のような考え方従った。すなわち、畑土壤の磷酸欠乏水準の判定のための有効磷酸の定量法は、栽培作物が多岐にわたるためもあって厳密に確立されたものが無いのが現状であるが、筆者らは、岩手県下において昭和 34 年以来、畑土壤の分析法として Truog 法を用い、これを有効磷酸の指標として解析を行ない、また施肥、土壤改良対策を実施して来た。ちなみに岩手県耕地土壤図の作製も、Truog 法による有効磷酸含量による分類基準にしたがった。また農業改良普及所における土壤診断室においても、Truog 法による有効磷酸の過不足の判定を行なっている。土壤中の有効磷酸と各畑作物生育との相関を厳密に検討するということからは、各種の有効磷酸分析法を比較検討する必要があるが、本研究においては以上のような検討の実績と普及現場での利用の実態を考え、有効磷酸の測定はすべて Truog 法とした。

岩手県内の畑土壤を長年にわたり調査した地力保全土壤調査の結果では、全畑面積の約 60 % に当る 35,000 ha は、有効磷酸含量が 10 mg% 以下であり、さらにその中の 9,000 ha は、2 mg% 以下である。

有効磷酸が 10 mg% 以下の土壤は、磷酸質資材の多用に土壤改良の効果が期待出来るが、磷酸質資材の施用量は以下に述べるように土壤の理化学

性を分析し、その結果より決定することが望ましい。

先ず第一に、火山灰土壤地帯における新墾畑土壤のように、土壤中に有効磷酸を殆ど含まない場合は、仮比重を考慮した作土 10 cm 相当の土量について、磷酸吸収係数の 10 % に相当する磷酸量 ( $P_2O_5$ ) を算定し、これを作土全層に施用すればその土壤改良効果は顕著である。この場合、磷酸資材としては熔磷と過石又は重過石の併用とするが、混合比は通常熔磷 4 に対し過石又は重過石を 1 としている。

熔磷と過石又は重過石を併用する理由は、熔磷による塩基及び持続的溶性磷酸と、過石、重過石による速効性の水溶性磷酸の供給を図るほかに、両者の併用により資材の pH を 6 前後に保ち、熔磷単独施用により起ると予想される土壤 pH の上昇と、それに伴う微量元素の有効度の低下を防止するためである。

以上のような土壤改良資材の算定法に基づいて、県内各地において圃場試験を行なった結果、普通畑作物よりもむしろ野菜類で効果が大きいことが認められた。とくに磷酸に感應性の高いレタスのような高冷地野菜では、収量が数倍になる例も見られ、この技術は現地農家にも取り入れられ、野菜畠地造成の魁ともなった。

次に新開墾地土壤のように土壤中に有効磷酸が殆んど含まれない場合は、磷酸吸収係数と仮比重の両者を測定して所要磷酸量を決定し得るが、土壤中に有効磷酸が含まれる場合には、磷酸吸収係数の比率だから、所要磷酸量を算定することは不合理であると考えられるから、目標有効磷酸量を設定し、これに達せしめるような土壤改良法の確立を目指した。すなわち、室内実験にあたって、磷酸吸収係数が 880 から 2320、腐植合量が 0.36 % から 16.81 % にわたる性格の異なる県内の代表的土壤 10 点に、過石、重過石、熔磷の 3 磷酸資材を用い、それぞれの単独および過石または重過石 1 に熔磷 4 の割合で混合した資材を用い、土壤の磷酸吸収係数の 2, 5, 10 %  $P_2O_5$  になるよう添加し、水分を畑状態(最大容水量の 60 %)にして、25 °C 定温器中でインキュベートし、140 日目までの有効磷酸含量の経時変化を追跡した。

それによると、過石と重過石では初期の有効磷酸吸収量が大きく異なる。

酸量は高いが、土壤pHの違いによる磷酸固定の影響を受け易く、そのため土壤間による有効磷酸富化量のふれが大きく、またインキュベート日数の経過と共に有効磷酸含有率低下の傾向が認められた。これに対し熔燐は、同一磷酸吸収係数比率では、土壤間の違いが最も小さく、またインキュベートによる有効磷酸含量の変化も前二者に比べて少ない。そのため、資材混合の場合でも、熔燐比の高いものほどふれの少ない有効磷酸の富化量を示す。いま、各土壤の磷酸吸収係数の2%に相当するP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を、過石、熔燐(1:4)又は重過石、熔燐(1:4)で施用し、畑状態で25℃で60日間インキュベートした時の有効磷酸富化量は約3mg%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>となり、5%相当のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の施用により、約8mg%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、さらに10%相当P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の施用により約17mg%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>になるとみてよい。すなわち施肥磷酸による土壤中の有効磷酸の富化量は、磷酸吸収係数の10%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の施用範囲内では、1%相当のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の施用で1.5~1.7mg%、平均ではほぼ1.6mg%内外と見た。この場合、熔燐主体の改良資材としてあり、他の資材では、土壤間の有効磷酸富化の幅は大きくなるが全平均値ではなく、磷酸吸収係数の5%施用を中心に見れば、1%当たり1.6mg%前後の富化量となる。なおインキュベート日数が140日に達すると、熔燐の富化量が最も高くなる。

以上のことから、畑土壤の好適条件としての有効磷酸の富化目標を、作土10cm相当で16mg%P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>とし、不足有効磷酸量は、各土壤の磷酸吸収係数を測定し、それによって所要磷酸量を算出し補給することとし、これを基準磷酸施用量とした。従って、有効磷酸が16mg%以上の土壤では、積極的な磷酸の多量投入は行なわないこととした。

次にこのような基準作成に対しさらに現地実証試験を実施した。現地試験では4土壤条件下で作土の有効磷酸目標を15mg%及び10mg%として圃場試験を実施した結果、短根にんじんとレタスの収量がいずれの土壤においても効果の高かったことはこれまでの試験結果と同様であり、また白菜、大豆でも磷酸富化の効果は認められた。これら試験の跡地土壤の有効磷酸含量を見ると、岩手農試圃場では目標15mg%に対し、第2作レタス跡は24.4mgと異常に高かったが第1作、第3作、

第4作、第5作では12.2~14.2mg%であり、高冷地分場圃場の目標10mg%に対しては、原土区で8.2mg%、混層耕区で5.8mg%、表土剥離区で9.0mg%となり、混層区では差が大きかったが、跡地土壤の分析値であることを考慮すれば、ほぼ目標に近い有効磷酸量を確保し得たものと考えた。

磷酸質資材による土壤改良の効果は持続性も長く、腐植質火山灰土壤の農試圃場で普通畑作物および野菜栽培試験を行った場合、例えば改良9年目、第12作白菜の収量は、未改良区に比べ、磷酸吸収係数の6%改良で指数143、12%改良で179で、磷酸の残効はなお明らかに認められ、また土壤中の有効磷酸含量も未改良区の10.4mg%に対し、6%改良区が20.8mg%で差は明らかに認められる。

一方磷酸資材の種類としては、熔燐、過石、重過石が用いられるが、効果の持続性、副成分の供給等の面から施用磷酸中の80%は熔燐で投入することを原則とする。もちろん単一の作物の場合は低pHを好むものもあり、当然土壤のpHによっては熔燐の比率を低くさせた方がよい場合もあり、酸性を好む陸稲などこの例であるが、普通の輪作体系を前提とする場合は、熔燐施用比を高める事が効果的である。このことは、室内実験（インキュベート試験）において見られたように、熔燐の施用が安定的に有効磷酸を富化させ、しかも長期間にわたりその変化が少ないとことからも言えることである。熔燐は磷酸吸収係数を低下させる力の強いことも利点の一つである。

磷酸質資材による土壤改良は、作物の種類によってその効果の現われ方を異にする。磷酸に対する感應性が著しく微弱で、収量的にプラスの影響をもたらし易い作物は、レタス、短根にんじん、白菜、小麦等であり、なかでもレタスは特に効果が出易い。レタスで磷酸の効果が著しく高いのは、レタスの養分吸収特性による所が大きいと思われるが、さらに種子が小さくて、貯蔵養分が著しく少ないと見られ、このことについて発芽試験を行なった結果では、播種後4日目（発芽後2日目）の子葉期において、すでに土壤からの磷酸吸収が行なわれ、生育上の差が生じることが認められる。このようなことは、同じ土壤条件下に発芽させた小麦の場合と比較すると、その違いはれき然としており、小麦の場合は土壤

からの磷酸の供給が少なくとも、発芽後 20 日間程度は施肥区と大差のない生育となる。岩手県においては高冷地野菜としてレタスの導入が図られているが、土壤改良資材費を早期に回収出来るということから、土壤改良実施当初は上記のような磷酸に対する感應性が敏感な作物の作付が望ましい。これに対して、大豆、小豆、陸稻などの子実生産を目的とする作物は、磷酸多用の効果は一般に小さい。この原因を見ると、陸稻の場合は、磷酸質資材の多施により磷酸の吸収量は増加するが、相対的に窒素不足となり、熟期の促進が逆に玄米の肥大にマイナスの効果となって現われることがある。従って窒素の追肥を考慮するなど総合的な施肥対策が必要となるし、また大豆、小豆の場合には磷酸質資材の多施により、窒素、磷酸とも吸収量は増加するが、茎葉が過繁茂になり、倒伏を招いて子実生産を伴わないことが多い。この場合の対策としては蔓化性の少ない品種の選択、あるいは密植栽培等が考えられる。

なお磷酸欠乏土壤の改良に際して施用される熔磷、過石、重過石によって土壤pHがどのように変化するかを追跡調査した。それによれば、これら改良資材によるpHの変動は土壤の緩衝能により左右されることは当然であり、また熔磷単用でpHは上昇し、過石、重過石単用でpHは低下するが、熔磷4に対して過石又は重過石1( $P_2O_5$ として)の併用になると、原土のpHを動かす力は小さいことが知られた。つまり野菜栽培などにおける土壤改良の一般的な手順としては、pH( $H_2O$ )の矯正目標を6.2~6.5として炭カルを施用し、作土10cm相當に有効磷酸量を16mg%になるよう熔磷、過石(重過石)比を4:1にして施用すれば、土壤pHは6.2~6.5からの変動はほぼ無視して良いと思われる。熔磷単用の場合はもちろんpHは上昇するが、10アール当たり $P_2O_5$ として200~250kgの多量施用であっても、腐植質火山灰土壤での土壤pHの上昇はそれ程大きくななく、せいぜい0.5程度に止まる。緩衝能の弱い鉱質土壤の場合はもちろん土壤pHの変動は大きくなるが、磷酸欠乏で土壤改良の対象になり易い火山灰土壤では変動は小さい。以上のようなことから、土壤改良の手順としては、たとえ熔磷を単用する場合においても、熔磷による酸性矯正の効果を過大視し

ないよう、炭カルによるpH矯正を別途考慮しておくことが必要である。

次に火山灰土壤に珪カルを添加することにより、塩基及び珪酸の補給によりばん土性を弱め、磷酸吸収係数を低下させることが可能なことが予想されるので、これを室内のインキュベート試験で検討した。

その結果、土壤pHに及ぼす影響は緩衝能の高いと見られる土壤で小さいことは当然であったが、土壤により磷酸吸収係数の低下の傾向は明らかに異なり、たとえば腐植の少ない非火山灰土壤では施用された珪酸は可給態珪酸として富化されるが、磷酸吸収係数の低下量は小さく、腐植質火山灰土壤では磷酸吸収係数の低下量は多いが可吸態珪酸の富化量は少ないという逆の傾向であった。又pHの著しく低い土壤では、可給態珪酸の富化量も、磷酸吸収係数の低下量も少しい傾向が見られた。

このように珪カルの土壤改良効果については、なお検討を要する点がある。

以上のように岩手県下に広く分布する磷酸欠乏土壤の改善技術対策についての検討を加えたが、磷酸欠乏土壤の解消のみならず、磷酸肥料の過剰施用にならないような合理的な施肥対策を樹立することが大切である。

#### IV 要 約

畑土壤改良基準策定のための研究の一環として、岩手県内に広く分布する火山灰土壤を主体に、磷酸欠乏土壤の合理的改良法を確立するための検討を行なった。その結果を要約すれば次のようである。

(1) 岩手県内には性格の異なる火山灰が各種分布するが、その代表的な火山灰は岩手山系火山灰土壤、焼石岳系火山灰土壤、十和田、八甲田系火山灰土壤の3種である。これら火山灰は、土壤酸性、塩基含量、微量要素含量などでそれぞれ異った性格を有しているが、磷酸吸収係数が高く有効磷酸が少ないということは共通した性質で、これが作物の生産力を規制しているところが大きい。

(2) 土壤中に有効磷酸を殆ど含まない場合の土壤改良法として、山本方式を現場対応に簡便なよう若干の変更を加え、作物も経営的に有利な野

菜類を主体に供試し検討を行なった結果、作土10 cm相当の土量について、磷酸吸収係数の7.7～10%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>を、過石(重過石)：熔磷比を1：4にして併用することにより、生育は著しく良化した。

(3) 磷酸質資材による土壤改良の効果は長く、農試の圃場では(岩手火山灰B統)9年10作まで認められ、その後も引き続き試験は継続され、持続効果の長いことが確認されている。

(4) 磷酸質資材による土壤改良効果の大小を作目により比較すると、最も大きいのはレタス、短根にんじん、白菜、小麦であり、やや大きいのはきゅうり、ばれいしょ、ソルガム、トマトであり、小さいのは陸稻、大豆、小豆、青刈とうもろこし、菜豆、だいこんであった。

(5) 土壤中に有効磷酸を含む場合の改良法設定の検討の結果、磷酸吸収係数の1%のP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>(熔磷4：過石1等熔磷主体)の施用で、土壤中の有効磷酸は約1.6mg%富化されることがわかり、これより改良基準を作成した。

(6) 有効磷酸目標を設定して土壤改良を行なって圃場試験を行なった結果、ほぼ目標通りの成果が得られた。

(7) 磷酸供給資材としての熔磷、過石、重過石のほかに、土壤反応を変動させる要因となるこれらの資材について検討した結果、熔磷と過石又は重過石の混合物は土壤pHに与える影響は概して小さかった。

(8) 硅カルも塩基と硅酸を補給することにより土壤の磷酸吸収係数の低下にあずかるが、その程度は土壤により著しく異った。

## V 引用文献

- 1) 岩手農試 開拓地現地栽培試験成績書 (1948～1965)
- 2) 山本毅、高橋達児；改良資材による畑土壤の肥沃化 第2報 改良資材の施用が、土壤および作物の要素吸収におよぼす影響 東北農試研究報告 35 19～36 (1967)
- 3) 山本毅 宮里憲 畑土壤の生産力増強に関する研究 岩手火山灰土壤における磷酸質資材多施用の効果 東北農試研究報告 42 53～92 (1971)

- 4) 黒沢順平 岩手県下の火山灰土壤の分類とその生産増強対策 岩手農試研究報告 14 (1970)
- 5) 石塚喜明 岩手山麓開拓地土壤について 農林省開拓局 岩手県 (1948)
- 6) 井上克弘 秋田駒ヶ岳火山噴出物の<sup>14</sup>C年代 地球化学 32、221 (1978)
- 7) Katsuhiro Inoue, Stratigraphy, Distribution, Mineralogy and Geochemistry of late Quaternary Tephras erupted from the Akita-Komagatake volcano Northeastern Japan Soil Sci., Plant Nutr. 26(1) 50 (1980)
- 8) 村山盤 火山活動と地形 大朋堂 135 (1973)
- 9) 村井貞充 岩手山 岩手放送株式会社 32～34 (1973)
- 10) 農林省農地局 開拓地における地力の変せんと今後の維持増強対策 122～124 (1968)
- 11) 黒沢順平ほか 銅欠乏土壤に関する調査研究(第1報) 岩手農試研究報告 8 (1965)
- 12) 関沢憲夫ほか 亜鉛欠乏土壤に関する研究 岩手農試研究報告 16 (1972)
- 13) 黒沢順平 4) に同じ 41
- 14) 黒沢順平 4) に同じ 43～46
- 15) 松野正 十和田・八甲田火山噴出物 青森農試研究報告 6 (1961)
- 16) 黒沢順平 4) に同じ 27
- 17) 岩手農試 昭和42年度地力保全調査事業試験成績書 9～16 (1968)
- 18) 岩手農試 地力保全基本調査総合成績書 (1978)
- 19) 岩手農試 昭和38～47年 りん酸質資材による火山灰畑土壤の改造に関する試験成績書(要約) (1973)
- 20) 農林水産技術会議事務局 實用化技術レポートNo.71 土壤改善を基盤とする畑作生産力増強法 (1979)
- 21) 高橋健太朗ほか 岩手県農業試験場70年史 火山灰畑土壤の改造と維持増強 202～210 (1971)
- 22) 岩手農試 昭和52年度 土壤肥料に関する試験成績概要 39～40 (1978)

- 23) N. J. Barrow. The Role of Phosphorus in Agriculture. 353 - 354 ASA, CSSA, SSSA, Madison, Wisconsin, USA (1980)
- 24) Pedro A. Sanchez & Goro Uehara. 同上 496
- 25) 岩手農試 昭和51年度、土壤肥料に関する試験成績概要 43 - 44 (1977)
- 26) 岩手農試 昭和50年度、土壤肥料に関する試験成績書（畑作） 35 - 54 (1977)
- 27) 千葉明ほか、畑土壤改良基準策定のための基礎研究（第3報）りん酸質土壤改良資材による土壤型別有効りん酸の富化量 日本土肥誌講要集、第22集 Part II 28 (1975)
- 28) 農林省振興局；耕土培養法に基く調査における土壤分析法 38 - 39 (1959)
- 29) 農林省農業改良局；耕土培養法に基く調査における土壤分析法 74 - 75 (1953)
- 30) 岩手農試 26) に同じ、 55 - 82
- 31) 千葉明、新毛晴夫ほか、畑土壤改良基準策定のための基礎研究（第1報）炭カル添加通気法による中和石灰量測定法、岩手農試研究報告20号 1 - 21 (1977)
- 32) 岩手農試 昭47~49年度、土壤肥料に関する試験成績書（基礎試験） 59 - 69 (1975)
- 33) 吉田昌一 土壤養分分析法 278 - 280 養賢堂 (1970)
- 34) 岩手農試 昭51年度地力実態調査成績書、 136 - 147 (1978)
- 35) 同上 昭和52年度地力実態調査成績書、 136 - 147 (1978)
- 36) 千葉明、石川格司ほか、畑土壤改良基準策定のための基礎研究（第2報）畑土壤肥沃度に及ぼす有機物の効果解析、岩手農試研究報告21号 37 - 68 (1978)
- 37) 岩手農試 昭和51年度土壤肥料に関する試験成績概要 43 - 44 (1976)
- 38) 同上 47 - 48 (1977)

## Summary

The volcanic ash soils are so widely distributed in Iwate prefecture that it is important to amend the phosphate deficiency of upland soil especially vegetable fields. So we have pursued the methods of phosphate application to control the available phosphate content in the soil.

The results is as follows.

1. The available phosphate content of soil suitable for vegetable crops was about 15-17mg P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> (Truog Method) and this value was obtained by application of phosphate mixture, that is, the mixture of 4 parts of fused phosphate and 1 part of super phosphate or double phosphate.  
The mixture is corresponding to 10% of P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> respectively phosphate absorption coefficient of the soil.
2. Great efficiency for the crop production was obtained by soil application of phosphate mixture and the effect was continuous for 9 years (10 crops) in Iwate volcanic ash fields.
3. The sensitivity of crops for phosphate application is generally as follows.  
sensitive group; letucce, carrot, Chinese cabbage, wheat.  
middle group; cucumber, potato, tomato.  
insensitive group; upland rice, soybean, Azuki bean.
4. Soil pH is varied greatly by application of phosphate material to the soil but is varied very small with phosphate mixture of 4 parts of fused phosphate and 1 part of super phosphate or double phosphate.
5. Soil phosphate absorption coefficient was declined with application of calcium silicate but their degree of declamation was widely different in each soils and we could not unravel the mechanism of declamation of phosphate absorption coefficient.